日本の昔話
柳田国男
新潮文庫

カバー 太田大八

日本の昔話

柳田国男

新潮文庫

日本の昔話 柳田国男

新潮文庫〔草〕 四七 =3= C 220

『聴耳頭巾』や『藁しべ長者』など、広く世に知られた話から『猿の尾はなぜ短い』や『海の水はなぜ鹹(から)い』など、古くから語り伝えられた形をそのまま残したものまで。私たちを育んできた昔話のかずかずを、民俗学の先達が各地からあつめて美しい日本語で後世に残そうとした名著。人間と動物たちとの騙しくらべや、長者ばなしのなかに、日本人の素朴な原型を見ることができるだろう。

ISBN4-10-104703-0 C0139 ¥220E 定価220円

〜〜新潮文庫〜〜
柳田国男の作品

遠野物語
日本の伝説
日本の昔話

カバー印刷 錦明印刷

新潮文庫

日本の昔話

柳田国男著

新潮社

日本の昔話

柳田国男著

新潮文庫

日本の昔話

柳田国男著

新潮社版

3043

日本の昔話

新訂版の始めに

　ちょうど此本が始めて世に出た頃から、我邦の昔話蒐集事業は急に活気づいて来ました。今まで一向に斯ういうものの有ることを聴かなかった地方から、曾て一度も文字の形になって、人に読まれたことの無い昔話が、幾つともなく報告せられました。日本が特別にたくさんの説話を保存して居る国だったということと、人が説話を愛する趣味の遺伝は、そうたやすく中断せられるもので無いということが、是に依って証明せられたのであります。私たちは無論この好機会を遁がさぬように努めました。会をこしらえて全国の同志者の協力を求め、昔話研究の雑誌を出し、又一冊に纏まるほどの昔話集は、出来るだけ出版して世に伝えようとしました。しかし世の中の好みが斯ういう風に向いて来なかったら、我々の熱心も実は持って行きどころが無かったので、折角出して置いたこの「日本の昔話」も、或はこの様にまで弘く読まれずにしまったかも知れません。

　改めて著者が皆様に言うことの出来るのは、この中に載せてある昔話の大部分は、何れも日本国の隅々に於て、お互いに他の土地にも有るということを知らずに、ほんの少しずつの

ちがいを以て、各々その先祖から聴き伝え、記憶し伝えて居たものだったということであります。東北地方の話が此本には多いけれども、あちらにだけあって他には無いというものが、もう今日ではほとんど一つも無いという実状であります。今や安心して我々は、是を日本国の昔話だということが出来るのであります。今まで聴かなかったのは忘れて居た為であって、決して自分の土地に昔から、伝わって居なかったからではないということが、今ならばほぼ確かに言えるのであります。ただ永い年月の間には、同じ一つの昔話が土地により家によって、幾分の変化を受けて居ります。元は一つであったということは容易に認められても、そのちがったもののどちらの方が前か、それが又どういう事情で語りかえられたかということは、そう手短かにはきめることが出来ません。そうして其点が又昔話研究の、最も興味の多い部分なのであります。各地の採訪には是からも大いに骨を折らなければなりませんが、それには又斯うした一つの見本帳のような書物が、弘く読まれて居るということは、非常に好都合なのであります。

或は新たにもう一つ、全国を代表した標準昔話集のようなものを、出して置く方がよいとも思いますが、今となってはそれを選り出すことが却って困難なのみならず、この一冊の中にも其方に加えてよいものが幾つか有るので、之をばらばらにほぐしてしまうのが惜しいのであります。この「日本の昔話」は、年の若い人たちにも読んでもらおうと思って、成るだ

け筋の込入らない、さっぱりとした話を拾いました。その方針を続けて行くとすると、結局はあまり色々な新らしいものを加えられませんから、まだ当分のうちはこの形のままで置くことにします。之を何度も読んでから後に、もう少し昔話のちがったものを知りたいという人々の為には、新たに計画を立てて、別に詳しい比較をした書物を、出して置きたいと思って居ります。我々の仲間では数年以前、「昔話採集手帳」という小冊子を作って、是から昔話を集めて見ようという人たちに分配しました。昔話というべきものの範囲、その中でも日本に最も普通なのはどういう昔話かということを、実例によって説明して置きました。それを標準にするとこの本の中には、やや異なったものが七つ八つまじって居ります。「乞食の金」とか「拾い過ぎ」とか「山賊の弟」とかいうのがそれでありまして、つまりは古くから伝わった昔話に、何人かが加工して実話の形にしたもので、読みものの興味を添える為に入れましたが、是は我々の研究して居る昔話の外であります。強いて分界を明かにする必要も無いと私は思いました。目的は全く古くから伝わった説話には、聴いて面白いものが多いということを、若い人たちに知らせる為だったからであります。

昭和十六年八月

はしがき

皆さん。この日本昔話集の中に、あなた方が前に一度、お聴きになった話が幾つかあっても、それは少しも不思議なことではありません。なぜかというと、日本昔話は、昔から代々の日本児童が、常に聴いていたお話のことだからであります。

この昔話の大部分は、今でも日本のどこかの隅で、どこかの家の小さな人たちが、聴いている話であります。けれども皆さんが一人で知っておいでになる話は、そうたくさんはないだろうと思います。それはお話をする人が忙がしくなって、もうそうはゆっくりと色々の話をしていられないからであります。だから若しこの本にある話の三分の一、四分の一だけでも、一人で知っている児童があったとすれば、それは其子の家に、よっぽど話の好きな又上手な、そうして物覚えのよいお祖母さんかお祖父さん、又はお母さん姉さん叔母さんなどの、子供の心持のよく解る人があった為で、そういうお家は昔からそうたくさんにはありません。もう一度思い出してよくお礼をいう方がいいのです。

次にこの昔話集に書いてある昔話と、自分の覚えている家のお話と、人の名や土地の名、

道具や鳥獣、歌や言葉、又は事がらの後先などの違っていることがあっても、それも格別不思議なことではないのです。どちらか一方がうそだろうと思ったり、又は自分の記憶が誤まっているように、思ったりするには及びません。昔話というものは最初から、ほんの僅かな人で一しょに聴き、又其中でも一人か二人かが、それを後から生れて来る者に、話して聴かせることが出来たのであります。作りごとをする必要が少しもないと共に、知らずに間違えていても、それを直してくれる者はいませんでした。永い年月の間には、村により又家庭によって、少しずつ変って来るのはあたりまえのことであります。同じ一つのお話でも何度も何度も覚えたり思い出したりしているうちには、自然に面白いと思うところが動いて行くのです。そうしてその面白いところだけが特別に詳しく話されるようになって、他の残りの部分がおいおいに取れたり落ちたり壊れたりするのであります。

私は日本の昔話を、この小さな一冊の本に集める為に、少しでも変った珍らしいものを探そうとはしませんでした。それよりも、なるたけ全国の多くの児童が、聴いて知っているだろうと思うものを拾いました。少なくとも日本国内の遠く離れた二箇所三箇所で、お互に知らずに話しているようなのを、選んで見ようとしたのであります。ただしそういう幾つかある話の中では、殊に一番昔話らしいもの、即ち古い形のちっとでも多く残っているものを採るようにいたしました。それから新らしい形の最もよく整ったものを四つか五つか其中に加

えて置きました。これが日本の昔話の両端であります。多分誰が見てもこの古いと新らしいとの区別は、すぐに分るであろうと思います。

何よりも私の愉快に思ったのは、日本全国の何億万人という昔からの子供が、この同じ話を聴いて育って来たということであります。それから今でもまだ其話を知っている人の少なくないということであります。それが此本を読んでいると段々にわかるのであります。又面白いことは、まるで同じかと思っている話が、いつの間にか少しはちがっていることであります。どこがどう違うかは読んで見ればすぐに気が付くでしょう。どうしてこんなに違って来たか、皆さんは大きくなってから、もう一度考えて御覧なさい。

昭和五年二月

猿の尾はなぜ短い

昔の昔の大昔、猿の尻尾は三十三尋あったそうです。それが熊のために騙されて、あのような短い尻尾になってしまいました。或時猿は熊のうちへ訪ねて行って、どうすれば沢山の川の魚を、捕ることが出来るだろうかと相談しました。そうすると熊が言うには、今晩のような寒い晩に、どこか深い淵の上の岩に坐って、その尻尾を水の中へ漬けて置いてごらん。きっと色々な雑魚が来てくっつくからと教えてくれました。猿は大喜びで教えてもらった通りにして待っていますと、夜が更けて行くうちに、段々と尻尾が重くなりました。それは氷が張って来たのでしたが、お猿は雑魚が来てくっついたのだと思っていました。もう是くらい捕れたら十分だ。あんまり冷たいから還りましょうと思って、尻尾を引き上げようとしたけれどもなんとしても抜けません。これは大変だと大騒ぎをして、無理に引張ったところが、其尻尾が根元からぷっつりと切れました。猿の顔の真赤なのも、その時あまりに力を籠めて引張った為だと言っている人があります。（出雲）

海月骨無し

大昔、竜宮の王様の御妃がお産の前になって、猿の肝が食べて見たいという、珍らしい食好みをなされました。竜王はどうかしてその望みをかなえて遣りたいものと、家来の亀を喚んで、何かよい考えはあるまいかと尋ねられました。亀は知慧のある者で、早速日本の島へ渡って来て、ある海岸の山に遊んでいる猿を見つけました。猿さん猿さん竜宮へお客に行く気はないか、大きな山もあり御馳走はなんでもある。行くならば僕が負うて行ってあげると言って、大きな背なかを出して見せました。猿はうっかりとこの亀の口車に乗って、嬉しがって竜宮見物に出かけました。成程かねて聞いていたよりも美しいお屋敷でありました。中の御門の口に立って、亀の案内してくれるのを待っていますと、門番の海月が猿の顔を見て笑いました。猿さんはなんにも知らないな。竜王様の御妃がお産の前で猿の肝が食べたいとおっしゃるのだ。それで君がお客に呼ばれて来ることになったのにといいました。こいつは大変だと思いましたけれども、猿にも智恵があるので何食わぬ顔をしていますと、やがて亀が出て来てさあこちらへと言いました。

亀さん僕は飛んでもないことをした。こんなお天気模様なら持って来るのだったが、うち

の山の樹に肝を引掛けて、乾して置いて忘れて来た。雨が降り出したら濡れるだろうと思って心配だと言いました。なんだ君は肝を置いて出て来たのか、それじゃもう一度取りに行くより他はあるまいと、再び亀が背中に載せて、元の海岸まで戻ってまいりました。そうすると猿は大急ぎで上陸して、一番高い樹の頂上に登って、知らん顔をして方々を見ています。亀がびっくりして猿君どうしたというと、海中に山無し、身を離れて肝無しと言って笑いました。是は竜宮で門口に待っているうちに、あのおしゃべりの海月がしゃべったに相違ないと、亀は還って来て竜王に訴えますと、けしからぬ奴ということで、皮は剝がれる。骨は皆抜かれる。とうとう今の海月の姿になってしまったのは、全くこのおしゃべりの罰だということであります。

雀と啄木鳥

昔の昔、雀と啄木鳥とは二人の姉妹であったそうです。親が病気でもういけないという知らせの来た時に、雀はちょうどお歯黒を附けかけていましたが、すぐに飛んで行って看病をしました。それで今でも頬ぺたが汚れ、嘴も上の半分だけはまだ白いのであります。啄木鳥の方は紅をつけ白粉をつけ、ゆっくりおめかしをしてから出かけたので、終に大事な親の死

目に逢うことが出来ませんでした。だから雀は姿は美しくないけれども、いつも人間の住む所に住んで、人間の食べる穀物を、入用なだけ食べることが出来るのに、啄木鳥は御化粧ばかり綺麗でも、朝は早くから森の中を駆けあるいて、がっか・むっかと木の皮を敲いて、一日にやっと三匹の虫しか食べることが出来ないのだそうです。そうして夜になると樹の空洞に入って、おわえ、嘴が病めるでやと泣くのだそうです。（津軽）

鳩の孝行

昔の昔、鳩はほんとにねじけ者で、ちっとも親の言うことを聴かぬ子であったそうです。親が山へ行けといえば田へ行き、田へ行けといえば畠へ出て働いていました。親が死ぬ時に静かな山に葬って貰いたかったけれども、そう言うと又反対の事をするだろうと思ってわざと川原へ埋めてくれと頼んで死にました。

ところが鳩は親が死んでから、始めて親の言うことを聴かぬのは悪かったと心付きました。そうして、今度はその言いつけの通りに、川原へ行って親の墓をこしらえたのだそうであります。然し川のふちでは、水が出るたびに墓が流れそうで気がかりでたまりません。それ故に今でも雨が降りそうになると、この事を考え出して悲しくなって、ととっぽっぽ・親が恋しいといって鳴くのだそうであります。もう少し早くから、親のいうことを聴いておればよかったのであります。（能登）

時鳥の兄弟

むかしむかし、時鳥には大へん親切な善い弟があったのだそうです。毎年五月になると山に行って沢山の山の薯を掘って来て、煮て一番おいしいところを兄さんに食べさせました。それを兄の方ではまだ疑って、弟がもっと旨い山の薯を、自分では食べているのだろうと思って、しまいには憎んで庖丁を持って来て、その優しい弟を殺したのだそうです。そうして弟の腹を裂いて見ると、中からあわたという筋ばかり多い薯が出て来ました。これは悪い事をしてしまったと、後悔して悲しんでいるうちに、とうとうこの鳥になってしまったのだそうです。だから今でも山の薯を掘る時節になると鳴いて方々を飛びまわります。よく聴いているとあの声は、

おとと恋し
掘って煮て食わそ
弟こいし

藷ほって食わそ
と言って啼くのだそうであります。(越中)

時鳥と百舌

むかしむかし、時鳥は又沓を作る職人であったという話もあります。百舌という鳥は其頃は馬方であったそうです。百舌の馬方は時鳥に頼んで、毎度馬の沓を打ってもらって、ちっとも其代金を払いませんでした。それを覚えていていつ迄も、時鳥は沓の代はどうしたと鳴くのだそうです。そうすると、百舌は面目無いものだから、時鳥の出て鳴く頃には、どこかへ隠れていて少しも顔を出しません。そうしていろいろの小虫を樹の小枝などに刺して置いて、時鳥の機嫌を取ろうとするのだそうです。(紀州那賀郡)

しかし又こんな話もありますから、どちらが本当だかよくは分りません。昔百舌は酒がすきで、時鳥の金を預かって、御仏壇の仏様を買って来る約束をして置きながら、その金で酒を飲んでしまいました。それで時鳥が毎年其時になると、本尊掛けたかと鳴くのは、催促をするのだということであります。百舌はそう言われると困るものだから、成るたけ黙って出て来ないようにしている。百舌の顔の赤いのは、お酒を飲んだからだと言いますが、事によ

るときまりが悪いからかも知れません。(同 有田郡)

梟染め屋

むかしむかし、梟は染物屋で、多くの鳥に頼まれて、色々の衣裳を染めてやるのが商売であったそうです。その頃烏は大へんなおしゃれで、いつも真白い着物を着て飛びあるいていました。その烏が梟の染め屋へ来て、どうか私の衣裳を又とないような色に染めてくれと注文しました。梟はその注文を引き受けて、真黒々の炭のような色に染め、是が世界に又とない色だと言いました。烏は非常に腹を立てましたけれども、もうどうすることも出来ませんでした。それでも其怨みを忘れないで、梟の顔さえ見れば怒っていじめます。それ故に梟は今でも森の奥に隠れて、烏の起きている間は決して外へ出て来ぬばかりでなく、たまにいる所を烏に見つかると、ひどい目に遭うのであります。(陸中岩手郡)

蟬と大師様

むかし弘法大師が乞食のようなきたない衣を着て、諸国の田舎を巡っておられた時に、あ

る村の百姓の家に来て、一夜の宿を貸してくれと頼まれました。百姓はあんまり大師の身なりが悪いので、すげなく断って帰してしまいました。そうして後になって、始めてそれが弘法大師だということに心付きました。それで大急ぎに欅(けやき)の樹の上に登り、大きな声で弘法様よーい、弘法様よーいと呼び立てましたけれども、もう遠くへ行かれたと見えて帰って来られません。それをいつ迄も一心になって呼んでいるうちに、とうとう其百姓はちばひめという蝉になったのだそうです。今でも七月の二十三日になると、欅の大木にこの蝉が集まって高い声で啼くのは、この日が大師様の一夜の宿を借りに、まわって来られた日だろうと言っておりました。(常陸(ひたち))

鷦鷯(みそさざい)も鷹(たか)の仲間

大昔色々の鷹が集まって酒盛りをしている所へ、小さな鷦鷯が遣って来て、僕も仲間に入れて下さいと言ったそうです。鷹の同勢はこれをばかにして、この仲間に入りたければ猪(いのしし)を捕って来るがいい。猪を捕って来たら酒盛りに加えてやろうと言いました。そうすると鷦鷯はすぐに飛んで行って、藪(やぶ)の中に寝ている猪の耳の中に飛びこみました。猪はびっくりして駆け出しましたが、小さな鷦鷯が耳の中であばれるので、苦しくてたまらぬから夢中になっ

て狂いまわり、とうとう岩の角に頭をぶっつけて死んでしまいました。それで大威張りで帰って来て、鷹の仲間に入って酒盛りをしたそうであります。この時に熊鷹という大きな鷹が、負けぬ気になって、飛び出して行ったところが、猪が二匹つれ立って走っていました。それを一ぺんに二つ共捕ろうと思って、右と左との足を一匹ずつに掛けたら、猪が両方へ遁(に)げて行こうとした為に、慾深(よくふか)の熊鷹の股(また)が裂けてしまったという話もあります。(播磨(はりま))

狸(たぬき)と田螺(たにし)

むかしむかし、狸が田螺を誘って、二人で伊勢参りをしたそうです。旅行もおしまいの日になって、田螺が狸に向って言いました。どうだ狸君、ただこうしてあるいていてもつまらない。是から伊勢の大神宮様まで、二人で駆けっくらをして見ようじゃないかと言いました。狸もさんせいして支度をしていますと、田螺はすばやく貝の蓋を開いて、狸の尾のさきにちゃんと食い付きました。だから少しも骨を折らずに、狸と同じだけに飛んで行くことが出来ました。いよいよ伊勢のお鳥居の傍(そば)まで到着しますと、狸はうれしいものだから太い尻尾を振りました。それが石垣の石にかちんとぶっつかって、田螺の貝が半分壊れて、田螺は土の上へ転がり落ちました。ずるい田螺は見え坊な奴ですから、痛いのを我慢してこう言ったそ

うであります。おい狸君、遅いじゃないか。僕はさっきにここへ着いて、今肩を脱いで休んでいるところだぜ。（紀州）

貉と猿と獺

むかしむかし、貉と猿と獺の三人がつれ立って、弥彦詣りに出かけたことがあるそうです。其途中で三人は拾い物をしました。その拾い物は蓙が一枚、塩が一叺と豆が一升とでありました。是をどういう風に分配したらよいか。なかなか相談が纏まらなかったそうです。そのうちに貉は賢いからこう言いました。猿さんはこの蓙を持って、山の樹の上に登ってひろげて、方々を眺めたらいいじゃないか。獺さんはこの塩をどこか魚のいそうな池へ持って行って撒いて、魚を浮かせて捕ったらいいじゃないか。私は残りの豆を貰って食べようと言いますと、他の二人はうっかりと賛成してしまいました。猿は喜んで樹の上へ蓙を持って行って、それを敷いて見物をしようとしますと、直ぐにすべってしまって、猿も木から落ちました。そうして足を挫いてしまいました。獺は池を見付けて一叺の塩を打ち込み、其の後から水の中に入って見ますと、塩水が眼にしみて真赤に爛れてしまいました。これは飛んだ物を背負い込んだ。全体貉がずるいからいけないと、二人で苦情を言いに貉のうちへ行きました。其

間に貉は一升の豆をちゃんと食べてしまって、女房の貉と二人で豆の皮を毛の間へ挟んで呻る真似をしていました。私たちも豆を食べたらおできが沢山出来て、苦しい苦しいと言いました。猿と獺とは又だまされて、それじゃ御互様だから、仕方がないと言って帰って行ったそうです。（越後）

猿と猫と鼠

昔々ある所に、爺と婆とがありました。婆は精出して木綿を織ると、それを爺が風呂敷に入れて、方々の町を売りあるいていました。或日爺は木綿を売りに出て、一人で山路を帰って来ると、遙か向うの山の樹に大きな雌猿がいるのを、猟師が鉄砲を持って撃とうとしておりました。雌猿は手を合せて、こらえてくれという様子をして拝んでおりました。可愛そうな事をすると思って留めに行きますと、思わず鉄砲がそれて、爺は肩先を打たれました。猟師は飛んだことをしたと思って遁げてしまいました。そうすると何処からともなく多くの子猿が現れて、一しょう懸命に介抱をしてくれました。そうして猿の家へ連れて行って、大そうな御馳走をしたそうです。婆が心配をしているからもう還ると言いますと、猿たちがお礼に宝物をくれました。是は猿の一文銭と謂って、世にも大切な宝物ですが、命の親様にさし

上げます。是を祭って置くと金持ちになります。

ほんとうにお猿が言った通りでありました。家では婆が年の暮だというのに、木綿も売らずに爺が還って来たので、散々に怒りましたけれども、猿の一文銭の御蔭で、僅かな間に金持ちになりました。ところが近所によくない人があって、急に爺婆が金持ちになったわけを聞いて、知らぬ間に其宝物を盗んでしまいました。

爺と婆とはびっくりして、方々尋ねて見ましたがどうしても在りかが知れません。そこで家に飼っている玉という猫を喚んで、玉よ、猿の一文銭を三日の内に探し出して来い。探して来てくれたら御褒美だ。探し出さなければ是だと言って、光る短刀を抜いて見せました。猫は是を聴いてすぐに飛び出して、一匹の鼠をつかまえて言って聴かせました。鼠よ、うちの爺様の宝物がなくなった。三日のうちに見付けて来い。見つけて来るならば助けて遣る。若し見付けないと尻尾まで食べてしまうよと言いました。鼠は食べられると大変だから、三日の間近所の家々をまわって、猿の一文銭を探しました。そうしてしまいに隣りの悪者の家の箪笥の中にあるのを見つけて、引き出しを嚙ってそれを取り出し、持って来て玉に渡しました。玉は喜んで、それをくわえて爺様に渡しました。爺も婆も猫の玉も鼠も共々に大喜びで、皆が皆いつ迄も繁昌しました。めでたしめでたし。（因幡）

猿と蟇との餅競走

昔ある所の山の中で、猿と蟇蛙が出逢ったそうであります。ちょうどお正月も近くなって、里ではそちこちに餅を搗く威勢の好い杵の音がしていました。なんと蟇どん、あの餅を一臼取って来て食べる工夫はあるまいかと猿が言いました。そこで山の中で相談をきめて、二人はそろそろと里に降りて行きました。最初には先ず猿が庄屋様の背戸に来て隠れていると、後から蟇が忍んで来て、庭の泉水の中へ、どぶんと大きな音をさせて飛び込みました。餅を搗いている若い人たちはその音を聞いて、是は大変だ。うちの坊ちゃんが池へ落ちたようだといって、臼も餅もほったらかして置いて、残らず水の傍へ駆けて来ました。その隙に猿はうまうまと餅の臼を抱えて、山の上まで運んで来ました。蟇もその後からのそのそと戻って来ました。

なんと蟇どん、お前と二人でこの餅を分けて食うよりも、いっその事臼のままでここから転がして、早く追い付いた方がまるごと食うことにしてはどうかと猿が言いました。蟇蛙は足がのろいから損だとは思いましたが、それでも承知をして一、二、三の掛け声と共にごろごろと餅の臼を谷底に突き落しました。足の達者な猿は直ぐにその後から飛んで降ります。

蟇は足が遅いので仕方なしに、のたりのたりと山を下って行きますと、運の好いこともあったもので、餅はいつの間にか臼の中から抜け出して、道のはたの萩の枝にだらりと引懸っていました。是は有り難しと早速その餅の傍に坐り込んで、蟇は一人でゆるゆるとたべていました。そうすると、空臼を逐っかけてむだ足をした猿が、がっかりして又登って来ました。蟇どん蟇どん、こっちの方から先に食ってはどうかねと、見物をしていた猿が言いました。なあにこりゃ俺の餅だ。俺が好きな方から食おうよと、蟇蛙は答えました。（越後）

猿聟入り

昔々ある村の爺が、一人で山畠に出て働いていました。畠が広くてあんまり骨が折れるので、あああ猿でもよいから来て助けてくれるなら、三人ある娘の一人は嫁に遣るがなあと言いました。そうすると猿が一匹ひょっくり出て来まして、せっせと畠為事を手伝ってくれました。こいつは困った約束をしたわいと思って、家に帰って来て三人の娘と相談をすると、姉も二番目の娘も、猿のお嫁には行かれませんと言って怒りました。末の娘だけがやさしい女で、お父さんが約束をなさったのなら、是非がないから私が行きましょう。嫁入りの支度には瓶を一つ、その中へ縫い針を沢山に入れて下さいと言いました。そうすると次の日の朝

は、猿がちゃんと、聟様の着物を着て、約束の花嫁を迎えに来ました。嫁の荷物は瓶と縫い針、これを猿の聟が背中に負うて、仲よく話をしながら、猿の住む山へ行きました。山の麓には深い谷川が流れていて、細い一本橋が架っていました。その橋を渡ろうとする時に、猿の聟様が話しかけました。男の子が生れたならなんという名を付けよう。猿どのの子だから猿沢と付けましょう。女の子が出来たらなんと名を付けよう。この谷には藤の花がきれいだからお藤と付けましょう。そう言って渡って行くうちに一本橋が細いので、ちょっと手がさわると猿の聟は川へ堕ちました。そうして縫い針を入れた瓶を背負ったままで、水に流されて行きました。其時に猿の聟が泣きながら、こんな歌を詠んだということで、今でも其文句が残っています。

猿沢や、猿沢や、
お藤の母が泣くぞかわいや。（備中）

山の神の靫

昔ある所に盲の琵琶法師がありました。琵琶箱を背なかに負うて一人で旅行をしているうちに、路に踏み迷うて山の中で日が暮れてしまいました。仕方がないから大きな樹の蔭に琵

琶箱を卸して、そこに一晩野宿をしようと思って、その大木に向ってこう言いました。もうし山の神様、私は路に迷うて夜になりましたから、今晩だけここに泊めていただきます。就いてはお聞き苦しくもござりましょうが、旅の座頭の作法として、琵琶の一曲をお聴きに入れますと言って、琵琶を取り出して平家物語の一節を語りました。

そうすると高い所から声が聞えて、さてもさても面白い。どうぞ今一曲語って聴かせてくれと言う人があります。不思議には思いながらも、又望みに任せて同じ平家の他の一節を語りました。これは大きに有り難かった。定めて疲れたであろうという声がしました。しばらくすると誰だか知らぬ足音があって、お膳に色々の食べ物を載せたのを持って出てこの盲人に勧めました。これにも重ねて驚きましたけれども、もともと無邪気な座頭であった上に、腹もへっていたので十分に御馳走になり、樹に向って厚く礼を述べて、その晩は寝てしまいました。

翌朝になると、一人の猟人（かりゅうど）が出て来ました。あなたを人里のある所まで、御案内申せと言いつけられて来ました。この靫にしっかりとつかまって、私の後に附いておいでなさいと言って、太い毛皮の筒のようなものを、盲の手に持たせました。琵琶法師は大喜びで身ごしらえをして、その靫のさきを一しょう懸命に摑（つか）んで、段々と山を降りて来ますと、やがて谿川（たにがわ）の水の音も高くなり、遠い所の犬、雞（にわとり）の声などが聞えて来て、村に近くなったことが知れま

した。

そのうちに里の子供等が、大勢山に入って来る話声が聞えたかと思うと、その中の一人が不意に大きな声を出して、あれあれあそこを見ろ、あんな座頭の坊が狼（おおかみ）の尻尾をつかまえて、山から降りて来るわとどなりました。この言葉を聴くや否や、今まで路案内をしていた猟人は、慌てて靫を引き放して、元の路へ走って還りました。後で聞くとこの猟人かと思っていたのが、実は狼であったのであります。

それから琵琶法師は草刈り男を頼んで、先ずその村の村長の家へ、連れて行って貰いました。そうして昨日からの話を詳しくいたしますと、村長は手を打って、なるほどそれで始めてよくわかりました。昨晩は突然と私の家の小さな子供が、妙なことを言い出したのであります。俺はこの山の山の神だ。今夜は珍しい客人があるのだから、何か御馳走をこしらえて山へ持って来て、大木の下に休息している人にさし上げろ。もし遅くなるとこの子供の命を取ってしまうぞと言ってあばれるので、家中で心配をして、兎（と）も角（かく）も急いでお膳をこしらえて、山へ持たせて出したのであります。それでは山の神様の客人というのはあなたでしたか。よっぽど琵琶がお上手だと見えますねと言って、大層この盲法師を尊敬したということであります。

鷲の卵

昔ある村に年とった百姓があって、美しい一人の娘をもっていました。田植えの頃に苗代を見まわっていると、蛇が小さな蛙を追いかけて、苗代を荒しております。蛇よそう追うな。おれの一人娘をお前にやるからと言いますと、蛇は追うのを止めておとなしく帰って行きました。そうしてその晩から、立派な若い聟が娘のところへ、夜遅く来て朝早く帰るようになりました。それがどういう人かよく分らぬので、爺は気にかけていましたが、ある日家の前を一人の見たことのない易者が通って行くので、それを喚び込んで、占いをしてもらいました。その易者が言うには、この娘はただの人間でない者を聟に取って、人間でない者の子を持っているから、近いうちに死ぬかも知れない。けれども助かる方法がたった一つある。裏の山の大木の上に、鷲が巣をかけて今卵を三つ産んでいる。あれを聟殿に頼んで取って来てもらって食べさせて見たらよかろうと言いました。そこでその晩に来た聟に鷲の卵が食べたいという話をしますと、快く承知をして取りに登ってくれましたが、その時はちゃんと蛇の姿をしていたそうであります。そうして二つの卵を口にくわえて来て、三つ目を取りに昇ったときに、鷲の親はその大蛇をつついて殺してしまいました。爺は家に帰って見ると、昨日

の易者が又来ていて、この話を聴いて、それではもう娘さんは助かった。この後では三月三日の節句に、酒の中へ桃の花を浮かせてお飲ませなさい。そうすれば愈々丈夫になります。私はあなたに命を助けられた、小さな蛙の御恩返しと言って、ぴょんぴょんとどこかへ飛んで行きました。それから後は三月の三日に、人が桃の酒を飲むようになったのだそうであります。（肥前杵島郡）

弘済和尚と海亀

むかし備後国に、三谷寺という大きなお寺がありました。始めてこの寺を建てる時に、仏の像や御堂に塗る黄金がないので、弘済和尚という僧が土地の人に頼まれて、数多の産物を船に積んで京都に登り、それを黄金と交易しました。その用も済んで難波津、今の大阪の港に来まして、帰りの船に乗ろうとしていますと、大きな海亀を四つ、浜の漁師たちが捕って来て、殺そうとしているのを見かけました。弘済は深く憐みの心を起して、海人の者に金を遣ってその亀を買い取り、四つとも海へ放して遣りました。

それからいよいよ出帆をしまして、備前の骨島という島の沖まで還って来ますと、日の暮れ方になって海賊の船が現れました。最初にこちらの船へ飛び込んで、先ず二人の家来を捉

えて海の中へ投げ込みました。次に弘済和尚に向ってお前も海へ入れ。入らぬならば投げ込むぞと言いました。色々と静かに話をして見ても、悪者どもが承知をしてくれないので、仕方なしに自分で海に入りますと、海賊は金を積んである船を漕いで、何処かへ行ってしまいました。

弘済和尚は海に入って見ましたが、浅い所に岩のような物があって、足が其上に立って体が沈みませんでした。一晩中こうして立っていて、夜が明けてからよく見ますと、岩かと思ったのは大きな海亀の甲らであって、いつの間にか備前備中の灘も過ぎ、故郷の備後国の浜近くまで来ていましたそうです。村に戻ってこの不思議な命拾いの話をしましたところが、一人として亀の恩返しの深き心ざしを感心せぬ者はありませんでした。

それからしばらくして後に、この村で大きなお寺が建つことを聞いて、黄金を持って売りに来た者がありました。弘済和尚は早速出て見ますと、その黄金商人の群れの中に、先日の海賊が六人までまじっておりました。海賊は和尚の顔を見まして、非常に驚き又畏れて、黙って下を向いて青くなってふるえています。弘済もそれをよく知っていましたけれども、一言もその事は言わずにただ黄金の価を出して交換してやりました。悪者どもはその代物を受け取って、なんともかとも云われぬような顔をして、黙って還って行ったそうであります。

猿正宗

むかし九州の或大名の家の飛脚が二人、江戸へ御用の大切な手紙を持って、東海道を旅行しておりました。興津の宿を朝のまだ暗いうちに立って、薩埵峠という大きな坂路を海岸の方から登って行こうとする所で、何心なく浜の方を見ますと珍しく大きな章魚が一匹出ていまして、あの足で何物かを搦めつけて、海の中へ引き込もうとしています。よく見るとそれは猿でありました。猿は岩の角にしっかりと取り付いて、引き入れられまいと一しょう懸命に争うていますが、章魚の方が力が強そうに見えました。助けてやろうじゃないかと、小石などを投げて嚇して見ました。けれども章魚は平気で中々その手を放そうとしません。そこで二人とも荷物を峠口の路傍に置き、磯端に走って行って脇差しを抜いて章魚に切り掛けますと、漸くのことで搦んでいた手を解いて、章魚は水の中へするすると入って行きました。

ところが、その猿は危い一命を助かって、如何にも嬉しそうにその場を飛び退いて、二人の恩人の側へ近よって来る様子でありましたが、どうしたことか忽ち途の脇に置いてあった御状箱を担いで、どしどしと山の上へ走って逃げてしまいました。その箱の中には、何よりも大切な御用の手紙が入っているのです。山には峠路より外に登って行く路はありません。

それを無理に押し分けて、心配しながら猿の後を追いかけて見ましたけれども、もう何処へ行ったのやら、姿も影も見えませんでした。御状箱がなくなっては、旅行を続けるわけにも行かず、是は飛んでもない事になってしまったと、両人とも困り切って、茫然として峠の中程に休んでおりました。

そうするとしばらくしてから、遙かむこうの山に再び同じ猿の姿が現れました。あれあれといって見ていますと、片手には御状箱を高くささげ、片手には何か長い薦包み(こもづつ)のような物を抱えています。不思議に思っているうちに段々と二人の傍へ近よって来まして、その二品を前に置きました。先ず先ず大切な御状箱が、無事に戻って来たのは大安心、今一つの方はなんであろうかと、手に取って見ようとしますと、その猿は帰って行きました。この品をお礼に持って来ようと思って、しばらくの間両人に待っていて貰う為に、状箱を隠したのであったということが、初めて解ったのであります。

それでその薦包みがなんであったかと開いて見ると、中には白木の棒鞘(ぼうざや)に入った、一振りの刀がありました。それを江戸に着いてから後に、その道の人に鑑定して貰いますと、紛れもない五郎正宗の名作であったそうです。研ぎ立てて見れば一点の疵(きず)もなく、如何にも見事な古刀であったので、是を殿様に献上することになりました。寸尺といい形といい、ちょうどその頃お望みであった通りなので、二人の飛脚の者は手厚い御褒美を賜わり、その名刀は

猿正宗と名づけられて、永くお家の宝物の中に加えられましたそうです。めでたしめでたし。

春の野路から

昔々ある所に、貧乏な一人の爺が住んでいました。毎日々々働いてやっと暮しを立てていました。今日は卯月(うづき)の八日だから、一日だけ家でゆっくりと休もうと思っていますと、又用が出来て外へ行かなければならぬことになりました。折角買って置いた一升の酒を、徳利のままでぶら下げて、途中ででも飲もうと思って一人で出かけました。晴々としたよい天気で、野にも山にも色々の花が、咲きほこっているのでありました。広い野原にさしかかって、天気は好し疲れもしたので、この辺で一杯やろうと思って、よいくらいの石に腰を掛けますと、足もとに一つの骸骨が転がっていました。これはこれは、どういう人の骨だか知らないが、ちょうどよい所だ。俺は一人で飲むのはきらいだ。お前さんも一つ飲んで、この景色を見ながら一しょに楽しみましょうといって、盃(さかずき)になみなみと一杯ついだ酒を、その骸骨に濺(そそ)ぎかけたそうです。そうして面白く歌などを歌って、ややしばらく遊んでから、そこを立って出かけました。

ところがこの爺が用を済ませて、その日の黄昏(たそがれ)時に同じ野を通って帰って来ると、後から

爺様ちょっと待ってと呼ぶ声がしました。振り返って見ると、十七八の美しい姉様であったそうです。今日はお前さんのお蔭で、ほんとうに嬉しい思いをしました。そのお礼を言いたい為に、帰って来られるのを待っていました。私は三年前のこの月の二十八日に、この野原を通っていて急病で死んだ娘であります。親たちは今に諸処方々を探していますが、縁が薄くてまだ見つけてくれず、昨日まではまことに寂しく暮していました。二十八日の法事の日には、何用を置いても是非もう一度ここへ来て、私と一しょに親の家へ行って下さいといったそうです。

いよいよその二十八日になって、爺は約束だから朝のうちに野原に来て見ますと、美しい娘が出て待っていました。それから連れだって野の隣の村に入って行きました。娘の家というのは大きな構えの屋敷で、村の人が大勢今日の法事の為に寄り合っておりました。俺にはとてもこの中へは入れないと爺がいうと、それなら私の着物に取り附いて入ればよいといって、二人とも誰にも見附けられず、するすると家の中に入って、仏壇の間に坐りました。座敷には本膳が出て御吸い物も酒もありました。好きな酒ですから娘が勧めるままに、爺様は酒を飲み好きな肴を色々と取って食べました。座敷にいる坊様や親類の客人は、知らぬうちに自分の膳の物も酒もなくなるので、不思議だと話しあっておりました。

そのうちにお膳を下げる段になって、一人の小さな女中が皿を落して欠きました。家の主

人は大事の皿を飛んでもないことをしたと、ひどく小言をいいました。幽霊の娘はそれを見て、爺様に向ってささやきました。私はああいう所を見るのがいやだから、もう帰りますといいました。爺はそんなら俺も行くというと、お前さんはまあいいからここにいて下さいと言って、独りで何処かへ行ってしまいました。娘が出て行ってしまうと、直ぐに爺様の姿が皆に見えて来ました。お前は何者だ。どこから来たか、どうしてこの座敷へ来ていたかと尋ねられました。もう隠すことは出来ないので、今までのことを残らず話して聞かせますと、親類一同の者はびっくりし、主人夫婦は泣きました。それでは早速娘のいる野原へ、私たちを案内して下さい。拝む頼むと言われました。それで爺が先に立ち、親たち一族寺の和尚までが打ち揃うて、骨を迎えに行って、もう一度葬式を営みました。爺様も貧乏な手間仕事などを止めて、この家の人たちから情をかけられ、一生安楽に暮すことが出来たそうです。

（陸中上閉伊郡）

黄金小臼

昔々、奥州、みぞろが沼の片ほとりに、兄弟の百姓が住んでいました。兄は少し愚かで、弟は中々小ざかしい男でありました。それでその弟は兄を追い使って、毎日々々沼の岸へ遣

って、草苅（くさか）りばかりさせて置きました。ところが或日のこと、沼から美しい女の人が、手に一通の手紙を持って来まして、どうかこの手紙を御駒（おこま）が岳（たけ）の麓にある八郎が沼まで持って行ってくれと、その兄に頼みました。八郎が沼へ行ったら、岸に立ってたんたんと手を叩いておくれ。そうすれば水の中から若い女が出て来るから、それにこの状を渡せばよいと言いました。

男は頼まれてなんの疑いもなく、早速その手紙を持って八郎が沼へ行きました。そうして教えられた通りに手を叩くと、果して沼から美しい女が現れて手紙を受け取って読みました。みぞろが沼の姉様が、いつもお前の世話になるそうな。この手紙の中に書いてある品物は、今持って来てあげるからしばらく待っているようにと言って、沼に戻って小さな石の挽（ひ）き臼（うす）を手に持って、再び出て来ました。是（これ）は二つとないこの世の宝物だけれども、姉の言いつけだからお前に進上する。この小臼に一粒の米を入れてまわすと、黄金の粒が一つ出ます。ただ帰ったら庭の片隅に、小さくとも一つの池を掘って、朝と晩にそれから水を汲（く）んで、この挽き臼に供えておくれ。こう言って臼を男に手渡しして、又もとの沼へ入って行きました。

兄は小臼を持って自分の家に帰り、毎日一粒ずつの黄金を臼から出して、楽々と暮すようになりました。弟は兄が此頃草苅りにも行かず、楽に暮しているのを不審に思って、そっと覗（のぞ）いて見ると妙な臼をまわしています。それで兄の留守に遣って来て、仏壇の隅からその小臼を見つけ出して、米粒を一つ入れてまわして見ると、忽ち黄金の粒が出るのでびっくりし

ました。しかし慾（よく）の深い弟ですから、それだけで済まして置くことが出来ず、一度に沢山の金を取って置こうと思って、椀に一杯の米を打ち込んでその臼をまわして見ました。そうすると小臼はころころと転がって、段々に外へ出て、庭の隅に掘った小池の中へころがり込んで、とうとう見えなくなってしまったということであります。（陸中江刺（えさし）郡）

はなたれ小僧様

昔々、肥後国の真弓の里という山奥の村に、一人の爺がありました。毎日山に入って薪（まき）を伐（き）って、それを関の町へ持って出て、幽（かす）かな暮しを立てていました。或日どうしてもその薪の売れないことがあって、町のまん中を流れている川の橋を、何度となく渡って町中をあるいて見ましたが、一人も薪を買う人がありません。しまいには草臥（くたび）れてしまって、その橋の中程に来て休みました。そうしてその薪を一把（わ）ずつ、橋の上から川の淵（ふち）へ投げ込んで、竜神様を拝んで帰って行こうとしました。

そうすると、不意にその淵の中から、今まで見たこともないような美しい若い女が出て来て爺を呼び留めました。その女の腕には小さな本当に小さな子供を一人抱いています。お前が正直で毎日よく働いて、きょうも薪を持って来てさし上げたことを、竜神様は大変に喜ん

でおいでになる。その御褒美にこの子供をお預けになるから連れて行きなさい。この御子(おこ)ははなたれ小僧様と謂って、お前の願うことはなんでも聴いて下さる。その代りに、毎日三度ずつ、是非とも海老(えび)の膾(なます)をこしらえて、お供え申さなければならぬと言って、女はその子供を爺に渡して再び水の底に帰って行きました。

爺は大喜びでそのはなたれ小僧様を抱いて、真弓の里に戻って来て、神棚の脇に小さな小僧様をすえて、大切に育てました。米でもお小遣いでもなんでもかでも欲しいと思う物があれば、この小僧様にちょっと頼むと、直ぐにふうんと鼻をかむような音をさせて、それを爺の目の前に出します。あんまりこの家はきたなくなりました。もっと大きくて新しい家を出して下さいというと、家のような物までもただ一度の鼻の音で出て来ます。そうして思っていたよりも尚美しい立派な家でありました。倉や道具なども段々に出て、わずか一月ほどの間に見ちがえるような大金持ちになってしまいました。山へ薪を採りにはもう行くに及びません。爺の為事は毎日町に出て行って、膾にする海老を買うて来るだけになりました。

ところが段々に月日がたつと共に、そのたった一つの役目までが、少し面倒くさくなりました。そうしてしまいにははなたれ小僧様を神棚から下して爺はこういうことを言いました。はなたれ小僧様、私はもう貴方(あなた)に何もお願いすることはありませんから、どうか竜宮へお帰り下さい。そうして竜神様へよろしくお伝え下さいと申しました。それを聴いて小僧様は、

黙って外へ出て行かれました。そうしてしばらくの間家の外で、すうっと鼻を啜(すす)る音をさせていましたが、そのうちに段々と家も倉も、その中に在った物も一つずつ消えてなくなって、あとにはただ以前のあばら家ばかりが残りました。これは大変だと急いではなたれ小僧様を、引き留めようと思って飛び出しましたが、もう何処にもその姿は見えなかったそうであります。（肥後玉名郡）

松子の伊勢参り

むかし伊勢の大神宮様へ、出羽の北秋田の独鈷(とっこ)という村の者だと言って、若い男と女とが二人連れでお参りをして来ました。女の名は松子と謂って、田舎の人にしては珍らしく上品な美しい女でありました。この二人が旅費が足りなくなって、大へんに困っているのを、宿屋の主人が見て気の毒に思いまして、そんなら来年誰かお前様方の村の衆が参宮なさる時に、ことづけて返して下さいと言って、入用なだけのお金を貸して遣りました。ところがその次の年に、独鈷の村の人が大勢で来ましたから、あの金は持って来てくれたかと尋ねましたけれども、私たちの村には松子などというそんな美しい人はおらぬ。これはどうしたわけであろうかと、客も亭主も驚いてしまいました。それからこの伊勢参宮の人が村に還って来て、

村の人たちにこの話をしますと、なるほど、それでやっと合点が行った。村の諏訪神社の森の高い松の木の上に、三年も前からああして白く見えているのは、どうも伊勢の御祓いのようだと思っていた。それでは一つ下して見ようといって、松の樹に登ってその白いものを取って見ると、果してそれは神宮の御札でありました。そんなら確かにこの二本の松が、人の形になって伊勢参りをしたのであった。早速その借金を返すがよいと、村で金を集めて、直ぐに伊勢の宿屋へ送り届けることにしたそうであります。そうしてその二本の松の樹の一方が女で、名前が松子さんであったことも、この時からわかったのであります。（羽後北秋田郡）

水蜘蛛

むかし奥州の半田山の沼で、夏の頃に或人が釣りをしていますと、珍らしくその日は沢山の魚が釣れて、僅かな間に魚籃が一杯になりました。ひどく暑い日であったので、その人は跣になって足を沼の中に浸していましたが、何処から出たものか一匹の水蜘蛛が、水の上を走って来て、その足の拇指に糸を引懸けて行った。そうして間もなく又来ては同じ所に糸をかけるので、不思議に思ってその糸をそっと拇指からはずして、傍にあった大きな柳の株に巻きつけて置きました。そうするとやがて沼の底で、次郎も太郎も皆来いと大きな声で喚ぶ

者がありました。それにびっくりしていたら、魚籃の中の魚が、一度に皆飛び出して逃げてしまいました。その中に沼では大勢の声で、えんとえんやらさあという懸け声と共に、その蜘蛛の糸を引っ張り始め、見ている前で太い株根っ子が、根元からぽっきと折れてしまったそうです。その時から後は誰一人として、今にこの沼へ釣りに行く者はないそうであります。（岩代伊達郡）

泥鼈の親方

物を言わぬ人を、魚のように黙っているなどと、西洋の人は言いますが、日本では魚の物言うのを聴いた者が折り折りありました。それから泥鼈なども物を言うことがあると言う話です。昔美濃の大垣から一里ほど東の中津という村で、或古池の水を替え乾して、非常に大きな泥鼈を捕ったことがあります。その人がこれを肩に荷うて、大垣の町の魚屋へ売りに行きますと、途中に又一つの大池の堤を通る時に、その池の中から大きな声で、おい何処へ行くぞという者がありました。すると背中の籠の中から、今日は大垣へ行くわいと答えました。びっくりしていますと又しばらくして、同じ声で池の中から、いつ帰るぞと問いました。これにも籠の泥鼈は返事をして、いつ迄いるものぞ、明日はじきに帰るわいと、耳元で大きな

声でわめきました。こういうのが池の主というものであろうと思いましたが、この男はなかなかきつい男であったので、ここで弱い気を出したら大変だと思って、こと更籠に気を付けて、蓋を押え縄をしっかりと懸けて魚屋へ持って行って、好い値に売ってしまいました。明日は還ると自分でも言っていたのだから、ただ殺されてしまうようなことはあるまい。どうなるか見ていようと思って、先ず売って来た金を近くの寺々へ納めて、お経を読んでもらいました。そうして自分は今日を限りに、生き物を捕る商売を止めてしまおうと決心しました。その翌日は町に行って昨日泥鼈を売った魚屋の店へ、通りがかりのような顔をして寄って見ますと、主人の方から声をかけて、あの泥鼈は怖ろしいものであった。刃物がなくては人間でも破れない池洲の中から、どうして出て行ったか見えなくなったと言って、驚いていたそうであります。これが恐らく泥鼈の頭であったろうという話でありました。（美濃）

やろか水

むかし尾張の井堀という村で、秋のなかばに毎日雨ばかり降って、木曾川の水が段々に高くなり、堤が切れるかも知れないと心配して、村の人たちが起きて水番をしていることがありました。或夜の真夜中頃に、川の向いの美濃の伊木山の下の淵あたりから、頻りにやろう

かあ、やろうかあと喚ぶ声がしました。一同は唯不思議に思うばかりで、どうすることも出来ずに顔を見合せていましたが、いつ迄もそのやろうかあという声が止まないで、しまいには怖ろしくなって人夫の中の一人が、思わず知らず高い声で、いこさばいこせえと言ってしまいました。そうすると忽ち大水がどっと押し寄せて、見ているうちにこの辺の田が全部、水の下になったということであります。それで今でもその時の洪水を、やろか水と謂っております。今から二百五十年ほど前の、貞享四年の事だという人がありますが、この大川の附近には、他にもそういう話が村々にあるそうです。（尾張丹羽郡）

御辛労の池

むかし肥後国の八幡村で、御社の近くの古池の水をさらえて、池の魚を捕ろうとしたことがありました。八月一日の日であったといいますが、朝から村の人たちが残らず集まって、せっせと水を汲み上げましたけれども、いつ迄経ってもかえ乾すことが出来ません。そのうちに夕方になって、もう大分底に近くなったように思っていますと、だしぬけに見たことのない人が一人、その水の中から出て来ました。そうしてぴょこんとお辞儀をして、皆様御辛労と言ったかと思うと、忽ち何処へか消えてしまって、池の水はすぐに又もとの通り、池に

一ぱいになってしまいましたそうです。それからこの池の名を御辛労の池と謂って、誰も魚を捕ろうとする者がなくなりました。（肥後玉名郡）

米良の上漆

むかし日向の米良の山里に、安左衛門十兵衛という二人の兄弟がありました。二人ともに米良の山奥に入って、山の漆を掻いて渡世にしておりました。ある時兄の安左衛門は山に行く路で、持っていた鎌を谷川の淵に落しました。水練の達者な男ですから、直ぐに裸になって水に飛び込み、段々に深いところへ入って見ますと、驚いたことにはこの谷川の淵の底が一面の漆でありました。大昔から山々の漆の木の汁が、雨に流されて追々に溜っていたのを今までは誰も知らなかったのであります。これは又と得難い幸運に有り附いたと、安左衛門は一人で喜んで、毎日そこへ行っては少しずつ漆を取り出し、それを好い値に売って段々に金をこしらえました。近所の人たちは、何処であのような上等の品を手に入れて来るのかと、不審に思わぬ者はありませんでしたが、その中でも弟の十兵衛は、この頃兄が自分と同行せず、いつも隠れるようにして出て行くのが気になるので、色々としてそっと後から従いてあるくうちに、とうとうその秘密を見付けました。そうして自分もその淵の底へ入って、漆を

取って来て売るようになりました。兄の安左衛門はこれは困ったことになった。どうか弟には取らせぬように、いつ迄も自分一人で取ることにしたいと思って、いろいろ思案をしたあげくに、町の彫り物師に頼んで大きな木の竜の形を、念入りにこしらえさせました。角や鱗には赤青の絵具を塗り、金銀で眼を描いてまるで活きた竜の通りに作って、それを誰にも知れぬように、竊かに谷川の落ち合に持って行って、水の力で自然と動くようにしかけて置きました。弟の十兵衛は少しもこれを知らず、次の日もここへ遣って来て、裸になって入って見ましたが、見るも怖ろしい大蛇が水の底から、眼をむき出して睨めているので、近くへも寄れないで、ほうほうの体で遁げ還りました。兄はこの様子を遠くから見ていて、これからはもう自分ばかりで、自由自在に漆を取ることが出来ると、喜び勇んで水の中に入ってみると、確かに町の彫り物師にあつらえて、彫ってもらった木の竜でありましたけれども、いつの間にか魂が入って本当に動きまわっていました。そうして安左衛門が漆を取りに行こうとすると、今にも一呑みにする勢いで、大きな口を開けて向って来ました。そんなはずはないと思って、何度も何度も戻っては又行って見ましたが、どうしても気味が悪くて、その傍へ行くわけにゆきません。淵の底にはまだ沢山の漆があるのに、とうとうそれを取り出すことが出来ませんでした。こんなくらいならば始めから仲よく、毎日兄弟づれで取りに来た方がよかったと、非常に後悔をしたそうであります。

蟹淵と安長姫

むかしむかし隠岐島の元屋という村に、年とった一人の樵がありました。或日、安長川の奥に入って、滝の後の山で木を伐っていましたが、つい誤って手に持つ斧を取り落して、滝壺の小さな円い淵の中に沈めてしまいました。そうすると忽ちその淵に浪が起り水煙が立って、そこら辺が真暗になりました。そうして水の中から黒い刺の生えた棒のような物が、浮び上って来ました。爺はこの様子を見て非常に驚き怖れて、一目散に山の麓の方へ逃げて来ますと、後からまことに優しい声で、爺よ、少し待っておくれという人があります。振り返って見ると、絵にあるような美しい若いお姫様が、ちょうどその滝の所に立っておられました。私は安長姫といって、昔から、この淵に住む者だが、何時の頃よりかここには大きな蟹が来て住むことになって、夜も昼も私を苦しめていた。今日はそなたが斧を落してくれたによって、悪い蟹は片腕を切り落されて弱っている。今大きな刺の生えたその腕が、流れて行ったのを見たであろう。そのお礼を言わなければならぬが、まだ片方の腕が残っているので、安心をしていることが出来ぬ。蟹は今淵の底の横穴の中で、腕の痛みで唸っている。どうかもう一度この斧を、滝の上から落しておくれと言って、さっき水に沈めた斧を手渡しました。

爺は怖ろしながら水の神をお助け申したいと思って、再びもとの山に戻って言いつけられた通りに、その斧を高い所から滝壺に投げ入れますと、姫神は大そうにお喜びで、これから後は富貴長命、なんなりともそなたの願うままと言って、林の中に帰って行かれました。それから幾日かの後、甲らの周りの一丈もある蟹の、大爪の両方ともないのが、死んで海の口へ流れて出たのを、村の人が見つけまして、樵の爺の言った話を、本当だと思いました。そうして川の名を安長川、滝壺を蟹淵と呼ぶようになったのだそうです。この川の流れはどんな旱の年でも水が絶えませぬ。そうしてこの水の神に雨乞いをするときっと雨が降るということであります。（隠岐周吉郡）

竜宮の鐘

むかし近江国に粟津冠者という武勇の士がありました。お寺を建てましたがまだ釣鐘がないので、釣鐘を鋳る鉄を買って来ようと思って、越前から船に乗って、出雲国へ鉄を求めに出かけました。日本海を船で走らせていますと、急に風が悪くなり、浪が打ち込んで来て、どうしても船が進みません。船頭も乗客も皆困っていたところへ、何処からともなくごく小さな小舟に、子供がただ一人で梶を取って、近くまで遣って来ました。その船に近江の粟津

冠者という人が乗っているだろう。急いでこの小舟に乗り移って下さいと言いました。どういうわけかは解りませんでしたが、粟津冠者はその言う通りに、今来た小舟に乗り移りました。そうすると浪も風もなくなって、親船は少しも走りません。しばらくの間ここで待っているように言いつけて、小舟は忽ち海の底へ入って行くかと思うと、そこがもう竜宮の立派な御殿の門でありました。竜王が粟津冠者を迎えに出て来られまして、あなたは世に隠れもない弓矢の達人であると知って、是非ともお頼み申したいことがある。今この竜宮には怖るべき大敵があって、毎日家来を引き連れて攻め寄せて来る。どうかその弓勢を以て我々を助け、今日の仇を打ち滅ぼしてもらいたいと言われました。粟津冠者は名誉な頼みである故に、さっそく承知をして竜宮の高殿に昇り、支度をして待っておりますと、やがて遠くの方から見上げる程の大蛇が、数多の同類を引き連れて攻めて来ます。その大きく開いて来る口を目がけて、真正面から鏑矢を射放して、舌の根より喉の下まで射貫きました。それに畏れをなして大蛇が逃げて帰ろうとするところを、又一箭今度は中程を射かけたそうであります。竜王を始めとし、多くの臣下達も大喜びで、何を今日の骨折りのお礼にしたらよいかと問いましたが、粟津冠者の今度の旅行は、新たに建立したお寺の釣鐘がまだないので、その材料の鉄を買う為に、海を渡って出雲まで行こうとしているだけで、他にはなんの望みもないと言いますと、それならばいと安い事だと、早速竜宮の御殿に懸けてあった鐘をはずして、これ

を御進物に贈られました。近江の粟津の広江寺の釣鐘が、竜宮からのおみやげの鐘であったと言いますが、その御寺はもうとっくにありません。武蔵坊弁慶が背負って行って、比叡山の中腹から転がしたという今の三井寺の大釣鐘が、その竜宮の鐘だという話もありましたけれども、確かなことはもう誰にもわかりません。

山父のさとり

昔ある所に一人の桶屋がありました。雪の降った朝、外に出て為事をしておりますと、山の方から一つ目一本脚の、怖ろしい怪物が遣って来て、働いている桶屋の前に来て立ちました。桶屋はそれを見て慄えながら、これが昔から話に聴いている山父というものだなと思いました。そうするとその怪物は、おい桶屋、おまえはこれが山父というものだろうと思っているなと言いました。これは大変だ、此方の思っていることを、直ぐにああして言い当てると思いますと、おい桶屋、おまえは今思っていることをすぐに覚るから大変だと思ったなと又言いました。それから後も、なんでもかでも思うとじきに覚られるので、桶屋は困ってしまいました。そうして仕方なしにぶるぶる慄えながら為事をしていますと、思わず知らずかじかんだ手が滑って、箍の竹の端が前へ走り、山父の顔をぱちんと打ちました。山父はこれ

にはびっくり仰天して、人間というやつは時々思っていないことをするからこわい。ここにいるとどんな目に逢うか知れないと言って、どんどん又山の方へ、遁げて行ってしまったそうであります。（阿波）

飯食わぬ女房

これも昔々ある村に、一人の桶屋が住んでいました。或日の晩方に外へ出て小便をしながら、あああ飯を食わぬ嬶が一人欲しいもんだなあと独り言を言いました。そうするとその晩見たこともない女が尋ねて来て、飯を食わぬ嬶の欲しい桶屋さんは此方ですか。私は飯を食わぬ女です。そうしてよく働きますから嬶にして下さいと言って、いくら断っても帰って行きません。致し方がないから女房にして家に置きました。なるほど善く働いて、少しも食事をしませんが、どういうわけか、米が知らぬ間にぐんぐん減りました。それを不審に思って一度様子を見る積りで、為事に行く支度をして家を出かけ、そっと天井に上って隠れて覗いておりました。そうすると女房はやがて竈に大きな釜をかけて、俵からどっさり白米を量り出して、さくさくと洗って飯を炊き始めました。それから物置からうんと味噌を持って来て、大鍋に一ぱい味噌汁を沸かしてそれを柄杓で桶の中に汲みこみました。その次には戸板

を一枚はずして来て台所の上り口に敷き、煮えた米の飯を片端から、大きな握飯にこしらえて、其上へ並べました。そうして置いてから、今度は髪をばらばらに解きますと、頭の真中に別に大きな口が一つありました。其口の中へ握飯を一つずつほうり込み、杓で一杯ずつ味噌汁を流し込んで、見ているうちに汁も飯も、残らず食べてしまいました。そうした後で頭の髪をちゃんと結び直すと、元の通りのよさそうな女房になりました。

この女は山母であった。こいつは飛んでもない嬶をもらってしまった。なんでも早く追い出さなけりゃならぬと思って、知らぬ顔をして夕方に、草鞋に土を附けて帰って来ました。いくら飯は食わなくとも、おまえは家の嬶には向かない。なんでも遣るからどうか往ってくれと言いますと、それでは行きますからどうか大きな桶を一つ、こしらえて下さいと申しました。桶なら安い事だと早速こしらえて遣りますと、山母の女房は桶屋の油断を見すまして、出しぬけに男を大桶の中に突き落しました。そうして其桶を頭の上に載せてさっさと山奥の方へ帰って行きました。桶屋は桶の中から逃げ出そうとしますが、桶が大きいので飛び出すことが出来ない。そのうちに段々山路になりますと、路の片脇に大木があって、その枝がからからと桶の縁にさわりました。山母はやがてある一本の大木の蔭に、少しの間立ち止って小休みをしました。ちょうどよい折りだと思って桶の底から手を伸ばして、垂れていた枝につかまりますと、体は桶から抜け出しました。山母はそれを知らずに、空桶をかついで奥の

方へ行きました。この隙に逃げなければならぬと、一しょう懸命に走って還りますと、山母はそれを心づいたか、振り返ってどんどんと追って来ました。里まで行くうちには追い付かれる。何処か隠れる所はないかと見まわしたところが、ちょうど谷川の川原に菖蒲(しょうぶ)が茂り、又その続きには蓬(よもぎ)が茂っておりました。それでその二いろの草の間に潜っておりますと、山母も追っかけて来てその中へ飛び込みました。

ところが非常に幸いなことは、菖蒲の葉が山母の右の目を突き、蓬の茎が左の目を突き破って、山母は忽(たちま)ち盲になり、そうして谷川の流れに堕ちて、死んで流れて見えなくなってしまいました。その日は五月の五日の日であったそうです。それから後は此日(この)を節句と謂って、必ず蓬と菖蒲と二いろの草を屋根に葺(ふ)き、又その葉を湯に入れて浴(ゆあ)みすることになったのですが、これは二度と再びこの桶屋のような、ひどい目に逢わぬ用心だということであります。

（陸中胆沢(いさわ)郡）

牛方と山姥(やまうば)

昔々ある一人の牛方が、沢山の塩鯖(しおさば)を牛の背に積んで山の在所へ売りに行く途中、高い大きな峠を越えようとする時に、運悪く山姥に行き逢いました。牛方々々、鯖を一尾(びき)くれと言

います。仕方がないから荷の中から鯖を一つ抜いて、投げて遣って急いで通りましたが、牛が遅いのですぐその鯖を食べてしまって、又後から追いついてねだりました。こうして一尾ずつ抜き出しては投げて遣っているうち、とうとう牛に附けていた沢山の塩鯖は残らず山姥に食べられてしまいました。鯖がなくなるとその次には牛を食わせろ、食わせないとおまえを食うぞと言いました。怖ろしくてたまらぬから、牛をそこに置いて急いで遁げて来ますと、それも瞬くうちにめりめりと食べてしまって、又追っかけて来て、今度は貴様を取って食うと言いました。これだけはなんとしても承知をするわけにはゆきません。一しょう懸命に走って遁げて、大きな池の堤まで来ました。堤の上には大きな樹がありました。急いでその樹に登って隠れようとしましたが、あいにく下の方には葉がないので、牛方の影が沼の水に映りました。

山姥は息を切って飛んで来ましたが、あわてて沼の中の影を牛方かと思って水に入って方々を捜しまわりました。その暇に漸(ようや)くのことで樹から下りて来て、牛方は又走って遁げました。そうすると山の下に一軒の家があるので、急いで中に入ると、それが又今の山姥の住家でありました。そっと天井に上って梁(はり)の間に隠れておりますと、やがて山姥は沼から出て、今日は牛方に構っていてえらく草臥(くたび)れたと、独り言をいいながら帰って来ました。そうして囲炉裏に火を焚(た)いて、又餅を出して来て焼き始めました。餅が段々焼けて来るうちに、山姥

はこくりこくりと居睡りをしています。梁の上に隠れている牛方は、屋根の裏から茅の棒を一本抜いて、焼けた餅を一つずつ突き刺して取って食べました。姥が眼を覚まして誰が取ったとどなると、小さな声で火の神火の神と言いました。山姥は一きれの餅が渡し金から転げて真黒に焦げているのを拾って、火の神様なら仕方がないと言いました。それから今度は鍋を掛けて、又甘酒を沸かします。そうしてその甘酒の温まるのを待っていて又居睡りを始めましたから、牛方は長い茅の棒をもう一本抜き出して、梁の上から甘酒を吸ってしまいました。山姥が眼を覚まして、誰が飲んだとどなると、牛方は又小さな声で、火の神火の神と言いました。こんな晩には寝た方がよい。石の唐櫃にしようか木のからとにしようか。石は冷たい木のからとがよかろうと言って、大きな樹の唐櫃の蓋を開けて、その中に入ってぐうぐうと鼾をかいて寝てしまいました。牛方はその様子を見ていて、そっと梁の上から下りて来て、囲炉裏の火を焚きました。そうして湯をぐらぐらと沸かして置いて、錐を持って来て木のからとの蓋に穴をあけました。からとの中の山姥はその音を聴きながら、明日は天気だげで、きりきり虫が鳴かあやといっていましたが、そのうち熱い湯をその穴から注ぎ込まれて、とうとう牛方に讐を打たれてしまいました。（越後）

天道さん金綱

昔々ある村に、母と三人の子とが住んでおりました。母が三人の子に留守番をさせて、寺参りに出かけた後で、山姥が母に化けて帰って来ました。山姥の手はさわって見ると直ぐにわかるのですが、子供をだますつもりで芋がらを巻いて来たので、子供は母の手だと思って戸を開けて中へ入れました。山姥は三人の子の一番小さいのを抱いて、奥の間に入って寝ました。そうしてがりがりとその子を食べてしまいました。次の間に寝ていた二人の子はその音を聴いて何を食べているのかと山姥の母に尋ねますと、小さな一本の指を奥の間から投げてよこしました。それを見ると直ぐに山姥だということがわかって、二人の大きな子は逃げて出る相談をしました。最初に二番目の子が便所に行くと言いますと、山姥が兄の方に戸を開けてやれと言いました。それで二人は家の外に出て、井戸端の桃の木に鉈で切り目をつけて、それを伝って木の上に登りました。山姥は後を追っかけて方々を探しているうちに、井戸を覗いて見たので桃の木の上にいる子が見つかりました。どうしてその木へ登ったかと山姥が尋ねます。鬢つけ油を塗って登ったと、頭の児がうそをつきました。山姥は鬢つけを持って来て桃の木に塗りますと、つるつると滑ってどうしても登ることが出来ません。二番目

の子がそれを見て笑って、鬢つけ油を附けて登れるものか、鉈で切り目を附けて登るのだと言いました。山姥はそれを聴いて、鉈で切り目をつけて登って来ます。二人の子は困ってしまって、空を見上げて、天道さん金ん綱と大きな声で呼びますと、がらがらと音がして天から鉄の鎖が下って来ました。それにつかまって子供たちは天に登りました。山姥もその後から、同じようにどなりましたが、今度は天から腐れ縄が下って来て、それをつかまえて登ろうとした山姥は、高い所から落ちて来て蕎麦畑の中で、石に頭を打ち割って死んでしまいました。蕎麦の茎はその山姥の血に染まって、その時からあのように真赤になったのだそうであります。（肥後天草郡）

鬼と神力坊

昔阪本八幡の神力坊という山伏の家へ、毎度秩父の山の鬼が遊びに来て、大酒を飲み御馳走をねだり、又色々の無理難題を言いかけて困り抜いていたことがあったそうです。その時に神力坊が工夫をして、なんとかしてもう懲りて来ぬようにしようと思って、村の人たちに頼んで置いて、鬼が遣って来た日は一日の中に、畠の麦を苅ってしまうように支度をしました。そうして酒の肴には白い石を四角に切ったものと、竹の根を輪切りにしたものを用意し

て、自分には別に豆腐と筍との煮たのを、皿に附けて置きました。そんな事は知らないで、鬼は例の通り大いばりで馳走を食べようとしますと、竹の輪切りでも石でも、みんな堅くって歯が立ちません。それで閉口して見ている前で、亭主の神力坊は本物の豆腐と筍とを平気でむしゃむしゃと食べてしまいました。どうです鬼さん、人間の歯は先ずこの位丈夫に出来ているのだから、噛もうと思えばなんでもかでも噛むことが出来ます。まだそればかりではありませんよ、人間は地面をひっくり返したり、皮を剝いだりすることも出来るのです。まあ出て御覧なさいと言って、神力坊は鬼を案内して家の外に出て見ますと、今朝ほど鬼が来る時までは、一面によく熟して黄いろかった村の麦畠は、いつの間にか残らず苅り取られて、その半分は鋤きかえして、真黒の土になっておりました。鬼はそれを見て成程人間は鬼よりもえらい。鬼にはとても出来ない事ばかりする。うっかり人間の所へ来て、いばり散らすことは出来ないと思って、逃げて還ってしまったかどうか。その点はお話が残っておりません。しかし兎に角にもう余程久しい以前から、山の鬼がこの村へ、来なくなっていることだけは確かであります。（武蔵秩父郡）

金剛院と狐

昔々ある所に、金剛院という山伏の修験者がありました。旅をしていて久しぶりに、元気よく自分の村に還って来ましたが、村の入り口の岡の陰に、大きな狐が一匹いい心持ちそうに昼寝をしているのを見つけました。金剛院はそっと抜き足をして、寝ている大狐の傍へ近より、手に持っていた法螺の貝を、狐の耳元で声高に吹き鳴らしました。そうすると狐はびっくりして飛び上がり、転がるようにして逃げて、遠くの草の中に隠れてしまいました。

これが狐には余程くやしかったと見えて、いつの間にか讐討ちをたくらんでいたのであります。ちょうどこの次の日の晩に、町に修験者の寄り合いがあって、昨日還って来た金剛院も出て来ることになっておりました。村々の山伏たちは、方々から集って来まして、連れだって町へ出ようとする途で、実に珍らしいものを見ました。一匹の狐が人の通るのも気が付かぬらしく、池の端に立って水鏡を見ながら、しきりに草や木の枝を頭に載せ、肩に掛けています。何をするのだろうとそっと見ておりますと、やがてぶるぶると身を振わせて、忽ち金剛院の姿になりました。そうして足早に何処へか隠れてしまいました。憎い狐じゃないか。ああして今に遣って来て、我々を騙すつもりであろう。来たら引っ捕えて松葉いぶしにしてやろうと相談して、山伏たちは待ち構えておりました。本物の金剛院は、そんなことなどは夢にも知らず、少し遅れて集会の席へ出て来ますと、やあ金剛院よく来られたと言って、一同が手を取ってまん中へ押し出しました。若い山伏が尻を探ったり耳を引っ張ったりします。何をするのかという間もなく、はや誰かが縄を持って来てぐるぐる巻きにしてぶちました。そうして青松葉をうんと焚いて、息が出来ないほど燻したり敲いたりしました。金剛院は狐が化けて来たのだと疑われていることを知って、決して狐でないという証拠を、色々として見せましたから、漸くのことで縄を解いてもらうことが出来ました。実は昨日外から帰って来るときに、罪もない狐を法螺貝で驚かしたから、狐がそれを怨んでわざと化るような風を見せて、こうして皆にいじめさせて、し返しをしたものであろう。もう是からは昼寝をしている狐を見つけても、決して法螺貝などを吹かぬようにしようということになったそうであります。（紀州西牟婁郡）

俄か入道

昔ある村で、悪い狐が出て悪戯ばかりして困っていた頃に、おれは決して狐などには化かされないと言って、独りでいばっていた人がありました。その人が他所から還って来ますと

路の下の川原で一匹の狐が、朴の木の葉を頭に載せて女になり、川の藻を採って円めて、赤ん坊の形にして抱いているのを見かけました。こん畜生、人をばかす積りだな。よしどうするか見ておれと言って、路傍の石を拾って上から投げ付けますと、それがちょうど赤ん坊に当って、一打ちで死んでしまいました。母親は泣いて怒って、子供を元の通りにして返せと言います。なんだ手前は狐じゃないかというと、ますます腹を立てて承知をしません。そうして何時まで経っても狐にならず、見れば見るほど人間の親子に相違ないので、それでは見損なったか、飛んだことをしてしまったと思って、色々と言葉を尽してあやまりましたけれども、中々一通りのことでは宥してくれませんでした。それでは仕方がないから坊主になって詫びをすると言って、近くのお寺まで一しょに行き、和尚様にわけを話して頭を剃ってもらいました。その和尚様の頭の剃り方が非常に痛い。余り痛いのでやっと正気になってあたりを見ますと、もう先刻の母親も赤ん坊もおらず、和尚もお寺もありませんでした。そうして、剃ってもらったと思った頭の毛は、みんな狐に喰い切られていたのだったそうです。

（武蔵）

小僧と狐

昔々ある山寺に、ずいてんという小僧がありました。和尚様がよそへ行って一人で留守居をしていますと、きっと狐が庫裡の口へ来て、ずいてん、ずいてんと呼びました。あまり憎らしいので本堂の窓へまわって覗いて見ましたら、狐は入り口に背なかを向けて立っています。そうして太い尻尾で戸をこすると、ずいという音がする。それから頭を戸にぶっつけると、てんという音がするのでありました。賢い小僧さんだから早速戻って来て、そっと戸口の脇に来て立っていて、ずいという音がした時にがらりと戸を開けますと、てんと戸を叩こうとしていた狐は、庫裡の庭へ転げこみました。すぐにその戸を締めて置いて、棒を持って来て狐を追っかけましたが、そのうちに狐の姿は見えなくなってしまいました。それから本堂の方へ行って見ますと、いつの間にか本尊のお釈迦様が二つになっていて、どちらが狐の化けたのやら、見分けることが出来ませんでした。なあにそんな事をしたってすぐにわかるさ。うちの御本尊様はお勤めを上げると、舌をお出しになるから間違いっこはないと言って、ぽんぽんと木魚を敲いてお経を読んでいますと、急いで狐のお釈迦様は長い舌を出しました。それでは是からうちの仏様に、庫裡の方でお仏供をさし上げましょう。狐の化けたのは残して置いてと言いながら、さっと台所へ帰って来ますと後から贋物の本尊様が、のこのことあるいて出て来ました。それでは先ず行水を上げましょうと、土間の大釜の中へ抱いて入れてしっかりと蓋をして火を焚きました。そうして和尚様の還って来られるまでに、狐のまる煮

をこしらえて置いたという話であります。（羽前）

片目の爺

むかしむかし奥州の或田舎に、爺と婆が住んでいました。婆はちゃんと目が二つありましたが、爺の方は片目でした。ある日の晩遅くなってから、ばあなばあな今還ったぞと言って、右片目の爺様が左片目になって帰って来ました。ははあ是は狐だなと婆様は思いました。爺なは又酔って来たな。酔って還るといつもの癖で、俵さ入ろうというべなと言いますと、爺様はなにや又と言って、自分で俵の中へ入りました。俵さ入ると上から縄を掛けろというべなと言いますと、俵の中の狐の爺様は、なにや又と言っておとなしく縄を掛けられました。縄あ掛けると又いつもの癖で、火棚さ上げて燻せというべなと婆がききますと、やはり狐の爺は何や又と言いました。それで囲炉裏の上の火棚へほうり上げて、どんどんと火を焚いて狐を困らせました。それからわざと魚などを焼いて、いい香りをさせて婆一人で御飯を食べました。そうしているうちに右片目の、本物の爺が還って来ました。それで火棚の上の左片目の爺は、とうとう狐汁になってしまったそうであります。（陸中）

比治山（ひじやま）の狐

むかし広島に一人の能役者がありました。或日海岸の村の祭に行って、夜おそく一人で比治山の下の路を帰って来ました。あまり北風が吹いて寒いので、懐に入れていた能の面を出して、風よけにそれを被（かぶ）ってあるいていました。そうすると不意に比治山の上から、一人の男が降りて来て、もしもしと言って呼び留めました。あなたは実に珍らしいものを被っておいでになる。それはなんというものですかと言って尋ねます。これは能の面というもので、被って舞いを舞うものだと答えますと、それを被りさえすれば、いつでもそんな顔になれるのですか。実は私はこの比治山に住んでいる狐ですが、一つあなたのように化けて見たいから、是非その面というものを私に譲って下さいと言いました。あんまり熱心に頼みますのでとうとう役者も承知をして、その面を取って狐に遣って家に帰って来ました。それからしばらくして広島の殿様が、狩りに出て大勢の家来を連れて、比治山の下をお通りになったところが、おかしな狐が一匹山の上から出て来て、少しも人を恐れずにその辺をうろうろしておりました。それ狐が出たと言って多くの武士が、集まって来てすぐに打ち殺しましたが、よく見ると以前に能役者の持っていた面を被っていたそうであります。面さえ被れば体までが、

人になるものと思っていたらしいので、狐の中ではこの比治山の狐が、一番愚かものであったろうということであります。

芝右衛門狸

むかし淡路の芝右衛門狸の所へ、阿波の禿狸から、化け競べをしようと言って来たそうであります。芝右衛門狸は承知をして、海を渡って阿波国へ遣って来ました。先ず最初には禿狸が、阿波の殿様の御渡海の様子を化けて見せました。沢山の船が遠く近く、海の上につらつらと並んで、色々の幟や吹き流しが風に靡いて、御座船からは水手の船唄の声が聞えて来ました。芝右衛門は感心して、今までこんな上手な化け方は、見たことがないと言いました。それでは私も一つ御大名のお行列を化けてお目にかけましょう。いつ幾日のお昼前に、舞子の浜に行って、あの松の樹の上から見ていて下さいと約束しました。禿狸は約束の通りに、早速播州へ渡って行って、舞子の浜の松の上に、そっと登って待っていますと、やがて西の方から長い何本もの毛槍を立てて、下に下にと言って行列が進んで来ました。馬やお駕籠の飾りが光るようで、供の武士たちは皆こわい顔をしていました。禿狸はすっかり感心してしまって、思わず松の樹の上で手を叩いて、芝右衛門どの見事々々、まるで本物の通りと、大

きな声で褒めました。

禿狸が感心したのも無理はありません。それは本物のお大名の行列だったのであります。芝右衛門はちゃんと前からこのお通りを知っていて、それを禿狸に見せたのでありました。お伴の武士は禿狸を見つけて、あれあんな所で狸めが嘲弄をしている。無礼なやつだと言うよりも早く、飛んで来て槍で突き落してしまったそうです。四国で最も名高かった阿波の禿狸は、こうして淡路の芝右衛門に騙されて、死んでしまったという話であります。そうかと思うと阿波の方では、禿狸は今でもまだ達者に暮しているようにいう人もあります。狸のことですから確かなことはよくわかりません。（淡路）

山伏の狸退治

むかし石城の榊高野という村で、或百姓の家の色々の道具が毎日々々見えなくなったことがありました。是は多分狸の悪戯であろうということで、方々の修験者を頼んで来て、御祈禱をしてもらいましたが、少しもきき目がなくて、やはりお椀や箸のような物までが、いつの間にかなくなるので、山伏たちも弱ってしまいました。

そうすると一番おしまいに頼まれて来た山伏が、私ならばこんなものはわけはない。きっ

と退治して見せると言いました。しかし祈禱をするには少しばかり入用の品物がある。急いで買って来るからと言って、平の町へ買い物に出かけました。その後で家の者が気が付いて見ると、よっぽど慌て者の法印さまだったと見えて、小さな風呂敷包みを一つ忘れて置いて行きました。これがなくては困るかも知れない。早く知らせて上げようと言って、外へ出て大きな声で呼んだり、人を走らせて見たりしましたが、とうとう追い付くことが出来ませんでした。そうして帰って来て家に入って見ると、もう今の間にそのつつみが、何処へ行ったか知れなくなっておりました。

それから稍々久しく待っているうちに、法印さんはひょっこり帰って来ました。家の人たちが気の毒がって、風呂敷包みのなくなった事を話しますと、それでいいそれでいいと言って少しも心配せずに只笑っております。そうして皆と一しょになって、家中をよく探して見ると、縁の下の一番奥の方に、古狸が一匹死んでいたそうであります。なくなった道具類も大抵はそのあたりにありました。狸は手に大きな握飯を持ったままで、半分食べかけて死んでいたということであります。これはまちんという狸の毒薬を、其握飯の中に入れて置いて、風呂敷に包んでわざと忘れて行ったのであると、法印さんが笑いながら話したそうであります。（磐城石城郡）

湊の杙

むかし三河の平阪の湊に、悪い狸がいて毎度船頭たちを困らせました。その狸の一番よくない悪戯は、杙に化けていて船頭に小舟を繋がせることでありました。そうして舟の者が陸へ上って遊んでいるうちに、その舟を何処かへ持って行ってしまうのであります。平阪の湊には杙などはちっともなかったのですが、夕方に他所から来た船頭などは、狸が化けていることを知らないので、これはちょうど好い所に杙があったと、うっかり繋いで置いては小舟を流してしまうのでありました。

こういう狸の悪戯に懲りてしまって段々に平阪の湊へ遊びに来る者が少なくなりました。そこで土地の元気のいい人たちは、これは是非とも狸退治をしなければならぬと、ある月夜の晩に、縄だの棒だのを小舟の中に匿して、三四人の若い連中が漕いで出ました。土手の蔭だけが少し暗くて、水の上は平一面に白く光っている晩でありました。この辺から上って行くとよいのだが、何処にも杙がないなあと、わざと一人が大きな声で言いました。そうすると何時の間にか土手の近くに、太い一本の杙がにょきと出ていました。若い人たちはお互いに目を見合わせて、少しも知らぬ顔をしてその傍を漕いで通ろうとしますと、水の中から小

さな声でくいっ、くいっ、という者があります。狸は元来少し智慧が足りないので、誰も気が付かぬのをもどかしがって、こんな声を出したのでありました。ああここに太い好い杙があったのに、ちっとも気が付かなかったと、皆して笑って、舟の中から綱を出して、早速その杙を縛りました。いつもの倍以上もある長い綱でありました。それでぐるぐると丈夫に舟を繋いで、それから次には棒を出して、寄ってたかってその杙を打ちました。そうすると忽ち杙が泣き出して狸の化けの皮は露れ、とうとう悪狸は退治られてしまったそうであります。めでたしめでたし。（三河幡豆郡）

狐が笑う

むかし美作の或山の峠の上に、一軒家の茶店があって、喜兵衛という人の夫婦が住んでおりました。その喜兵衛の茶屋へ、或日の晩おそくなってから、立派な身なりをした旅の武士が、入って来て休みました。よく見るとそれは狐の化けたのでありました。袴や着物や大小の刀ばかりは、本当の武士の通りでありましたが、まだ一向未熟の狐だったと見えて、少し毛があって顔は尖っておりました。耳も三角で突っ立っておりました。それを自分では知らぬものだから、よく化けたつもりで、大そう威張っておりました。喜兵衛はおかしくて堪り

ませんが、やっと我慢をして笑わずにいました。しかしどうするか見て遣ろうと思って、金盥に水を一ぱい汲んで来て、御使いなさいましとその狐の武士の前に置きますと、暫くしてから狐は水を使うつもりで、うつむいて自分の顔を水に映して、始めてまだ化けきれずにいたのに気が付きました。そうして非常に驚いた声を出して、茶屋を飛び出して何処へか行ってしまいました。

その次の日に、喜兵衛は一人で山へ木を伐りに行きました。そうして還って来ようとしていますと、出しぬけに林の中から、喜兵衛さん喜兵衛さんと、小さな声で呼ぶ者があります。姿は見えなかったけれども返事をしますと、喜兵衛さん、昨晩はおかしかったなあとその声が言いました。それじゃ昨晩の狐だなと、喜兵衛さんにはすぐわかりました。昔は狐でもこの通り正直で、人と一しょに笑うことが出来るものと、多くの山の人は思っていたのであります。

夢を買うた三弥大尽

むかし日向国の三弥という大金持ちが、まだ貧乏な旅商人であった時、夏の日に仲間の者と二人づれで、或山路を越えて寂しい高千穂の村へ入って行きました。あんまり暑いから少

し休もうと言って、路の横手の樹の蔭(かげ)に横になって、友だちは直ぐに睡ってしまいました。それを三弥がまだ起きて見ていますと、一匹の蜂(はち)が寝ている男の鼻の穴から飛び出して、どこか遠くの山の方へ飛んで行きました。妙なことがあるものだと思うと、やや暫くしてその蜂は還って来て、再びその男の顔のまわりへ来ていなくなりました。それから眼を覚ましてその友だちが言うには、今実に珍らしい夢を私は見た。なんだかこの近くの山でもあるらしかったが、あるいて見ると一谷が、金で一ぱいになっている所があったと語りました。それはまことによい夢だ。それを私に売ってくれぬかと言いますと、夢なんか何になるものか、ばかなことを言うといいましたが、とうとうお酒か何かこの男の好きなものを遣って、夢をこちらへ買い取ることにしました。それから幾日かの後に、三弥は又一人でこの土地へ戻って来て、毎日々々一しょう懸命になって、山という山を探しまわりました。そうしておしまいに見つけ出したのが、外録という金山であったそうであります。それが三弥の一代の間、夢で見た通りに莫大の金を出して、またたくうちに九州一の大尽になりました。不思議なことにはこの人が死んでしまうと、すぐに大地震が起って山が崩れ、今ではその跡は一つの沼になっているということであります。(日向西臼杵(にしうすき)郡)

蛸島(たこじま)の虻(あぶ)

是もむかし能登国蛸島の湊に、柳何がしという人がありました。或日一人の若い者を連れて、鯖(さば)を釣りに小舟に乗って沖に出ましたが、面白いほど鯖が沢山に釣れるので、還ることも出来ないでいつ迄(まで)も釣っておりますと、舟を漕ぐ若い者は退屈をして寝てしまいました。主人は暫くして、ふと気が付いて見ますと、何処(どこ)から来たものか三匹の虻が飛びまわって、しきりに寝ている男の鼻の穴から、出たり入ったりしています。こんな沖合に虻などの飛んで来るわけはないがと思って、その若者の寝ているのを揺り起しました。若者が起きて言うには、私は今実に珍らしい夢を見ていました。村の丸堂の中から三体の仏様が、三匹の虻になって飛んで出られたのを、どこ迄行かれるのかと見届けようとしているうちに、貴方(あなた)がお起しになったのですと申しました。主人は之(これ)を聴いて、それはなる程奇妙な夢だ。それでは今日の鯖を残らずお前に上げるから、その夢を私に売ってくれぬかと言いました。夢なんか若(も)し買って下さるならば、幾らにでも売りましょうと言って、男は沢山の鯖を貰って、喜び勇んで共々に還って来ました。柳の主人はその足で直ぐに、村の丸堂という御堂の在る所に行って見ますと、果して夢の話の通り、御堂の壁の隙間から三つの虻が、出入りをしており

ました。笠を手に持って待っていて、そっとその虹を押えて大急ぎで家に帰り、座敷の中でその笠を除けて見ますと、虹ではなくて一寸八分ほどの美しい三つの御仏像でありました。これを三つとも家に置いては、あんまり慾が深過ぎると思いまして、阿弥陀様は村の勝安寺というお寺に納め、弁天様は湊の外の、小さな島に持って行って、今でもそこを弁天島といっております。そうして残りの毘沙門さまの像だけは、今でも大事にして、この家で祭っているという話であります。（能登珠洲郡）

だんぶり長者

昔々奥州のまた奥の郡に、だんぶり長者という途法もない大金持ちがあったそうです。家には三千人の家来があって、一日に百石ずつの御飯を炊きました。その御飯の米を磨いだ白水が、米代川へ流れて出た為に、今でも米代川の水は白く濁っているのだといっております。此だんぶり長者が都に上って、長者の御印を戴きとうございますとお願い申しました時に、長者というものには天から授かった宝物がなくてはならぬ。人間第一の宝は子宝である。その子宝が有るかというお尋ねがありました。私は小豆沢の大日如来に信心をして、授った女の子がただ一人あります。今度も都見物のために、連れて参っておりますと申し上げました。

呼び出して御覧になりますと玉のように美しい姫でありましたので、後に貴い方の御妃になされたそうであります。

だんぶり長者は若い頃には、正直でよく働くただの百姓でありました。山に入って小屋を掛けて、夫婦で山畑を拓いて耕作をしておりました。ところが或日の昼休みに、大きな口をあけて畠の脇に昼寝をしているのを、女房が起きて見ていますと、向いの山の下から一匹の蜻蛉が、二度も三度も飛んで来ては、男の顔の上や口のまわりを飛びまわりました。不思議に思っているうちに眼を覚まして、おれは今なんとも言われない好い酒を飲んだ夢を見たと言いました。そこで女房は蜻蛉の話をしまして、どういうわけだろうと思って、二人でその山の陰に行って見ますと、岩の下からきれいな泉が流れていて、掬んで見るとそれが泉酒でありました。そうして又その同じ山からは、幾らでも黄金が出て来ました。その黄金をどしどしと採って還って来たので、忽ちこんな大金持ちになってしまったのであります。だんぶりというのは、奥州の言葉で蜻蛉のことであります。蜻蛉に教えてもらって長者になったから、それで名前を蜻蛉長者と呼ぶことになりました。（陸中鹿角郡）

藁しべ長者

大昔貧乏でなんともかともしようない人がありました。大和の長谷の観音様に参って来まして、どうかお助け下さいと朝から晩まで晩から朝まで、幾日も幾日も一しょう懸命になって拝んでおりました。そうすると或夜の夜明け方に、まことに不思議な夢を見ました。観世音がお堂の奥の方から出てお出でになって、其方は前の生の行いが悪かったので、今の此世で報いを受けているということも知らずに、いつ迄もそのように禱っているのは愚かなことだ。其方に授ける福は何一つとてないが、あまり不便だからほんの少しだけの物を遣わすぞ。これから下向の路で何によらず、最初に手の内に入ったものを、賜わり物と思って持って帰れということでありました。男はその夢を観音様のお告げと心得まして、もうあきらめて次の日は京都の方へ還ることになりました。ところが長谷のお寺の大門を出ようとするときに、どうした拍子でか、つまずいて転びました。起き上って気が付いて見ますと、知らぬ間に自分の手に、一本の藁しべを摑んでおりました。それではこれがあの夢のお告げの、観音様の賜わり物であったのか、心細いことだと思いましたけれども、根が信心深い男ですから、その藁しべを大切にして持って出て来ました。

春の暖かい日であったそうです。途中で一匹の虻が飛んで来て、顔のあたりをうるさく飛びまわりました。木の小枝を折って逐いますけれども、直ぐに又飛んで来てたかります。おしまいにはその虻を手で捕えまして、ちょうど持っていた藁しべでそれを縛って、その小枝に結び付けました。虻はぶんぶんと縛られたままで、枝のさきで飛びました。そこへちょうど京都の方から、きれいな牛車に乗り数多の家来を連れて、長谷に参詣する人が来ました。車の中には小さな男の子と、その子の母親とが乗って外を見ていました。子どもは牛車の簾の中から、この男の手に持つ虻を見つけて、あれが欲しい欲しいと言いました。そうすると馬に乗った一人の家来が、急いで貧乏人のそばへ遣って来て、若様がその虻を欲しいと仰せられる。なんとそれを差し上げてはくれまいかと申しました。これは只今観音様からいただいて来た藁ですが、お子さまがお望みとありますれば、差し上げましょうと言って渡しますと、車の中の奥方は大そうなお喜びで、咽が乾いたろうからお食べと、見事な蜜柑を三つ、真白な紙に包んでこの男に下さいました。

わずかここまであるいて来るうちに、もう藁しべ一本がこんな見事な蜜柑になった。御利益は有り難いと思いまして、又それを大事にして手に持って帰って来ると、今度は路の脇に二三人の従者をつれて、休んでいる若い女の人がありました。暑くて咽が乾いてどうしてももうあるくことが出来ない。何処かこの辺に水はなかろうかとこの男に尋ねましたが、近く

には井戸も流れもありませんでした。あんまり苦しくて気が遠くなるほど、若い女の主人が水を欲しがるので、家来たちも困ってしまいました。それならばここにたった今京都の奥様から下さった蜜柑があります。これを差し上げて御覧になってはいかがと言いますと、女の人は大喜びで、早速それを貰って食べました。ああこの人が来て蜜柑をくれなかったら、私は長谷の観音様へお参りも出来ずに、道中で死んでしまっていたかも知れない。何かお礼をしなければならぬのだが、旅のことだから他(ほか)には何も上げるものがない。まあ何か食べて下さいと、用意の御弁当を出して、そこで十分に食事をさせました。それから別れて帰ろうとしますと、これはほんの心ざしばかりと言って、荷物の中から好い布を三反出してこの男にくれました。

その三反の布を脇にかかえて、男は喜び勇んで又路をあるいているうちにだんだん日の暮れに近くなりましたが、むこうの方から立派な馬に乗った一人の武士が、家来を引き連れて急いで来ました。なんと良い馬もあるものだなと見ておりますと、不意にその馬が此男の立っている前まで来て、ばたりと倒れました。是は困ったことになった。今までなんともなかった馬が死んでしまった。仕方がないから後に残ってなんとか始末してくれと家来に言いつけて置いて、主人の武士は大急ぎで先へ行きました。この武士も家来も遠方から来た人で、どうすることも出来ないで弱りきって、家来たちは倒れた馬の傍に、しゃがんで評議をして

おりました。それではその馬は私が引き受けて片づけましょうと、貧乏人は其家来たちに言いました。そうして只で貰うのもお気の毒だから、これを上げますとさきの三反の布の中から、一反だけ出して遣りますと、家来たちは顔を見合せて安心したような様子をして、その布を持って急いで主人の後を追うて行ってしまいました。観音様の御慈悲は争われない。一日のうちに、藁しべが蜜柑三つになり、その蜜柑が三反の布になり、布は又こんな良い馬になった。どうか出来ますならばこの馬を、今一度活き返らせて下され観音様と、信心を凝らして念じているうちに、馬が目を開けて少しずつ動き出しました。大喜びで口を取って引き立てると、馬は立ち上って身ぶるいをしてあるき始めました。人に見られると盗んだと思われるかも知らぬと思って、林の陰につれて来て、樹に繋いで休ませました。そうして夜に入って後に村里に行って残りの二反の布で麦と秣(まぐさ)、それから粗末な馬具などを農家から譲って貰って来ました。それで十分な支度をして、夜中になってからその馬に乗って、林の陰を出て来ました。

京都に還って来たのは、次の日の朝早くでありました。京都の町の入り口に一軒の大きな家があって、今日遠方に引っ越しをする様子で、荷物をくくったり人を喚(よ)んだり、家内中大騒ぎをしていました。こんな時にはよく馬の入用があるものだ。もしかすると買うかも知れぬと思って、門口に立って馬をお求めになりませんかと申しました。そうすると主人が出て

来て、これは如何にも好い馬だ。ちょうど是くらいの乗り馬を一頭、買い入れたいと思っていたのだが、旅に出るところで、お金に不自由している。なんとこの近くに少しばかりの田があるがそれをこの馬の代りに取って作ってくれぬか。それから此家も留守のうちは住む者がない。預けて置くから私たちの帰って来るまで、入って自由に住んでいてよろしいと言います。それで承知をして馬を渡しますと、喜んでそれに乗って、その日のうちに家の人たちは、遠い関東へ旅立ってしまいました。

虻の男はその跡に住んで、譲り受けた田を耕し、忽ちに立派な農家になり、一年ましに暮しが安楽になりました。元の家主はその後何か事情があったと見えて、幾年経っても帰って来ませんでした。それで自然にこの大きな家が自分の物となり、永く子孫が繁昌して、大和の長谷の観世音の御利益を、感謝したという話であります。

炭焼小五郎

昔々、豊後国の有名な真野長者は、元は炭焼小五郎という貧しいよく働く青年でありました。三重の内山という所に小屋を建てて、一人で炭を焼いて暮しておりました。この小五郎の小さな寂しい炭焼き小屋へ、都から美しいお姫様が、尋ねて下って来られました。私は京

の清水の観音様のお告げを受けて、あなたの家へお嫁に来た者です。今日からこの小屋に置いて下さいと言いました。折角遠い都から遙々と嫁に来て下さったのは嬉しいけれども、この小屋には今晩二人で食べるだけの、お米さえもありませんと言いますと、それならば町へ出てそのお米を買うて来て下さいと、お姫様は錦の袋の中から、二枚の小判を出して炭焼小五郎に渡しました。小五郎はその黄金を手に持って、山を降りて町へ食べ物を求めに行きました。内山の麓には谷川が流れています。その岸には川楊の林が茂って、その陰が静かな淵になっていました。林の中の路を小五郎が通っていますと、二羽のおし鳥がその淵の上に遊んでおりました。小五郎はそれを見かけて立ち止まって、手に持つ二つの小判を礫にして、その鳥を打ちました。よく狙って打ったのですが、おし鳥は飛んで逃げ、小判は水の底に二つとも沈んでしまいました。それで仕方がないので又山の小屋へ戻って来ました。今途中で水鳥を見つけたから、捕って来て上げようと思ったが、中らなかったと申しました。

花嫁はそれを聞いてびっくりしました。あれは大切なこの世の宝で小判というものであります。あれだけあれば沢山の米や魚鳥が買えるのに、惜しいことをなされましたと言いました。そうすると炭焼小五郎も始めて知って、大へんに驚きました。あの石がそんなに貴いこの世の宝だとは少しも知らなかった。それならばこの小屋の後の山に、幾らでもあの色をした小石が転がっていると言って、早速二人で松明をつけて見に行きますと、果して小五郎の

話した通り、一谷の小石はことごとく純金でありました。それを拾って来て小屋の中に運び入れますと、忽ち炭焼小屋が一ぱいになったので、その残りは小屋の外に積み上げて置きました。町や里の人たちはその事を聞いて、我も我もと色々の物を売りに来ました。そうして黄金を分けてもらう為に、皆が小五郎夫婦の為に働いてくれました。そこで三重の内山には大きな屋敷を開き、又観音の御堂を建てて信心しました。奥州のだんぶり長者と同じように、玉のような、きれいな姫が生れて、後に都に上って御妃になり、家はますます栄えました。元が炭焼きであったから、それで炭焼長者と人がいいました。

二十騎が原

むかし甲州の西山に、家富み栄えた一人の長者がありました。沢山の田や畠を家来に作らせ、又広い林や野を持っていて、狩りなどをして日を送っていました。長者夫婦には十人の男の子がありました。それが皆大きくなって、いずれも立派な逞しい若者になりました。或日その十人の兄弟は、野原に出て弓を射て仲よく遊びました。長者夫婦もつれ立って出て来ました。高い桟敷をかけさせてその上に坐って見物をしていました。若い人たちは華やかな晴れ衣を着て、鹿毛や黒や月毛や、色々の馬に乗って出て来ました。そうして自由自在に野

原を馳せまわって、おのおの精一ぱい弓の技を、親たちに見せました。

長者はこの有様を見て大へん喜んで、傍に添うている自分の妻に話しかけました。十人の子宝は決して少ないと言われない。しかし若しこの上に尚十人の男の子があって、それが共々にこうして同じ野で、弓を射て遊ぶのであったら、どんなに心丈夫で又楽しいことであろうと申しました。そうすると長者の女房は之を聴いて、それならば本当の事を打ちあけましょう。本当はこの子どもの生れる時に、どれもこれも双子で生れたのであります。余り多いと思って遠慮をして、実は今まで別の所で育てて置いたのです。直ぐに喚びに遣りますから会って下さいと言って、大急ぎで使いを走らせました。暫く待っているとこの野の向うの端から、若い武士が又十人、これも皆良い馬に乗り、花のように色々に染めた狩衣を着て、箭を負い弓を手に持って現れて来ました。そうして長者の前に来て礼拝をしました。どれもこれも男らしく、りりしい若者ばかりでありました。それが前の十人の兄弟と入り交って、この広い野原を縦横に馬を走らせ箭を射て、日の暮れるまで面白く遊んだそうであります。

その長者の家は、長い間にもうなくなってしまいました。そうしてその家の跡が山になり野になりました。然し長者の二十人の子どもが、毎度連れ立って出て遊んだという野原は、二十騎が原と謂って、久しい後まで名が残っていました。それから少し離れた小山の麓には、又赤子沢という所もありました。長者の妻が家を建てて、その十人の双子の片方を育ててい

た谷だから、それで赤子沢というのだと話す人もありました。

長者の宝競べ

むかし肥後の菊池の米原の長者と、山本郡の駄原の長者とが、宝物くらべをしたことがあるそうであります。米原の長者は自分の住む米原の村から、山鹿の茂賀浦の阪口という所まで、田底三里の間に黄金の飛び石を敷いて、それを踏んで出て来ました。駄原長者は何一つの持ち物もなく、男の子二十四人を引き連れて出て来ました。米原の長者には子というものが一人も有りませぬ故に、之を見てうらやましいと申しました。それから後はそこの阪を、今に浦山の阪ということになったそうであります。

会津の鶴塚

昔奥州の会津に、常安という長者がありました。この長者も何百と算えることも出来ない倉を持ち、その倉に一ぱいの金銀と米、その他色々の宝物を貯えておりましたけれども、子というものが一人もなくて、それを遣って喜ばせることが出来ませんでした。あんまり寂し

くて仕方がないので、鶴を飼って子供のように可愛がっておりました。鶴は長生をする鳥だから、永く長者の跡が残るだろうと思って、それを子供の代りに育てておりました。ところがどういうわけかその鶴がまた死んでしまいました。長者夫婦は非常に力を落して、鶴の為に大きな塚を築きました。それが鶴塚と謂って今でも残っております。そうして長者の家の跡は、もう何処だかわからなくなってしまいました。

湖山の池

昔々、因幡国の湖山長者は、一千町歩の田を持った大きな地主でありました。毎年五月の田植えの日は、何千人という田人早少女を使って、一日の中にその千町の田を植えてしまうのが、長者の家の昔からの習わしになっておりました。ところが或年の田植えの日に珍らしい事が起って、どうしても晩方までに千町歩を、植えてしまうことがむつかしくなりました。その珍らしい事というのは、ざっと先ずこんな話であります。

その日も毎年の通り朝早くから、若い田植えの女たちが田に下りて、いつもの佳い声で田植え歌をうたい、面白く田を植えておりますと、どこの山から出て来たものか、一匹の大きな牝猿が、子猿を背に逆さまに負うて、その広い水田の畔を通って行きました。何百人の苗

持ち男、何千人の早少女たちは一時にふりかえって、この不思議な猿の親子の姿を見ました。ほんの僅かばかりの間、立って見ていたのでありますが、なんにせよ、これだけ大勢の働く人が残らず手を休め腰を伸ばしたのですから、為事がその為に大へんにおくれてしまいました。太陽がもう西の山の嶺に近くなっても、まだ広々とした水田の面が、白く光って残っています。明るいうちに植え尽すことがなんとしても出来ないということになりました。

湖山長者は高い所から、この様子を見ていまして、おれの家ではいつの田植えにも、昔から此田を一日に植え切らなかったことは一度もない。今年ばかり千町歩の田植えに、二日かかったとあっては、長者の名折れだ。若しも思うことが何事でも心のままに成るのが長者であるならば、今日はこの日の暮れて行くのを、是非とも止めねばならぬと言って、黄金を張った扇を一ぱいに開いて、夕日に向って戻れ戻れと、三べんまで招き返しました。そうすると果して長者の思い通り、山に沈みかかった日輪が竿三本の長さだけ、三べんに戻って来ました。千町歩の田植えはその光の下で、此日も滞りなくすませましたそうです。しかしこの様な事をして自ら長者の威勢を試みるのは、勿体ないことでありましたから、忽ちにその天罰を受けました。長者の幸運はこの時を絶頂として、それから次第に降り坂に向いました。今では子孫が悉く死に絶えて、何処に長者の家が在ったかも、もはや尋ねて見ることが出来なくなりました。或は大地震があって潰れたとも謂いますが、その千町歩の長者の田は、いつの間にか大きな湖水になっております。汽車の窓からよく見える、湖山の池という広い美しい湖水は、むかし湖山の長者が入り日を招き返した田の跡だと言い伝えられておるのであります。(因幡気高郡)

梅木屋敷

むかし奥州の滑志田村に、助右衛門という又一人の長者がありました。この長者の家では親代々の言い伝えがあって、いかに貧乏して家屋敷を売ることがあっても、庭前の梅の樹だけは売ってはならぬ。必ず掘り起してどこかへ持って行って植えるようにと、堅い戒めになっておりました。ところがよもや貧乏になることはあるまいと思われた助右衛門の家が、だんだん微禄して、どうしても屋敷を売らなければならぬことになった時、それでも主人は先祖の教訓を忘れないで、老いたる梅の樹を掘り起して、隣の小屋敷に移そうとしました。そうすると不意にかちりと鍬の尖に、大きな古甕が掘り当って、蓋を取りのけるとその中から、大判という黄金が山のように出て来ました。家の人たちは大喜びで、直ぐにその金を出して借りた金を返し、屋敷を売らずに済んだばかりか、前よりも一層立派な家を建てて、元の長者となって繁昌することになりました。ところが困ったことにはこの助右衛門の屋敷には、

まだ何本となく老木の梅がありました。そうして其樹の下から黄金の甕の出た話を、子孫の者がよく覚えていて、安心して奢った暮しをしました故に、暫く経つと又貧乏になりかけたのであります。それで大急ぎに別の梅の木の根もとを、一本々々と掘って見ましたけれども、今度はどれからも大判は出て来ませんでした。そうしてしまいには家も梅の樹も悉くなくなって、今ではその屋敷の跡だという只の大きな畠を、いつまでも人が梅木屋敷と呼んでいるだけになったという話であります。

本取山

昔々、越中礪波郡の山奥に、いくら深いとも知れぬ洞穴がありました。山の麓の村に住む人たちは、いつでもこの岩屋の穴の口に来て、家で入用なお膳だのお椀だのを、借りて来ることにしていたそうであります。たとえば明日はお客があって、うちの道具だけでは間に合わぬという時には、前の晩にこの穴へやって来て頼みました。私は村の何左衛門でござります。あすは是々のことで客をいたしますのに、膳椀の数が足りませぬ。どうぞ十人前だけお貸しなされて下されと言って、還って次の日の朝早く又行って見ますと、必ず立派な器が頼んで置いた数だけ、揃えて穴の口に出してあったものだそうです。それを使った後でよく洗

って拭いて、次の日に同じ所へ持って来て、有り難うござりましたとお礼を述べて戻ると、何時の間にかそれがしまい込まれたということで、誰が貸してくれるものか、見たという者は一人もありませんでした。

赤や青色の漆塗りの、まことに美しい膳椀であったそうであります。ところがある慾の深い人がこれを借りて来まして、あまり欲しいのでもう返さぬつもりになりました。催促をしに来る者のないことを知っていましたから、平気でいつ迄もそれを使っておりました。それから岩屋の穴の口では、もはやなんとお願いしても、決して道具類を貸してくれぬようになったのは、当然のことでありました。しかしその不正直な百姓には、別になんの罰もありませんでした。そうして夫婦で働いて、少しずつ家が金持ちになって来たばかりでなく、その夫婦が子どものないのを寂しがっていたところが、そのうちに一人の男の子さえ生れて、大悦びをしました。

ただ困ったことには折角生れた一人子が、五つになっても六つになっても、まだ起ってあるくことが出来ません。今に立つだろうと言って待つうちに、とうとう十の歳になりました。秋の稲刈りがすんで、それを持ちこんで家の表の庭で、夫婦はせっせと籾を扱いて、俵につめておりますと、今まで足の立たなかった男の子が、家の中から匍い出して来まして、そこいらを遊びまわっておりましたが、そのうちにふいと庭先に転がしてあった二つの俵の中に

入って、両方の手に俵をつかまえて、始めてその子が立ち上がりました。ああ立ったと手を打って、二人の親が大喜びで見ていたところが、男の子はその俵を両方の手に持ったままで、なんと、今までに立つことすらも出来なかった者が、すたこらとあるき出したではありませんか。

　夫婦も始めはただ不思議に思って見ていたのですが、あんまり急に足が達者になって、俵を下げたままで屋敷から外へ出て行きますので、びっくりしてその後を追いかけました。しかし足が早くてどうしても追い付くことが出来ません。そうして見ている間に段々と遠く山路を登って行って、おしまいに以前お膳やお椀を貸してくれた岩屋の中へ、ずんずんと入って行ってしまいました。父親も大いそぎで後からその穴の口まで遣って来て覗いて見ましたが、中は真暗で何物も見えず、又怖ろしくて入って見ることが出来ませんでした。仕方がないのでぼんやりしてそこに立っておりましたら、穴の奥の奥の方で、話をする声が聞えました。やっと米を二俵だけ持って来た。是でまあ本だけは取れたと、誰かが大きな声で言うのが聞えたそうであります。

　このお話は是でおしまいです。それからこの岩屋のある山の名を、本取り山というようになったのだと言っております。

鶯姫

　昔々駿河国に、一人の爺がありました。山で竹を伐って来て色々の器を作り、それを売って渡世にしていたので、竹取りの翁と謂い、又箕作りの翁とも古い本には書いてあります。この箕作りの翁は或日竹林に入って、鶯の卵が巣の中でただ一つ殊に光りかがやいているのを見つけました。それを大切に家に持って来て置きますと、おのずと殻が割れてその中からまことに小さな美しいお姫様が生れました。鶯の卵から生れた故に鶯姫と名を付けて、自分の子にして育てました。だんだんに大きくなって、後には又とないような綺麗なお姫様になり、光り耀く故に又かぐや姫とも呼ばれました。箕作りの翁の伐って来る竹の節の中には、いつでも黄金が一ぱい詰まっているようになって、元は貧乏であった老人が、僅かのうちに大そうな長者になってしまいました。その長者の美しい姫のところへ、聟になりたいと言って色々の人が尋ねて来ましたが、いつも長者の親子からむつかしい問いをかけられて、それが答えられないので困って帰って行きました。時の天子様はかぐや姫の光りかがやくような美人であることをお聞きになって、狩りの御遊びの序を以て駿河国まで姫を見においでになりました。そうして都に上って御妃になるように、お勧めになりましたけれども、思う所が

あってこれをさえ御辞退申し上げました。その年の秋の八月十五夜に、月の光が清らかに、空一ぱいに照り渡っている時、真白な雲が迎えに来まして、かぐや姫親子は富士の山の上から、天へ上って行ってしまったそうであります。その折にこの一首の歌を添えて、死なぬ薬というものを天子様にさし上げました。

今はとて天の羽衣着る時ぞ君をあはれと思ひ出でぬる

天子様はこの和歌を御覧になって、大そう悲しみなされたということであります。そうして死なぬ薬にも用はないと仰せられて、天に最も近い富士の山の上に持って行って、それを焼いてしまうように命ぜられました。それから久しい後まで、富士の煙と謂って、常にこの山の頂上が燃えていたのは、その薬を焼き棄てた煙が永く残っているのだと言い伝えていたそうであります。

瓜子姫

むかしむかし爺と婆とがありました、爺は山に行って薪を伐り、婆は川に行って洗濯をしました。或日いつものように婆が川へ行くと、川上の方から瓜が一つ流れて来ました。それを拾って来て爺と二人で割って見ると、その中からまことに小さな、美しい女の子が生れま

した。瓜の中から生れたので、瓜子姫と名を付けて可愛がって育てました。だんだんに大きくなって、後には好い娘になって毎日々々機を織りました。今年の鎮守様のお祭りには、瓜子をお参りに連れて行こうと思って、爺と婆とはお駕籠を買いに、二人で町へ出かけました。留守にはぴったりと戸を締めて、中で瓜子姫が機を織っていますと、あまのじゃくが遣って来て作り声をして、この戸を少しだけ開けてくれと言いました。瓜子はついうっかりと戸を細目に開けてやると、それから怖ろしい手を入れて、あまのじゃくが戸をがらりと開けました。裏の柿の実を取って上げましょう瓜子さんと言って、瓜子を裏の畑へ連れて出て、裸にして柿の樹へ縛りつけました。そうしてあまのじゃくが瓜子の着物を着て、化けて知らぬ顔をして機を織っています。そこへ爺と婆とは駕籠を買うて、町から帰って来ました。さあさあ瓜子姫お駕籠を召せと言って、あまのじゃくを駕籠に乗せて鎮守様へ詣ろうとしていると、裏の柿の樹の陰から本当の瓜子姫が、瓜子を乗せないでようよう、あまのじゃくばかり駕籠に乗せてようようと、大きな声で泣きました。爺と婆とはその声を聴いて、びっくりして引き返して来て、それから爺は鎌をふり上げてあまのじゃくの首を切って、黍の畑に棄ててしまいました。黍の茎が秋赤くなるのは、そのあまのじゃくの血が染まったからだそうです。

(出雲)

米嚢粟嚢

むかしむかし或所に、姉と妹と二人の娘がありました。姉の名は米嚢で亡くなった母の子、妹の名は粟嚢で今の母の子でありました。継母はいつも姉の米袋を憎んでいじめていました。或日村の娘たちと一しょに、二人は山に栗を拾いに行くのに、姉には底の腐った古叺を持たせ、妹の粟嚢には新らしいこだすを持たせて遣りました。もう夕方になって、どの娘も栗を一ぱい拾ったからさあ帰ろうと言いましたが、米袋の叺だけは底が抜けているので、いつ迄も一ぱいになりません。それで友だちが皆帰ってしまって一人だけ山の中に残されました。腹がすいて仕様がないので、谷に下りて水を飲んでいますと、白い美しい一羽の小鳥が飛んで来ました。可愛い娘、私はもとはおまえの母親であった。おまえはおとなしくて今のお母さんによく仕えている。その御褒美にはこの小袖を上げる。常には土の中に隠して置いて、事のある時には出して晴れ着に着るがよいと言って、それに葵の笛と新しいこだすとを副えて、米袋に与えました。新しいこだすを貰ったので、栗の実がすぐに一ぱいになりました。それを背負って晩に家へ戻って来ました。

それから又四五日して、隣の村におまつりがありました。継母は粟嚢に好い着物を着せて、

そのお祭りを見に出かけて行きます。姉の米袋も行って見たいと言うと、お前は麻糸を三結び績んで、それが済んだなら来てもよいと言いました。それで一しょう懸命に苧を績んでいますと、友だちが大勢で誘いに来ました。わたしはこの為事を母に言いつけられたから行かれぬというと、友だちが哀れに思って手伝ってくれましたので、思いの外に早く為事が片付きました。それから白い小鳥に貰った小袖を出して来て、きれいになって皆と出かけました、途々あるきながら葵の笛を吹いて見ると、

　この笛を聴く者は
　天飛ぶ鳥は羽をよどめて聴け
　地を匍う虫は足をよどめて聴け

と、いう声に響いたそうであります。

隣り村のお宮に詣って見ますと、妹の粟嚢は母と一しょに、人形の舞いを見ていました。姉の米袋は饅頭の皮を、そっと妹に投げ付けて見ると、頬に当りました。あれ姉さんがあそこから、私に饅頭の皮を投げたというと、いやいや米袋には用が言いつけてある。なんで今頃来るものかと言って、母親は本当にしません。それから又少し経って、妹があちらを向いている時に、今度は飴の包みの竹の皮を投げて見ました。それも妹がそう言っても母親は信じません。それは誰か似た人ででもあるだろう。人に物を投げられたら脇を向いていろと言

いました。
　そのうちに母と妹がもう還りそうにするので、米袋は急いで先に戻って来て、着物を着替えて知らぬ顔をして待っていました。その次の日には隣村の人から米袋を嫁に欲しいと言って来ました。継母は妹の方を貰ってくれと言いますので、それならば二人のきりょう比べをして、美しい方にきめようということになりました。二人がお化粧をするのに髪には何をつけようかと妹がきくと、棚から油を持って来て塗って見ろと教え、姉が問うと水屋の流し元の水でも附けろといいました。粟嚢の髪は癖毛だから、櫛に引掛ってぴんぱらぴんぱらと鳴りましたが、それを母親は琴か三味線かの音のようだと言って賞め、米袋の髪の毛がすなおで沢山あって、櫛が通ってじょらじょらとするのを、まるで糞蛇が穴に入って行くような音だとけなしました。それでも髪を結ってしまいますと、誰が見ても姉の方が遙かに美しいので、とうとう嫁に貰われて行ってしまいました。妹の粟嚢は、それを見て羨しくてたまりません。私も早くあのような立派な駕籠に乗って、嫁入りがして見たいと言って母親をせがみました。母親は仕方がないので荷車に妹を載せて嫁はいらぬか嫁はいらぬかと、大声に触れてあるくうちに、その車が転げて、娘は田に落ちて田螺になり、悪い継母は堰に落ちて、堰貝になってしまったそうであります。（津軽七つ石）

山姥の宝蓑

　むかしむかし或山国の田舎に、美しい一人の娘がありました。春の日に村の人たちと山へ遊びに行って、路をまちがえて自分だけ、遠くの方へ行ってしまって、帰ることが出来なくなりました。そのうちに段々日が暮れて来て、どっちへ行くのがよいかと思って困っておりますと、向うにたった一つ燈火が見えるので、大喜びで尋ねて行きましたら、それが山姥の家で、山姥が一人で囲炉裏に当っていました。折角尋ねて来たけれども、ここは人を食う者の住居だから泊めてやることは出来ぬ。並の人間の家を探す方がよいと言いました。娘はこれを聴いてぞっとしましたが、もう食べられても構いませんからどうか泊めて下さい。どうせ今夜のような暗い晩に、これから山の中をあるいていれば、熊か狼かに食べられるにきまっております。それよりもここで食べられた方がまだよいからと言いました。
　山姥もそれを聞いて哀れに思いました。それでは大事な私の宝物だけれども、宝蓑という物をお前に上げるから、これを被ってもっと先へ行くがよい。この蓑を着て三遍如法の唱え言をすると、老人にでも子供にでも、自分の思った通りの者の姿になれる。又欲しいと思う物はこの蓑を持って振ると、なんでも出て来るからと言って、きれいな一枚の蓑をくれて、

使い方を教えてくれました。娘は喜んでその蓑を貰って、早速よぼよぼのお婆さんの姿になって、山姥の家から出て来ました。途中には怖ろしい鬼が集まって、待ち伏せをしている所もありました。あれ人が通る、取って食おうかという鬼があると、よせよせあんなきたない痩せた婆あを食ってもつまらないと他の鬼どもが止めました。そうして漸く夜の明ける頃に、知らぬ里に出て来て、ある長者の門の前に立ちました。私は行く所もない者です。どこの隅にでもよいから置いて下さいと言うと、情深い長者で、それでは長屋の空いておる所にいるがよいと言ってくれました。

それからその長屋にいて、昼は糸紡ぎなどをして暮し、夜は退屈なものだから、誰も知らぬ間だけそっと元の娘になって、手習いなどをしておりました。長者の息子が或晩遅くなって外に出て見ますと、長屋にたった一つ燈し火の光がさして、覗いて見ると美しい娘が一人静かに手習いをしています。どうかあの娘を嫁に欲しいものだと思って、次の日屋敷中を探して見ましたけれども、もうそんな女は何処にもおりません。不思議なこともあるものだと思っていると、今度は家の下男がどうかしてその姿を見つけまして、化け物かも知れぬと思ってその事を長者どのに話しました。それで早速この婆を呼んで来て、段々証拠を出して責めて見ますと、娘はもう仕方がないので、山姥に貰って来た宝蓑の話をしました。そうしてその蓑を脱いで娘の姿に戻って、自分の家と所を詳しく言って、どうか私の家へ届けて下さ

いと頼みました。長者の力で探して見ると、娘の家はやがてわかりました。家ではもう死んだ者と思って、お祭りをしていたそうであります。それを送り返してやると、大騒ぎをして喜びました。それから暫くしてその娘を、長者の家の嫁にもらうことになって、一家仲よく皆栄えたそうであります。めでたしめでたし。(甲斐)

竈神の起り

昔々或村に一人の百姓がありました。旅から帰って来る途中で、夜に入って俄雨が降って来たので、暫く路傍の道禄神の森の陰に、雨宿りをしておりました。そうするとその森の前を馬に乗って行く人があって、暗い所から声をかけました。道禄神はお宿ですか、今夜は何村にお産が二つあります。これから御一しょに生れ子の運をきめに参りましょうと言いました。森の中から又返事をして、折角お誘い下さったけれども、今はちょうど雨宿りの客があって、手が離せませんからよろしく願います。左様ならば一人で行って来ますと言って、馬の足音が遠くなりました。何村というのは自分の所のことですから、これは不思議なことだと気を付けておりますと、僅かばかりの後にその馬の主は帰って来て、又表の往来から声をかけて行きました。本家の方は男の子、分家の方は女の子、女は福分があって男は運があり

ません。これを夫婦にすれば女房の運で栄えるでしょうと言いました。

百姓は思いがけず、今日の赤子の運定めの話を立ち聴きしまして、急いで村に帰って見ますと、ちょうど自分の家に男の子が生れ、隣りの分家では女の子が生れていましたので、すっかり驚いてしまいました。それで早速に相談をして隣りどうしで今から縁組の約束をしました。二人が大きくなって夫婦になりますと、成程家は段々に繁昌しましたが、それを女房の運がよいお蔭だと、思っていることは亭主には出来ませんでした。後には追々と気に入らぬことばかり多くなったので、赤飯を炊いて赤牛にゆわえつけ、その赤牛に女房を載せて、強いて遠くの野原へ追い放してしまったそうであります。

女房は泣きながらその赤牛に乗って、何処へでも牛の行くなりに任せておりますと、段々と山に入って山中の一軒家の前に来て止まりました。その家の主人は親切な男で、色々と世話をしてくれますので、他に行く所もないから、とうとう其一軒家の嫁になりました。そうすると見ているうちにこの家の暮しが都合よくなって来ました。後には数多の男女を使って何不自由のない身分になりました。そのちょうど同じ頃から、女房を追い出した本家の方では、損をするような事ばかり続いて、次第に身上が左前になり、しまいには親代々の田畠までなくして、零落して笊売りになってしまいました。その笊売りがそちこちを売りあるいているうちに、或時ひょっこり山の中の、立派な一軒家に遣って来て、持っていた笊を残らず

買って貰いました。

それから後も他へ往っては少しも売れないので、毎日のようにこの山中の一軒家に来て頼んで笊を買って貰うことにしていましたが、或日其家のおかみさんがつくづくと笊売りの顔を見ていて、どうしてお前さんはそのように落ちぶれたか、元の女房も見忘れてしまったかと言うので、始めて気が付いて見ると、成程前の年赤牛に乗せて追い出してしまった自分の妻であったので、びっくり仰天して泡を吹いて死んでしまったそうであります。

女房はそれを見て可哀そうに思いました。そうして誰も知らぬうちに、そっとその死骸を竈の後の土間に埋めて、自身で牡丹餅をこしらえて供えました。その日外に出ていた家の人たち下女下男などが帰って来ますと、今日は竈の後に荒神様を祀って、その御祝いに牡丹餅をこしらえたから、幾らでも食べるようにと言いました。それが始まりで今でも百姓の家では、牡丹餅をこしらえて竈の神のお祭りをするのだそうであります。（上総長生郡）

矢村の弥助

むかし信州に矢村の弥助という親孝行の、若い農民がありました。正直でよく働いて、それでいて家は貧乏でありました。或年の暮れに僅かな銭を持って、正月支度の買い物に暮の

市へ出かける途で、路傍のわなに一羽の山鳥がかかって、ぱたぱたとしているのを見かけました。これは一つ助けてやろうと、罠の糸を弛めて山鳥を逃がしましたが、ただ逃がしては罠の主に済まぬと思って、手に持っていた一緡の銭を、山鳥の代りにその跡へ挟んで置いて、もう買い物の用がなくなったから、手を空にして戻って来ました。家の母親も心のやさしい人で、それは好い事をして来たと言って、親子二人で何もない寂しい正月をしました。そこへ見馴れない若い娘が一人訪ねて来ます。私は旅の者、雪に降られて難儀をします。なんでも働きますから春になるまで置いて下さいと謂って、お婆さんの代りに色々の家の用をしてくれました。至っておとなしいきれいな娘でありました。親も身寄りもない人ならば、いっそこの家にいて嫁になってくれぬかと、弥助の母親が相談をかけて見ましたら、喜んで承知をして嫁になりました。それから何年か仲よく暮しているうちに、有明山に悪い鬼が現れて、田村将軍が朝廷の仰せを蒙り、それを退治に行くことになりました。矢村の弥助は弓が上手だから、田村将軍のお供をして鬼征伐に出なければなりません。その時に弥助の女房がそっと弥助を呼んで、斯ういうことを申しました。有明山の鬼は魏死鬼と謂って、ただの弓箭ではとても射殪すことが出来ません。十三の節ある山鳥の尾羽根を箭に矧いで、其箭で射るならば一矢でも退治することが出来ます。一世一代の男の大事だから、その羽根を私が上げましょう。私はずっと昔の年の暮にわなにかかって、あなたに命を助けられた山鳥ですと言って、泣きながら何処へか飛んで行きました。後には十三節の見事な山鳥の尾羽根が残してありました。それだから、有明山の鬼が退治せられて、日本アルプスが明るい山になったのも、全くこの矢村の弥助の手柄であります。弥助はその手柄によって莫大な御褒美を戴き、永く信州の山奥に其名を留めました。（信濃南安曇郡）

狐女房

むかし能登国の万行の三郎兵衛という人は、或晩便所に行って帰って来て見ると、部屋に自分の女房が二人おりました。どちらか一人は化け物に相違ないのですが、姿から言うことまでも寸分の違いがなく、色々難題をかけて見ましたが、双方共にすらすらと答えるので、どうすればよいのかに困ってしまいました。そのうちに一人の方に、ほんの僅かな疑いがあったので、それを追い出してしまって今一人の方を家に置きました。それから家が繁昌して二人まで男の子が生れました。その二人の子が少し大きくなって家で隠れんぼをして遊んでいて、ふと母親に尻尾のあることを見つけました。正体を見られたからにはもうおることが出来ない。実は私は狐であったと言って、二人の子を残して泣いて帰って行きました。それから毎年稲のみのる頃になると、その狐の女房は三郎兵衛の田のまわりを、「穂に出いでつ

っぱらめ」と唱えながらあるいたそうであります。そうしてこの家の稲だけは、いつも少しも実が入らぬ為に、毛見(けみ)の役人が見に来て必ず年貢を許してくれました。それが刈り取って家に運んで来ると、後から穂を抽(ぬ)き出してどこの家よりもよく実ったので、この家の暮しはますます豊かになったということです。（能登鹿島(かしま)郡）

盲の水の神

むかし肥前の深江という村に、母とただ二人で住んでいる若い医者がありました。或日途中で村の子供が、白い鰻(うなぎ)をつかまえて殺そうとしているのを見て、命を助けて放してやったことがありましたが、やはり矢村の弥助さんのように、後に美しい旅の娘になって来て、此(この)家の嫁になったそうです。そうして一人の男の子が出来てから、正体を見られて帰って行ったということであります。ある時姑(しゅうとめ)が用があって嫁の部屋に行って見ましたところが、大きな蛇が子供を巻いて鼾(いびき)をかいて寝ていたので、それからもういることが出来なくなって、ねんごろに子供のことを頼んで帰って行きました。若(も)しよい乳母がなくて育てにくいようであったら、どうか普賢岳(ふげんだけ)の池の岸へ来て、私を喚(よ)んで下さいと言いました。

それから父親の手で子を育てて、乳が足りなくて難儀をしました。そこでその子を抱いて

山の上の池に尋ねて行きますと、約束の通りその女が出て来て、美しい一つの玉を取り出して子供に嘗(な)めさせました。これは私の眼の玉でありますが、乳の代りに嘗めさせるとこの子が丈夫に育ちます。大切にして持っていて下さいと言って別れました。ところがその帰り路で見巡りの役人がこの医者の懐中のふくらんでいるのをあやしんで、世にも珍らしい宝玉を持っていることを知って、それを取り上げて殿様にさし上げてしまいました。子供は乳が出なくなったので又泣き立てて仕方がありません。そこで翌日はもう一度同じ池の端にやって来ますと、今度は片目になって、その女が現れて、くわしくその話を聴きました。今一つある玉を遣ってしまうと、私はもう盲になるけれども、我子の為(ため)とあればそんな事はなんでもないと言って、残った片方の眼の玉を子どもの父に渡し、泣く泣く帰って行ったそうです。

しかしこれほど迄(まで)に親の愛情の籠(こも)った玉でしたが、それを又取られてしまいました。殿様と役人とはどこ迄も無慈悲であって、このような結構な玉は一対にして将軍家に献上した方がよいと言って、折角二度目に貰って来た玉も、又役人に持って行かれました。普賢岳の大蛇はこの事を聞いて、非常に怨み又憤ったそうであります。寛政年間の島原の大地震大津浪はその盲になった池の神の腹立ちから起ったと言っている人も沢山あります。そうすると大蛇の母から眼の玉を貰ったのは、今から百四五十年前の話ということになりますが、実際はもっと大昔からの話であったかと思われます。（肥前南高来(みなみたかき)郡）

爺に金

これはうっかりしている所へ金銀が飛んで来て、知らぬうちに大金持ちになった話であります。むかしむかし或村に、善い爺と悪い爺がありました。ある時善い爺は一人で山に入って為事（しごと）をしていますと、何処からともなく取っつこうかくっつこうかという声が聞えました。あんまり何度もその声がするので、爺は何心なく取っつかば取っつけ、くっつかばくっつけと言いますと、不意に両方の松林の中から金と銀とが幾らともなく飛んで来て、肩や背なかにうんという程乗りました。それを持って帰って家の中にひろげて、婆と二人で眺めていると、隣りの悪い爺が遣って来て、それを見て大そう羨しがりました。

おらもその真似をして宝物を背負って来ようと、次の日は隣りの爺が同じ山へ入って行くと案の条左右の山の中から、くっつこうか取っつこうかという声が聞えて来ました。早速大喜びでくっつかばくっつけ、取っつかば取っつけと言って背なかを出すと、今度は松の樹の上から松脂（まつやに）が飛んで来て、重いくらい悪爺の肩と背なかに附きました。婆あ婆あ今帰って来たぞ、早く燈火をつけて来て見せよ。と言って、婆は大いそぎで近くまで火を持って来ましたらその火が松脂にうつって、悪い爺は大火傷（おおやけど）をしたそうであります。

大歳（おおとし）の焚（た）き火（び）

昔々ある田舎に、貧乏な一人の馬方がありました。明日は元日だというのに一つも為事がなくて、空の馬を牽（ひ）いて家へ帰って来ようとしますと、街道の松並木の蔭に、きたない乞食が倒れて呻（うな）っておりました。やれやれ俺よりもまだ気の毒な人があったか、これは助けて遣らなければならぬと思って、幸い空っぽの荷鞍（にぐら）の上に載せて戻って来たそうです。そうして女房と相談をして、土間に筵（むしろ）を敷いて横に寝かせ、何もなけれども地炉（じろ）の火だけはうんと焚いて、どうやらこうやら年だけは取らせました。元日の朝はお天道様の高く上がらっしゃる迄も、その乞食は起き出して来ませんから、傍（そば）に寄っておいおいと、起して見ても返事がない。なんだか冷たくなっているようだと思って、びっくりして掛けてやった藁（わら）の筵をめくって見ると、乞食だと思ったのは大きな黄金の塊りでありました。それを使ってその馬方は、すぐに大金持ちになったそうです。めでたしめでたし。（三河南設楽（みなみしたら）郡）

笠地蔵

昔々ある村に、至って心の善い爺と婆とが住んでいました。爺は毎日編笠をこしらえて、町へ出て売って暮しを立てておりました。明日は正月という日にも笠を売りに出ましたが暮の市だから笠などは少しも売れません。しかたがないので笠を背負って戻って来ると、ひどい吹雪の中で野中の地蔵様が、濡れて寒そうに立っておられます。これはお気の毒だと思って、六つある笠を六つの石地蔵様に着せて上げました。そうして家へ来て婆にその話をして、何もする事がないからそのまま寝てしまいました。そうすると年越しの夜の明け方に、遠くの方から橇を曳く音がして、歌の声が聞えて来ました。

六台の地蔵さ
笠取ってかぶせた
爺あ家はどこだ
婆あ家はどこだ

こういって橇を曳く声が、段々と近くなって来るので、起き出して、ここだここだというと、戸の口へどっさりと、宝物の袋を投げ込んで置いて、六人の地蔵様が帰って行く後影が

見えたそうであります。

団子浄土

昔々ある所に、爺と婆とが又ありました。春の彼岸に彼岸団子をこしらえていたところが、一粒の団子が庭に落ちて、ころころと転がって行きました。だんごだんご何処まで転ぶと、爺がそう言って追っかけて行くと、地蔵さんの穴まで転ぶと言いながら、団子はとうとう穴の中に入ってしまいました。爺もその後から穴の中へ入って行きますと、穴の底は広くて、そこに地蔵さんが立っておられました。その地蔵の前でやっと団子をつかまえて、土の附いている方を自分で食べて、土の附かぬ方を地蔵さんに上げました。そのうちに暗くなったからもう帰ろうとすると、地蔵さんがおれの膝の上さあがれという。勿体なくて上れません。いいから上れというからその通りにすると、今度は肩の上さあがれといいます。膝までもやっと上ったのに、とても勿体なくて上れませんと断りましたが、無理に上れというから肩の上へあがりました。そうすると、今度は頭の上さ上れといいます。辞退をしてもなんでも上れというので、思い切って地蔵の頭のうえに上りました。そうすると一本の扇を地蔵さんが貸してくれました。今にここへ鬼共が来て博奕を始めるから、よい頃にこの扇をたたいて、

鶏の鳴く真似をしろと教えられました。案の如く大勢の鬼が遣って来て博奕を始めたから、しばらくしてから地蔵のいう通りに鶏の鳴く真似をすると、そらもう夜が明けると鬼共は大騒ぎをして、銭や金を沢山に残して置いたままで、皆逃げて行ってしまいました。それで爺はその金や銭を地蔵さんに貰って、喜んで家に帰って来ました。

うちでは婆が待っていて、二人でその銭金をひろげて見て大喜びをしていますと、ちょうど隣の婆が遊びに来てびっくりしました。どうしてこの家では、急にその様に福々しくなったのかと訊くので、正直な爺は有りのままの話をしますと、それならおら家の爺も地蔵さんの穴へ遣るべちゃと言って、急いで帰って二人でわざわざ団子をこしらえました。そうしてその中の一粒をわざと庭に落しましたが、ちっとも転ばないので足で蹴るようにして、無理やりに穴の中に入れて、自分もその後からのこのこと入って行きました。地蔵さんの前に行って見ると、団子が土まみれになって転がっています。その中のきれいな所だけを自分が食べてから、まわりの土の附いたのを地蔵さんに上げました。そうして誰も上れとも言わないのに、独りで地蔵さまの膝から肩、頭のてっぺんまでさっさと上って、貸すともいわない扇を黙って取って待ち構えていますと、やはりその日も鬼どもが集まって来て、地蔵の前で博奕を始めました。それで早速その扇をはたはたとたたいて、鶏の鳴く声を真似て見ますと、鬼たちはもう夜が明けるのか、早いなあと言って慌てました。そのうちに一匹の小鬼が遁げ

そこねて、囲炉裏の鉤を鼻の穴に引掛けて大きな声を出して

　やあれ待ちろや鬼どもら
　鉤さ鼻あひっかけた

と言ったので、爺は思わず知らずくすくすと笑ってしまいました。そうれ人間の声がしたと、鬼は方々捜しまわってとうとう地蔵さんの頭の上から、隣りの爺を引きずり落して、ひどい目に遭わせました。鬼が残して行く金を拾って来る代りに、やっと命だけを拾ってほうほうの体で遁げて還りました。だからあんまり人の真似はするものではないという話であります。

（羽前最上郡）

瘤二つ

むかしむかし目の上に大きな瘤のある坊さんがありまして、諸国を修行して或山家の村で泊めてくれる家がないので、仕方なしに古辻堂に入って一夜を明かしました。夜もすでに三更の頃おいに、多くの人の足音がして、この堂に入って来る者がありました。よく見るとそれは天狗さんで、ここに集まって酒盛りをするのでありました。とても夜どおし隠れているわけには行かぬので、怖しかったけれどもよい時刻を見はからって、自分も円座という藁の

敷き物を尻に当てて、飛び出して一しょに踊りました。明け方に天狗は帰ろうとして、おまえは面白い坊主だからこの次もまた来てくれ。しかし約束をしてもうそをつくといかぬからこれを質に取って置くと言って、目の上の瘤をむしり取って持って行きました。坊さんはうるさいと思う瘤を取られて、大喜びで故郷に帰って来ました。

　ところがその近所に又一人、同じところに瘤があって困っている坊さんがありました。この評判を聴いて羨しくてたまりません。くわしくその人の話を聞いて置いて、わざわざ瘤を取られにその辻堂まで出かけて行きました。案の如く夜ふけに天狗が集まって酒盛りをしますから、急いで円座を腰にくくり付けて踊り出して見ましたところが、天狗たちは大変喜んで、おお坊主、よく約束をまちがえずに又来てくれたな。大きに御苦労であった。それでは質に取って置いた瘤を返すぞと言って、何か顔へ打ち付けられたように思いますと、もう目の上のたん瘤が二つになっていました。そうして余計な人真似はしない方がよかったと、いつ迄も後悔をしていたそうであります。

奥州の灰まき爺

　むかしむかし奥州のある在所に、やっぱり善い爺と悪い爺とが、隣りどうしに住んでいま

した。二人の爺は同じ晩に、川の流れに雑魚を捕る筌(どう)というものを掛けて置きました。上(かみ)の爺が朝早く往(い)って見ると、自分の筌にはただ一匹の小犬が入り、下(しも)の爺の下の筌には、沢山の雑魚が入っていましたので、その筌の雑魚を皆取ってしまって、それへ自分の筌に入っていた小犬を投げ込んで置いて、知らぬ顔をして来ました。後から下の爺が川に行って見ると、自分の筌には可愛らしい犬ころが、入って鳴いているので、取り上げて家へ抱いて来て育ててやりました。椀で食わせると椀の大きさだけ、鉢で食わせれば鉢の大きさだけ、毎日々々大きくなって、少し経つと爺の山へ行くときに、色々の道具を背なかに背負って供をして行くようになりました。ある日その犬は、山で爺様に鹿を捕ることを教えてくれました。爺が大きな声で彼方(あっち)のしゝも此方(こっち)さ来う、此方のしゝも此方さ来うと呼ぶと、方々から鹿が集まって来るのを、一つ一つその犬が噛(か)み殺して、それを背負って帰って来ました。爺と婆とがそれを鹿汁(ししじる)に煮て食べていると、上の家の婆がやって来てその話を聴いて、それならば俺たちも鹿汁が食べたいから、犬を貸してくださいと言って連れて行きました。

　次の日上の爺は犬をつれて山へ行きました。犬が付けろとも言わぬにこれを持てあれを載せろと、斧(おの)だの鎌だの色々の道具を犬の背に負わせて、やれ急げそれ行けと、追い立てて山に入り、自分はしゝというのを間違えて、彼方の蜂(はち)も此方さ来う、此方の蜂も此方さ来うと、大きな声で呼んだものですから、山中の蜂が皆飛んで来て、上の爺をさしました。上の爺は

て来ました。下の爺はいつ迄も犬を返して来ないので連れに行くと、上の爺はうんうん唸って寝ていました。あの犬のお蔭でおれはこんなに蜂にさされてしまった。あんまり憎いから殺してこめの木の下に埋めて来た。犬が欲しくばこめの木の下に行って見ろと言いました。

それをみんな犬のせいにして、腹を立ててその犬をぶち殺して、こめの木の下にいけて還っ

下の爺はそれを聞いて大そう悲しみました。そうして山に行ってそのこめの木を伐って来て、その木で摺り臼を作って、婆と二人で臼を挽きながら、こういう歌をうたいました。

じんじ前には金おりろ
ばんば前には米おりろ

そうするとその臼唄と一しょに、爺の前には金が下り、婆の前には米が下りて、暫くの間に長者になってしまって、二人は好い着物を着て見たり、米の飯を食べたりしていました。そこに上の家の婆が又やって来て、何処からそんな好い物ばかり、出して来たのかと尋ねました。なにさこれはお前の所の爺様が、犬を殺してほうり込んだ山から、こめの木を伐って来て臼にして挽いたら、金だの米だのが出たものだから、こうして居申すと答えました。それならばその臼を貸してくれと、慾の深い上の婆は又摺り臼を借りて行きました。そうして爺と二人で一しょう懸命に、その臼を挽きましたけれども、肝腎の歌の文句は忘れてしまって、

じんじ前にはばば下りろ
ばんば前にはしし下りろ

と歌いましたので、その唄の通りに臭いきたない物が、幾らでも家の中に流れて来ました。爺と婆とはそれを摺り臼のせいにして、ひどく腹を立てて斧で切り割って、その臼を火にくべて焼いてしまいました。

下の爺は又暫くしてからその臼を取りに来ました。あの臼は飛んでもない臼であった。家の中をきたない物だらけにして始末におえぬから、切り割って竈の口にくべてしまったぞと、上の爺が言いました。それならば仕方がないから、その灰でも貰って行こうと、箕を持って来てその灰を入れて帰りました。そうして灰の箕を畑へ持って行って、畑の側の沼に下りている雁の鳥を目がけて、こう言いながらその灰を撒きました。

雁の眼さあくはいれ
雁の眼さあくはいれ

そうするとその文句の通りに、雁の目の中に灰が入って、ころりころりと死んでしまいます。それを拾って帰って又婆と二人で、仲よく雁汁をこしらえて食べていますと、又々上の婆が来てどうしてそんなうまい物を食べているのかと聞きました。お前たちは俺の所の臼を切り割って燃してしまったから、その灰を持って来て、撒いて見たら沢山の雁が落ちた。そ

れを拾って来て斯うして雁汁にして食べているといいました。

それならば少しばかりその灰を分けてくれと言って、又上の婆が爺に真似をさせました。上の爺は婆に教えられて、向い風の強い晩に屋の棟に上って、空に向いて灰を撒きましたが、やはり大切な文句を忘れてしまって、

じんじ眼さあくはいれ
じんじ眼さあくはいれ

と大きな声でどなったものですから、灰は文句の通りに爺の目の中に入って、爺は盲になって屋の棟からころころと落ちて来ました。雁の落ちて来るのを今か今かと、待ち構えていた上の婆は、それを雁だと思って大きな槌で打ったという話であります。（陸中江刺郡）

海の水はなぜ鹹い

昔の昔の大昔、ある所に兄と弟とが住んでおりました。兄は金持ちで弟は貧乏、年の暮れになっても明日の正月の支度も出来ないので、兄の家へ米を一升借りに行きましたが、ひどいことを言って貸してくれませんでした。仕方がないから家へ帰って来ようとしますと、山路で一人の真白な髯の爺様が、柴を刈っているのに出逢いました。何処へお前は行くのかと

尋ねますから、今晩は年越しだけれども、御歳神様に上げる米もないので、当てもなくただ斯うしてあるいているばかりだと申しました。それは定めし困ることであろう。それではこれを遣ろうと言って、小さな麦饅頭を出してくれました。この饅頭を持って彼処の森の神様のお堂へ行って見ろ、お堂の後には穴があって、そこに大勢の小人がいてきっとお前の饅頭を欲しがるだろう。金でもなく他の物でもなく、石の挽き臼とならば取り換えてやろうと言って、その臼を貰って行くがいいと教えてくれました。

教えられた森のお堂まで行って見ると、成程穴があって多くの小人が出たり入ったりしてがやがやと騒いでいます。何をしているのかと思うと、たった一本の萱に取り付いて、倒れたり転んだりしているのでありました。どれ俺が持って行ってやるべと言って、指につまんで、運んでやりました。そうすると穴の口で、人殺し人殺しと蚊の鳴くような声がするので、驚いて気を付けて見ると、小人が一人下駄の歯の間に挾まっていましたので、急いで丁寧につまんで出してやりました。なんたら力の強い大きな人だと言って見上げた拍子に、弟の手に持っている麦饅頭を見つけました。それを是非私達に譲ってくれと沢山の黄金を持って来て前に積みましたが、兼て白髪の爺様に聞いていますから、石の挽き臼とならば取り換えてもいいと言って、とうとうその臼を貰ってしまいました。これは小人の中でも二つとない宝物なのだが、饅頭の代りにお前に遣る。右へ廻すと欲しい物がなんでも出る。左へ廻すと出

なくなると教えてくれました。それを大事にかかえて家に帰って見ると、女房が待ちくたびれていました。年越しの晩だというに何処をあるいていた。米は借りて来たかとやかましく聞きますので、まあなんでもいいから早く蓙(ござ)を敷けと言って、女房に蓙をしかせてその上に小臼を置き、米出ろ米出ろと言って右へ廻すと、米がぞくぞくと一斗も二斗も出て来ました。この次は鮭(さけ)が出ろというと、大きな塩引きが二本も三本もひょこひょこと出た。それから順々に入用の物を皆挽き出して、その晩はなんともかとも言いようのない、目出たいお年取りをして寝ました。明くれば正月元日の朝で、俺はこんなに俄(にわか)長者になったのだから、今までのように人の片屋の借り住居などをしているのは面白くない。先(ま)ず新しい家を建てようと言って、挽き臼をまわして立派な家と、五間に三間の土蔵を出しました。それから長屋だの厩(うまや)だの、厩に繋(つな)いで置く馬を七匹も出して、あとはそれ餅出ろ酒出ろと言って、あたり近所や親類縁者を残らず呼んで祝い事をする支度をしました。村の人たちはびっくりして呼ばれて来て、今までにないような御馳走になりました。昨日一升の米を貸さなかった兄も呼ばれて来ました。どうして又一晩のうちに、こんな長者になったものであろうかと、不思議で不思議でたまらないので、驚きながらもそちこち気を付けておりますと、やがて客人が帰って行く時に、お土産の菓子でも持たせてやろうと思って、そっと陰に入って弟が例の石臼をまわして、菓子出ろ菓子出ろと言っておるのを隙見をして、ははあ今分かった。あの臼だなと

感づいてしまいました。

それからその晩客が皆帰って、弟夫婦がよく寝てしまった時刻を見はからって、兄はそっと入って来て陰の部屋から、石の挽き臼を盗み出しました。そうしてその序(ついで)にあった餅だの菓子だのも取って、浜に出て見ると幸いに小舟がある。これにその宝の臼を載せて、綱を解いて沖の方へ漕(こ)ぎ出し、何処かの島へ渡って一人で長者になろうとしました。併(しか)しその舟の中には餅や菓子のような甘い物は積んで出ましたが、あいにくと塩気の物が何もありません。それでは何よりも先に塩を出そうと、やたらに臼をまわして塩出ろ塩出ろといいますと、さあ出たわ出たわ、忽(たちま)ちのうちに舟に一ぱいの塩が出た。もうこのくらいで止めたいとは思いましたが、左へ廻して止めることを知らぬものですから、いつ迄もいつ迄も塩ばかり出て来て、とうとうその塩の重さで舟も兄も、盗んで来た石の小臼も、共々に海に沈んで今に誰一人として左に廻す者がない為に、海の底でその臼が、塩ばかり出して廻っております。それであの通り海の水は、塩からいのだということであります。(陸中上閉伊郡)

八(はっ)石(こく)山(やま)

昔々、越後国のある百姓の家に、兄と弟と二人の子がありました。兄の母は亡くなった母、

弟の母は今の母でありました。継母は兄を憎んで、どうかして自分の生んだ弟の方だけによい暮しをさしてやりたいと思っていました。それで一枚の山畑を二つにしきって、二人の兄弟に大豆を蒔かせて、どっちの畠の大豆がよく出来るか比べて見ようと言って置いて、夜中にそっと兄の畠に行って、今日蒔いた豆をみんなほじくり出してしまいました。

それだから兄の畠の方には、いつ迄経っても豆は生えて来ません。あの子は豆を蒔くのをいやがって何処かへ持って行って棄てたのにちがいないと、父親に言いつけて散々に小言を言わせようと思って、待ち構えていたのであります。ところが亡くなった兄の母が見えない所にいて、助けたものでありましたろうか。たった一粒だけ其畠の隅に、継母が見落して抜き出して来なかった豆粒がありました。それが芽を出してずんずん大きくなって、後には山よりも高い大木になって、その枝のさきが天まで届いてしまいました。そうして秋になるとその一本の木から、大豆が八石取れて継母の悪企みは、すっかり当てがはずれてしまったそうであります。それからその村の高い山の名を八石山ということになりました。北条の専福寺という寺の門柱は、その大豆の樹を伐って来て、それを材木にして建てたというそうであります。（越後刈羽郡）

犬頭糸

昔々三河国に、二人の女が隣りどうしに住んで、毎年蚕を飼って糸を取って暮しを立てていました。ところが一方の女の飼う蚕は、いつもよく出来て沢山の糸が取れるのに、もう一人の女の家では、どうも思うように育たなくて、段々に貧乏になりました。下女や下男もいやになって、追々に遁げて帰ってしまいました。最初に沢山に飼っていた蚕が、一つずつ死んで行って、いつの間にかたった一匹になっていました。ところがその一匹の蚕がよく桑を食って、毎日々々大きくなって来ますので、一匹ばかりでは仕様がないと思いましたけれども、それを大切に育てておりましたら、後には珍らしく大きな蚕になりました。或日その一匹の大蚕を表に出して、桑を遣ろうとしておりますと、家に飼っていた白犬が尾を振って前に見ていたのが、うっかりしているうちにその蚕を取って食べてしまいました。折角これまで一しょう懸命に大きくしたたった一匹の残りの蚕まで、犬に食べられてしまうというは、よくよく運の悪いことだと悲しみましたが、犬のしたことだからなんともいたし方がありません。犬は平気な顔をしてそこに寝ころんでいます。女はそれを見て、情ないと思って一人で泣いていました。そのうちに犬がくしゃみをしたので気を付けて見ますと、その鼻の穴か

ら白い糸が双方一筋ずつ一寸ばかりも垂れているのが、まるで絹糸の通りでありました。あまり不思議なので、糸の端を持って引いて見ますと、二筋ともどこまでも長く続いています。そこで試みにわくに掛けて繰って見たところが、二百三百のわくを巻いても、まだ其糸が切れません。大よそ四五貫目も糸が出たかと思う頃に、その白犬は倒れて死んでしまいました。これは神様のお使いだったかも知れぬと思って、犬を裏の畠の桑の木の下に埋めてやりました。その頃ちょうど京都には御大礼があって、天子様の御服を織る絹糸を、土地の役人が尋ね求めておりましたが、今一人の女の家では、養蚕は当ったけれども糸が黒くて、節が多くって御用になりません。ところが此方の糸を庭にかけてさらしているのを見ると、真白で光が美しくてまことに結構な品であったので、早速それを御用に立てました。白犬を埋めた裏の桑の木には、その翌年から蚕が自然に生れて繭を作り、これも同じような好い糸になりました。三河の絹糸がそれから後、いつ迄も他の諸国よりも優れていたのは、全くこの犬頭蚕の種であったからだという話であります。

狐の恩返し

とんと昔、爺様が朝起きて、内庭を掃いていますと、豆が一粒庭の隅に転がっていました。

これは勿体ないと裏の畠に持って行って蒔いて置いたところが、やがて芽を出してぐんぐんと大木になり、これは八石まではありませんでしたが、一本の豆の木に豆が一斗も二斗も実っていたそうです。

ところが或日一匹の狐がやって来まして、一度にその豆をぺろりと食べてしまいました。老人は真赤になって怒って、折角おれが丹誠をして作った大豆を盗んで食ってしまうとは憎い獣だ。ぶち殺してくれると言ってどなりますと、狐は大きにあやまってどうか宥(ゆる)して下さい。その代りにはお前様に金儲(かねもう)けをさせて上げますというから、それならばと言って、こらえて遣りますと、直ぐに一頭の良い駒に化けました。爺はそれを長者の家へ牽いて行って、高い値に売ってお金を儲けました。

それから四五日もすると、馬に化けていた狐はもう遁げて還って来ました。今度は一つ茶釜に化けて上げましょうと言って、まことによい頃合の茶釜になりました。爺はそれを又お寺に持って行って、お茶の好きな和尚(おしょう)に売りつけました。和尚がその茶釜を炉にかけると、きいんきいんと鳴ります。小僧が川に行ってその茶釜を磨きましたら、痛い痛い、小僧そっと磨けと言います。これは大変、茶釜が物を言いました。なんのそんな事があるものかと、和尚がうんと火を焚いてその茶釜をかけますと、狐はとうとう我慢がしきれなくなって、熱いぞ和尚がげえと言って、尻尾を出して遁げて行ったという話。(津軽五所川原)

聴耳頭巾

　これも昔奥州の方の或在所に、又一人貧乏な善い爺がありました。氏神の稲荷様にいつも生魚でも上げたいと思ったけれども、それも貧乏で思うようにはならぬので、或日お社に参って斯う言いました。氏神様申し、氏神様申し。おれはとても貧乏で生魚も上げることが出来ませんから、どうぞこの俺を食ってください。どうぞお願いでござりますと言って拝みました。氏神様は爺や爺や、何もそんなに心配をすることはいらぬ。俺もお前の難儀していることはよく知っている。それでは一つ運を授けて遣んべ。それこの宝頭巾を遣るから被って見ろ。これを被ると鳥でも獣でも、なんでも言うことが直ぐ解るからと言って、古めかしい赤頭巾を一つ、その爺に授けました。そうでがんすか。これは早どうも有り難うがんすと、喜んで早速そのきたない赤頭巾を懐に入れて出て来ました。そうしてゆらりゆらりと街道をあるいて行きますと、路傍に大きな樹がありました。その樹の下に休んでいましたら、いつの間にかついとろとろと睡っていました。

　そうすると浜の方から、一羽の烏が飛んで来て、疲れてその木の枝に休みました。すると又国中の方からも、一羽の烏が飛んで来て、同じ樹の上にとまりました。爺はこれを見て、

稲荷様に貰った聴き耳頭巾を、試して見るなら今だと思って、そっと出して被りますと、俄に頭の上で話の声がし始めました。浜から来た烏が、やあ暫くであった。おれは今まで浜の方にいたが、浜もこの頃漁がなくって、不景気で困るから飛んで来た。お前は又どっちから来たというと、おれはあらみの方から遣って来たが、いや不景気は何処に行っても同じだ。時に何か世の中に不思議なことはないかねと聞きますと、浜の烏は、別に珍らしいことでもないが、浜のある村の長者どんでは、土蔵を建ててからもう五六年にもなるが、土蔵の入り口の屋根を葺く時に、どうして匍い上ったものか一匹の蛇が上っていて、ちょうど板の下で釘を打ち付けられて、今に動けないで半死半生になっている。感心なことには雌蛇が食い物を運んで養い続けているが、ほんとうにお互いに苦労をしている。その思いが積り積って、長者どんの娘の体に障って永煩いをしている。あれは今のうちに土蔵の屋根の板を離して蛇を助けてやらぬと、蛇も死ぬし娘も死んでしまう。おれも再々あの屋根に飛んで行って鳴いて遣ったけれども、人間という者はなさけない者で、少しもそれを覚らないと言いました。相手の烏もほんとうに人間はそういう事になると、まるで何もわからぬものだと言い合って、そんだらば又此次に出逢うべなと、西と東とに烏たちは別れて飛んで行ったそうです。

　爺はこれはよい事を聴いた。早くその長者どんに行って娘を助け、又蛇の命も助けてやりたいが、なんにも支度がなくてこれでは出かけられないと、町裏をうろうろとあるいていま

すうちに、こわれた木鉢が落ちていたから、それを拾って紙を貼って頭にかぶり、浜の長者どんの門前に行って、八卦々々と大きな声で呼わって通りました。長者の家では娘の永煩いを治すのに、何がよかろうかと心配していた時だから、おいおい門前をふれて通る八卦屋、早く内さ上って八卦置いてくれと言いました。爺様は内に入って何八卦を置きますべと言うと、実はこの家の娘が永の病気で、今日か明日かという容態だから、なんとすれば良くなるか、その八卦を置いて見てくれと言いました。それでは病んでござる娘御の所に通してくれと言って、娘の枕もとに行って坐って、「二十里這うたる葛の葉は這えば二十里」という唱えごとを何度もくり返してから、前に烏からちょうど聴いて置いた話を、委しくして聴かせました。そうすると長者どんでは、如何にも八卦様の言う通り、五六年前に土蔵を建てたことがある。それではそんな事もあったかと、近所の大工を喚んで来て、早速土蔵の屋根板を離させて見ますと、果して一匹の蛇が体が白くなって、もう半分腐りかけて釘に打ち付けられていた。ああこれのことだと大事に笊に入れて屋根から下し、流し前に置いて物を遣って、暫く介抱して丈夫にしてから放してやりました。そうすると薄紙を剝ぐように、娘の病気も一日々々とよくなって、日数の経つうちにすっかり治ってしまいました。長者どんでは大喜びでお礼金は三百両、爺は忽ち大金持ちになりました。そうして家に還って急に氏神様のお宮を建て直し、今までないような立派なお祭りをしました。もちろん生魚も度々買って来て

供えました。

それから聴耳爺は、今度は好い着物を着て又旅に出ました。そうしていつかの大木の下で休んでいると、また西東から烏が飛んで来て、その木の枝に休んで世間話を始めました。一羽の烏が一つ町にばかりいてはつまらぬと言うと、もう一羽の烏が本にそうだが、おれの今までいた町には斯ういう事がある。町の長者どんでは旦那が大病で、今日か明日かという命だが、それは五六年前に離れ座敷を建てたとき、昔からあった庭の楠の木を伐り倒して、その切り株がちょうど離れの軒下になって、雨垂れに打たれている。それでも根が死に切らないものだから、生のある限りは芽が出て、育ちたいと精魂を尽すのだが、芽が出れば刈り芽が出れば刈り取られて死ぬには死なれず、そんならばと言って生きるには生きられず、その思いが旦那にかかって病気になっている。それに又山々の友だちの木が、毎夜のように見舞いに来るがこれも亦大へんなことだ。あれは生かさば生かすべし、又どうせ枯らす気なら、根からよく掘ってしまえばよいに、困ったものだと話しました。爺は烏の話を聴いて早速その町に出かけました。八卦々々、頼むから内の旦那の病が、どうすれば直るものか見てくれと云うので、長者どんの家へ喚び込まれました。ここには五六年前に建てた離れ座敷がある筈だから今晩はおれをその座敷に泊めてくれ。あや八卦殿はどうしてその離れのあることを知っているかと家の者がびっくりします。それも八卦で中てたが、先ず今夜は俺をそこに置

いてくれろ。明日は旦那の病気の元を、洗いざらい当てて見せるから、俺が言うまでは誰も入って来るなと言って、その晩は一人で起きて様子を見ていました。

そうすると真夜中頃になると、がさりがさりと近よって来る者の足音がして、楠の木よ、あんばいはどうだと言います。それに返事をするのはなんだか土の底からでも出るような幽かな声で、ああそう言ってくれるのは六角牛山の梛の木か、遠い所を毎度難儀をかけて済まない。おれは此通り一刻も早く死にたいのだが、それさえ思うように行かないので苦しんでいると言うと、なにそんなに力を落すものでないと、慰めて帰って行きます。又一時経つと、今度はしゅっしゅっという音がして来る者がある。楠の木どん、あんばいはどうかなと声をかけますと、又楠の木が以前のような声で、そういうお前は早地峰山の這い松だか。おれはとても助からぬが、こうお前たちに毎夜見舞いに来て貰っては申しわけがないと言います。ああそうだか。なんでもないことだから心配するな。今夜はつい五葉山の方へ遊びに行く通り筋だから、こうやってお前にも逢えたが、これが東と北とでは逢うこともむつかしい。そんなら春にもなって見たら又本復するだろうから、力を落さずに時節を待つがよいと言って、這い松も亦さっきのように音をさせて帰って行きました。爺は聴耳頭巾を被っていて、すっかりこの話を聴いてしまって、朝になると病人の枕元に案内して貰って、いつもの通りの葛の葉は二十里の呪文を唱えてから、昨晩の樹木の問答を詳しくして聴かせました。これは軒

下の楠の木だけの難儀ではない。諸処方々の高山の木までが、この為にえらい苦労をしているのだから、早くその根株を掘ってしまえと教えました。そうして根を掘って庭の木の神様に祭ったら、旦那殿の病気も、また薄紙を剝ぐように日ましによくなった。長者の家の者は皆大喜びで、そのお礼が又三百両。それを貰って家に還って来てからは、爺はもう慾を出さないで八卦を止め、自分も普通の長者になって暮したそうであります。（陸中上閉伊郡）

雀の宮

昔々野州の或田舎に、饅頭をまる呑みにして食べるのを、自慢にしている妙な人がありました。悪い者がよくその癖を知っておりまして、針を饅頭の中にそっと入れて置いたのを、知らずに例の通りまる呑みにしたものですから、腹が痛んで苦しんで寝てしまいました。そうして寝ながら障子を開けて外を見ていますと、雀が一羽、裏の韮畠に来て、しきりに韮の葉を食べていました。どういうわけだろうと思って毎日気を付けていたところが、そのうちに雀のお尻から、韮の葉にくるまって小さな針の折れが落ちたそうです。これは韮の葉を食べれば針が出ることを、神様が雀に教えさせて下さったのではないかと思って、試みに自分も韮を沢山食べて見ますと、果して針が出てしまって、痛みがすっかりなくなりました。そ

れで喜んでお社を建てたのが雀の宮で、今でもあの辺の停車場の名になって残っています。

黒鯛大明神

むかし土佐国のある山奥の村へ、浜から一人の魚商人が、魚を売りに入って行きました。寂しい山路で、路の脇の林の中に、誰かが罠をかけて置いて、それに山鳥が一羽かかっておるのを見ました。魚売りは之を見て欲しいと思いましたが、只取って行くのはよくない事であるし、そこにちょうど人がいないので、代りに自分の籠の黒鯛を三尾挾んで置いて、黙ってその山鳥を取って帰って来ました。その後から村の人が来て見て、山に黒鯛のいるのが既に不思議であるのにそれが山鳥の罠にかかるというのは只事ではよもあるまい。なんでも是は天の神のお示しであろうと、一同評議をして直ぐに小さな社を建てて、その三尾の黒鯛を齋い込めて、黒鯛三所権現と唱えて祭りました。その評判が伝わりますと、方々からお参りに来る者があって、社は大へんに繁昌しました。後に魚売りが又遣って来て、山鳥を持って行った話をする迄には、もう繁昌のお宮になっていたそうであります。

蜥蜴の目貫

昔ある一人のすぐれた彫物師が、まだ一向世の中にも名を知られずに、貧乏で暮していた頃の話だそうであります。或日庭に下りて一匹の蜥蜴の、石の間に遊んでいるのを見付けました。その蜥蜴の形が如何にも美しいので、いつ迄もじっと見ているうちに、ふとこれを彫刻して見ようという気になって、その形を写し取って、程なく一つの銀の目貫を作り上げました。我ながら好く出来たと思って、それを道具屋に持って行きますと、直ぐに買い取ってくれたばかりでなく、後から又一つ又一つと、次ぎ次ぎの注文がありました。いずれも上作と賞められて、それが評判になりまして、幾つ拵えても売れぬということはなく、次第に収入も多くなって、豊かな暮しが出来るようになりました。ただ奇妙なことには、この目貫を作り出すようになってから、何時庭前へ出て見ても、夏でも冬でも石の間から、必ず同じ蜥蜴が出ていて、目の前で遊んでいるのだそうです。始めのうちは別になんとも思いませんでしたが、段々に後にはそれが気になって、なんだか気味の悪いようにも感じられて来ました。それも他人の目には少しも見えず、只自分だけに見えるのでいよいよ我慢が出来なくなって、或時思い切って小石を打ち付けて、その蜥蜴を殺してしまいました。そうしたところがその

時から、評判の細工が急に下手になって、たまたま作っても誰も買おうという人がなく、蜥蜴の目貫の注文はさっぱり絶えてしまって、いつの間にか又元の通りの、貧乏な彫物師になってしまったそうであります。

長崎の魚石

昔支那の人をまだ唐人と謂っていました頃に、長崎の伊勢屋という家で、懇意にしている唐人が一人ありました。それがもう国へ還るという前に、この家へ一度遊びに来まして、土蔵の石垣に積んであった小さな一つの青石を、立ったり腰かけたりしていつ迄も眺めておりましたが、あの石を是非私に譲って下さいと、熱心に主人に所望しました。私の方では不用のものだから譲ることはなんでもないが、この石一つ抜けば石垣が崩れるかも知れず、後の造作が甚だ面倒だから、この次渡って来られる時までに、普請の序があろうから、必ずのけて置いて進上いたしましょうと答えますと、石垣を積みなおすのに金がかかるならば、この石の代として百両の金を出します。私は今度又来るかどうかも知れないから、是非とも今買い受けて還りたいと唐人が言いました。伊勢屋の主人久左衛門は百両の声を聞いて、始めてこの石の貴いものだということに心づき、少しばかり慾心を起して、却って即座に手放すこ

とを惜み、なんだのかだのと断りの口上を設けて、しまいには三百両まで出そうと唐人が言うのに、どうしても売ることを承知しませんでした。それから愈々唐人の船が出てしまってから、わざわざその青石を掘り出して見ました。そうして玉磨きの職人を呼んで鑑定をさせましたが、いかさま普通の石ではないようだというばかりで、少しずつ磨かせて見ても光も出ず、別に是ぞと変ったこともありません。あまり不思議なのでたがねを入れさせて見たところが、ちょうど真中から二つに割れて中から水が出て来てその水と共に、金魚のような赤い小鮒が、飛び出して直ぐに死んでしまいました。これはまことに惜しいことをした。三百両の金を取り損なったと言っておりますと、次の年にはその同じ唐人が、今度は千両の金を持って、青石を買いに又遣って来ました。伊勢屋は残念でたまりませんから、くわしく様子を話しますと、唐人も涙を流して悲しみました。あの石は私たちも名を聞いているだけで、他ではまだ一度も出くわしたこともない、魚石というこの世の宝であった。あれを気永に周りから磨り上げて、水から一分というところまで留めると、水の光が中から透きとおって、二つの金魚のその間に遊びまわる姿は、又とこの世にもない美しさであって、それを朝夕に見ていると自然に心を養い、命を延べる徳があると伝えられ、王侯貴人は如何なる価を払っても手に入れたいと望んでいる品であった。私はそれを本国に持ち帰って買い主を見つけ、妻子眷属と共に一生を安らかに送ろうと思っていたのに、今やその願い事も空しくなった。

こういう天下の奇玉の世に隠れ、又永く伝わらないのも天命であったかも知れない。私は最初からこの話をして置けばよかったのに、黙って買い取ろうとしたのが悪かった。今度こそは千両がその三倍になっても、是非とも買う積りでこの通り用意をして来ましたと言って、三千両の金包みを出して見せました。そうしてすごすご支那へ帰ってしまったそうであります。遠い国の商人は思うことを顔に出さず、又どんな場合にでも値段の掛け引きをする癖があり、日本の商人は物を知らずに、只慾ばかり深かった為に、昔は折り折りこんな飛んでもない損をしたのだそうであります。

瓜の大事件

むかし八幡太郎義家と安倍晴明と、忠明という名医と解脱寺の観修僧正という名僧と四人、御堂関白道長の家に来合せたことがあったそうです。その日は五月の一日で、奈良から一籠の早瓜を献上して来ました。今日は御殿の御物忌の日であるが、こういう外から来た物を、内に入れてもよかろうかどうかということで、早速先ず安倍晴明が占いをして、この瓜の中には一つだけ、毒気のある瓜があると言いました。それではと観修僧正に加持をさせますと、暫く禱っているうちに多くある瓜の一つが、ぴょんぴょんと跳ね上がるので、それに毒気が

あるということが知れました。それならば次には医師忠明が針を立ててその毒気を去るようにという命を受けて、その瓜を手に持って取りまわし取りまわし二所に針を立てますと、もう瓜は飛びあがらなくなりました。おしまいに、八幡太郎義家は、腰刀を抜いてその瓜を切り割って見ましたが、果して晴明の占いの通り、その瓜の中には一匹の小蛇が入っていました。そうして医師忠明の打った二本の針は、ちょうどその蛇の両眼に刺さっており、義家の腰刀はただなんとなく瓜を割るように見えましたけれども、ちゃんとその小蛇の首を切り落していたそうであります。

死後の占い

むかし北国街道のある寂しい村に、京都へ帰って行く旅人が、何人かの家来を連れて夕方に入って来て、他によい宿がないので、路傍の大きな家の、女がただ一人で住んでいる所へ、頼んで一晩泊めて貰ったことがありました。次の朝早く起きて、その旅人が出て行こうとしますと、家主の女が後を追いかけて来て、あなたには金千両の貸しがあります。それを返して置いて立って下さいと言いました。家来たちは余りに突然な言いがかりに驚いて、怒ったり嘲笑ったりしているのを、主人は物静かに先ず待てと之を制して、兎に角後戻りをして来

てくわしく其話を聴きました。どういうわけがあるかは私も知りませぬが、父が亡くなる時に私を前に喚んで、十年後の今月の昨日、北の方から旅人が来て泊るであろう。その人に話をすれば千両の金を返して下さるからとくれぐれも言い置いて死にました。それを楽しみにして待っているところへ、ちょうどその日にあなたが来て泊られたので、間違いのないことだろうと思いましたと言うのです。成程それでよく解った。お前の父は占い師であったと思われる。それで十年も前に今日私の来ることが、知れていたからそう言い残したのであろう。よしよしそれならば千両の金を、今直ぐに返して上げようと旅人は言いました。

実はこの旅人もまた有名な占い師であったのでした。それで再び昨夜宿を借りた大きなあばら屋に入って、家の中を方々あるいてまわりました。そうして最後に奥の間の一本の柱の傍に近よって、とんとんと叩いて見ました。その柱だけは中がうつろになっていて、他の柱とは音が別であります。お約束の千両はこの柱の中に入っている。すぐに取り出して成るだけ大事に使いなさいと言って、その旅人は京の方へ帰って行きました。女の父親は十年も前から一度は自分の娘の困ることを知っていました。そうしてその為に八卦を見て、ちょうどその頃に京の優れた占い師が、来て泊るということを見て置いたのでありました。易の術と親の愛情と、どちらか一つが備わらなかったら、とてもこういう計画は、立てることが出来なかったろうということであります。

乞食の金

むかし東京がまだ江戸であった頃、浅草の福井町に善五郎という貧乏人が住んでいました。日頃深く大黒様を信心しましたけれども、少しも金が出来ず、或年の暮れには、いよいよ困ってしまって、もう飢え死にをするより他はないという迄になりました。死ぬくらいならばいっそ身を捨てて、この近所の金持ちの家へ盗みに入り、少しなりとも金銭を取って来て、せめてこの正月だけは楽に越して見ようと思って、それを女房に相談しますと、泥棒をするよりは飢えて死ぬ方がよいと言って、賛成をしてくれません。それでもまだ思い切ることが出来ないで、そっと女房の寝入ったのを見すまして、家を出て近くの大家の塀の外に立って、内の様子を覗きました。それからなんとかして入って見たいと思って、その板塀に手を掛けて越えかけましたところが、雪の後なのでつるりと足が滑って、外へ落ちて気絶をしてしまいました。そうすると夢を見るように、大黒天のお姿がそこに現れ、あたりは光り耀いて山の如く金銀財宝が、その足元に積み重ねられてありました。この永い年月の間、一日として信心を怠ったことのない者に、どうしてこれ程数多ある物を、少しでもお恵み下さいませんかと言いますと、その方には授ける福分が少しもない。この金銀財宝にも主がある。その主

に頼んで借りるより他はないと、大黒様が言われたそうです。それでは何処にその主はおりますか。つい此さきの橋の袂に、寝ている乞食がこの金銀の持ち主だという答えであります。それにはびっくりしてしまって正気になりましたが、根が正直な善五郎ですから、すぐにその足で大黒の教えの通り、橋の袂に行って見ますと、成程一人の汚い乞食が、薦を被って寒空によく寝ていました。それを揺り起してくわしくわけを話し、証文を入れるから三百両だけ貸してくれと申しますと、乞食も驚いてしまってそんな事が出来るものかと言いました。でも大黒様の確かなお告げだもの、なんでもかでも貸すことを承知せよと、家へ連れて来て三百両の借り入れ証文を書いて渡し、おまけにこれから親類のつきあいをしようという契約をいたしました。さあこうして置けば、もはや金が見付かるかも知れない。先ず自分の家から探して見ようと、女房に手伝わせて床板をあげ縁の下を隈なく改めて見ると、隅の方に少し小高い所があって、その土の中からちょうど三百両の金が出て来ました。それを元手にして稼いでいるうちに、段々と身上がよくなりました。勿論かの乞食は早くつれて来て、相応に分配をして家を持たせ、両家共々に繁昌していましたが、善五郎夫婦には子供がなく、後に乞食の家の方から、養子をしてその財産を譲ることになりましたから、結局は大黒天のお示しの通り、福分はすべて乞食の家のものになってしまったわけであります。

拾い過ぎ

次にはこれも江戸の昔話であります。昔青山に門奈助左衛門という金持ちの武士があって、その家来に至って正直な何がしという男がおりました。暮れの二十八日に主人のお使いで、浅草の蔵宿に行って五十両の金を受け取り、それを大切に財布に入れて首にかけ、今の青山の電車通りの、玉竜寺の前まで戻って来ましたところが、路が悪いので転びました。急いで屋敷に帰って汚れた手を洗おうと思って、部屋の鴨居にその財布を引っ掛けて置きながら、すっかり忘れてしまって手を洗って主人の前に出ました。さて返事の口上を述べようとすると財布がない。あわてて物も言わずに飛び出して、急いで玉竜寺の門前まで行って見ますと、幸いにまだ人が通らなかったと見えて、小判が散らばって方々に光って落ちています。それを拾い集めて算えて見たら、三十八両までありました。十二両も不足したのは困ったことだが、兎に角申しわけをして後はなんとかしようと思って、家に帰って見ると鴨居の折れ釘に、ちゃんと自分の財布は引っ掛かっていました。それでは此方は拾い物であったと気が付いて、諸方へ知らせて待っていましたが、いつ迄も落し主が出て来ませんので、偶然にそれは自分の物になり、これを元手にして段々に立身したのは、全く常から正直の報いであったろうと

いうことでありました。最初に寺の前で倒れたのも、多分急いでいてその小判にすべって、転んだものらしいという話でありました。

山賊の弟

昔越後国の或農家に、兄弟の子供がありましたが、兄は小さい時から性質がよくないので、親も見限って勘当をしましたら、何処かへ往ってしまいました。そのうちに父は病んで死に、弟の方は母に孝行なよい息でありましたけれども、家がどうしても立ち行かなくなって、僅かの田地は売ってしまい、母は親類に預かってもらって、十六七歳の頃に江戸へ出て来て、ある医者の家に奉公に入りました。至って実直で給金は一文もむだに使わず、十年ほどの間に、色々の貰い物や何かを合せて、もう十四五両の貯蓄が出来ました。そこで主人に向って事情をくわしく話し、どうか母親のまだ丈夫でおりますうち、この金を持って生れ故郷に帰り、なくした田地をこの金で請け返して、家が持ちとうございますというと、それはよい心掛けと主人も感心して、別に路用の金を餞別に遣りました。それから江戸を立って遙々と越後の国へ帰って来ようとしましたが、途中上州の山路で山賊に出逢って、財布の金は勿論のこと、衣類身のまわりも残らず剝ぎ取られて、まる裸になってしまいました。折角十年余りも真黒になって働いて貯えていたものを、一日に取られてしまうことはなんたる情ないことかと思いましたが、兎に角これでは国へ帰ってもなんにもならぬ。此上は行き所もないから手下にでも家来にでもしてお前さんの所に置いておくんなさいと、山賊に向って頼んで見ますと、流石に不便と思ったものか、山賊は今奪い取った品物を荷造りしてこの男に背負わせ、襦袢一枚だけを着せて、自分たちの隠れ家へつれて行きました。二三日も山賊の所で厄介になっているうちに、色々と考えて見ましたが、盗人はとても自分の商売にもなりそうもない。まだ若いのだからもう一度江戸へ出て働いた方がよいと思って、その事を話して見ると山賊も同意しました。ついては着物は襦袢一つでもよいが、脇差しは道中の犬おどしに、是非返して下さい。あれは私が小遣いで、わざわざ柳原で求めて来た刀だからと言いますと、なるほど尤もの事ではあるが、一旦奪った物を返すということは、山賊の作法にはないことだ。腰の物ならばこの通りたくさんある。一本遣るからこの中からどれなりと持って行けと、奥から縄からげにした脇差しを一抱えも持って来て見せました。それでは頂戴しますと言って、可なり錆びたのを一本貰って、山賊の宿を出て来ました。江戸では元の主人より他に、頼るべき家とてはありません。それで又戻って今度の災難の始め終りを述べて、もう一度その医者の家で奉公することになりました。ところがこの主人は兼て刀剣が好きな人で、よく目利きなどを楽しみにしていましたが、山賊に刀を貰ったという話を聴いて面白がり、一度見た

いというので持って来て見せますと、これは見所のある脇差しだと言って、その道の心得ある人たちに見て貰いましたところが、果してあっぱれな名作であって、早速三十両に買い取ってくれた人がありました。これはなんともはや意外の仕合せでありますが、この金が出来ました以上は、やはり一日も早く帰りとうございますと、再び主人の許しを得て、又故郷の空に旅立ちました。上州から山を越えて行く路は、一度ひどい目に逢っているので、止めて他の方を廻って行こうかとも思いましたが、色々考えた末に又この路を帰り、おまけにわざわざその山賊の家へ訪ねて行きました。親方その後はお変りもありませんか。私は先日御厄介になった旅の者でござります。江戸であの脇差しが三十両に売れました。私の取られた金は十五両、これを皆貰っては私の方が義理が悪くなりますから、半分だけ返しに来ましたと言うと、山賊どもは驚いて、暫くは無言で顔を見合せておりました。その内に親方の山賊はこの男をじっと見て、お前は越後の人だというが、越後は一体何村だと尋ねますから、くわしく在所や親の名などを申しますと、賊は大きな溜め息をつきました。どうも虫が知らせるというのか、若しやそうではないかという気がしてならなんだ。悪いことは出来ぬものだ。おれは十何年前に勘当せられたお前の兄だ。お前は小さかったから顔を覚えておるまいが、おれはとうとう斯んな商売になっている。同じ血を分けた兄弟でも、こうも心持がちがうものかと、別れた親のことを思い出して二人で泣きました。そこで仲間の者一同を呼んで、永

らく一しょに暮したが、おれはもう止めて帰らねばならぬ。ここにある貯えの中から、ただ少しばかり路銀に持って行く。後はみんなでどうなりとしてくれと言って、兄は弟と連れ立って生れた村に帰って来ました。そうして親の売った田畠を買い戻して、自分は一旦勘当を受けた者だから、弟に家の跡目を継ぐようにと言いましたが、弟はなんと言っても承知しません。そうして兄弟で譲り合っているうちに、なんと思ったか兄は髪を切って、出家になって又行く方が知れなくなったそうです。昔の越後伝吉を始めとして、以前はこういう篤実な若い者が、村に多かったことは実際でありましょうが、ただその話が此様にくわしく、江戸の方まで伝わっていたことだけは、少しばかり不思議であります。

力士と産女

昔羽後の横手に妹尾五郎兵衛という人がありました。ある日夜の明け方に蛇の崎の橋を通りますと、橋の袂に若い女が立っていて、ちょっとこの子を抱いていて下さいと言って、赤子を預けて何処へか行ってしまいました。その赤んぼが、抱いているうちに段々重くなって背伸びをしたり、こわい眼をして見せたりしましたが、五郎兵衛は勇気のある人で、じっと我慢をして抱いていましたら、そのうちに女は戻って来て、大そう礼を言って金財布をくれ

ようとしました。そんな物は欲しくないと断りますと、そんなら力を上げましょうと言って、手拭を一筋くれて置いて行きました。翌日この手拭を使って顔を洗おうとする時に、それを絞ると二つに切れ、又絞ると四つに切れたので、始めて産女に大力を授かったことがわかりました。この人の話は色々残っております。ある時などはこの蛇の崎の橋の上で、大きな木を曳いて来る人夫と喧嘩をして、その木を取って川の中へ投げ込みました。それを引き上げるのに五十人の人足が、三日もかかったということであります。

これと多分同じだろうと思う話を又こういう風にも語り伝えております。昔梅津忠兵衛という横手の武士が、夜中に半夜替りの交替でお城に登ろうとして、城山路の七曲りという所で、一人の婦人に出逢いました。今夜は骨折りの仕事が一つあるので、是非あなたの助けを得たいと思って、ここに来て待っていました。どうぞ暫くの間この子を抱いていて下さいと言って、赤子のまだ産髪も剃っていないのを忠兵衛に預けて置いて、忽ち飛ぶようにしていずれへか行ってしまいました。赤子を抱いて出勤も出来ないので、そこに立って稍〻しばらく待っているうちに、段々にその子が重くなり、始めは五貫目ほどにもなったかと思ったのが、十貫二十貫三十貫にもなって来て、金とも石とも譬えようのない重さでした。ところが余り苦しいので我を忘れ、思わず念仏を唱えると、忽ち赤子は形さえもなくなって、自分ばかり茫然として立っていました。そこへ前の女が襷をかけ汗を流し、よほど働いたような顔色をして帰って来まして、今の念仏のお蔭で親子の者が助かった。自分はこの山中の氏神であるが、今夜氏子の何がしの家に産があって、自分の力だけではむつかしいと思った故に、武士で念仏を申す人を見かけて、その助けを求めたのである。産髪の赤子はまだ生れない前の魂、それが重くなったのは、ちょうど産の重かった時であったが、念仏の力に助けられて、無事に産れてこんな嬉しいことはない。お礼には子孫の末になるまで、大力を授けてやると言って、その姿は見えなくなりました。翌朝顔を洗おうとして手拭を絞って見ると、手拭が切れて二つになり、又折り重ねて絞って見ると、それが四つに切れたので、始めて昨晩山の中で力を授かったことを知ったそうです。それからその氏子の家を尋ね合せると、いかにも昨晩は産があって、ひどい難産で苦しんでいたのが、ちょうどその赤子の重くなった時刻であったということでありました。

女の大力

むかし紀州に毛原の茗荷という人がありました。ある時この村の観音淵の上を通っていますと、不意に美しい気高い女の人が現れて、どうかお願いだからこの水の底に光っている物を除けて下さい。私は竜宮の乙姫というものですが、あれが光っているので竜宮へ帰ること

が出来ないからと言いました。茗荷は快く承知して、川に飛び込んでその光る物を取り上げて見ると、それは一寸八分の観音の像でありました故に、それから淵の名を観音淵というようになったともいえば、或は又それが唐鋤の尖であったとも謂っております。竜宮の乙姫は大そう喜んで、これで漸く竜宮へ帰ることが出来る。お礼には何がよいか。遠慮なく言うようにとのことであったので、それならどうぞ千人力を授けて下さいと言って、その場で直ぐに千人力になって戻って来ました。ところが千人力では踏むたびに路がこわれてしまうので、あるきにくくて困りました。それでもう一度願い直して、相手一倍ということにして貰いました。百貫目の物が来れば百貫目の物を持つ力、五百貫目なら此方も五百貫目の力が出るので、いつも千人力を持っているよりは、ずっと便利なことでありました。この力は筋を引いて、子孫にも永く伝わる筈でありましたが、それにはただ一つの約束がありました。決して女に物を手渡しせぬことで、若しそんな事をすれば、力が女の方へ行ってしまうと、固く乙姫に戒められておりました。ところが、或日高野山から、お味噌を貰って帰ったときに、ついうっかりしてそれを女房に渡したので、もうその力は男の子には伝わらず、なんの役にも立たぬものになりました。その代りにはこの家に生れた娘たちは、いずれも非常な大力でありました。ここから嫁を貰った家では、風呂に入っているときに夕立などが降って来ると、いつでもお嫁さんに風呂桶に入ったままで、家の中へ運び込んでもらうことが出来たそうであります。

毛原の茗荷の大力の話も、土地には今でもまだ色々と残っております。高野山の興山寺で屋根を葺き替えるときに、大きな箱棟を上げることがむつかしくて、何百人という人が寄ってたかって騒いでいました。それを通りかかって見物していた茗荷が、枴をかたげてぽかんとして立っていて、やにこい奴等じゃと独言をいいました。そんなことを言うなら上げて見よと皆が言うと、よし来たと唯一人で、その箱棟を肩に載せて屋根の頂上に登って置いて来たそうであります。一同はその大力に驚きましたが、もう一ぺん試して見ようと思って、おい茗荷それは裏がえしだぜと下から言いますと、ああそうかと、又肩を入れて、ぐるりと一つ廻して向けかえました。後で今のは実はうそであった。どうか元の通りに置きかえてくれと言いましたけれども、今度は怒ってもう承知をしませんでした。それで紀州の高野山の興山寺の箱棟だけは、今でも表と裏とが逆様になっているということであります。(紀伊那賀郡)

人によると茗荷が相手一倍の力を授かったのは、水の底の光り物を取り除けた為ではなくて、毛原のうずわ淵の神様から、俎淵の神様へ手紙を持って行く、お使いをした御褒美だったとも謂っております。いずれにしてもその大力は、水の女神から授かったということは同じであります。

大い子の握り飯

昔近江の石橋の里には、大い子という大力の女があったそうです。ある旱の年に、村の人たちが意地が悪くて、溝を堰き留めて大い子の田には水を遣るまいとしました。大い子は黙っていて、夜中にそっと行って七尺四方もある大きな石を持って来て、溝のまん中に置いて流れないようにしてしまいました。村では朝起きて見てびっくりして、急いでその石を取り除けようとしましたが、中々僅かな人では動かすことも出来ません。大勢が集まって来て運ぼうとすれば、近所の田が皆荒されてしまいます。そこで村の者は弱りきって、大い子の家へお詫びに来ました。これからは幾らでも、こちらの田へ水を入れるようにして、もう決して意地の悪いことはしませんから、どうかあの石を片付けて下さいと歎願しました。それならばといって又夜の中に、そっとその大石を邪魔にならぬ所へ、持って行って置いたということで、それを大い子の水口石と呼んで、ずっと後までもこの村に残っていたそうです。

それから又この大い子に悪戯をして、大しくじりをした人の話もあります。ある時越前国から佐伯氏長という力士が、京に出ようとしてこの石橋の里を通りましたときに、若いきれいな娘が水の桶を頭に載せて、川から帰って来るのを見かけました。それが大力の大い子だ

ということは夢にも知りませんから、後から近よって行って、桶をおさえている手の腋の下をくすぐろうとしました。そうすると娘は少し笑って、片手を桶から放して佐伯の手さきを、腋の下に挾んでしまいました。それが抜こうとしてもどうしても抜くことが出来ません。仕方がないのでとうとう大い子の家まで引っ張られて附いて行きました。それからやっとその手を離してくれて、全体あなたは何をする人かと尋ねますから、実は越前国の力士であるが、朝廷の晴れの相撲に召されて、これから都に登るのだと申しますと、世の中は広い、まだどのような強い人が他の国から登って来るかも知れません。もう少し私の家にでもいて、修行をしてから行った方がよいでしょうということで、幸い相撲の期日までにまだ十分に日数がありますので、それから三週間、この大い子の家で練習を積むことにしました。大い子は毎日飯を強く炊いて、自分でむすびを握って越前の力士に食べさせました。始めの一週間は、なんとしてもその握り飯を、食い割ることが出来ませんでした。次の七日になるとやっとのことで、握り飯を食い割ることだけは出来るようになり、三週間目には始めてむしゃむしゃと自由に食べることが出来たそうであります。私の握ったむすびが、それくらい楽々と食べられるようになったら、もう大抵大丈夫でしょう。早く支度をしてお出かけなさいと言ってくれたので、佐伯氏長は大喜びで、京都の相撲の節に出て行ったそうであります。

日田の鬼太夫

むかし豊後の日田に大蔵永季、通称を鬼太夫という力士がありました。大力の評判が段々に高くなって、後に京都の相撲の節に召されて、出雲の小冠者という天下一の力士と、力を競べることになりました。どうか首尾よくこの勝負に勝ちたいものだと思って、京都に上る途中で筑前の老松明神の社に参詣（さんけい）し、信心を凝らして武運を祈りました。その夜明神は鬼太夫の夢枕に立って、こういう秘密を教えて下さいました。出雲小冠者の母親は、日本一の力士を産もうと思って、その子の腹の中に在る間、毎日々々砂鉄ばかりを食べていた。それで小冠者の五体は鉄のように堅い。ところがたった一度だけ、ついその母親が甜瓜（あまうり）を食べたことがあった。その為に身の内に一箇所だけ、柔かなところがある。それは額のこの辺だということを明神様が教えて下されたのだそうであります。鬼太夫はその御蔭で、相撲の晴れの勝負の時に、小冠者の額の肉の部分を突き破って、勝つことが出来ました。それ故に鬼太夫の子孫の者は、永く老松明神を氏神として祭っていたということです。

稲妻大蔵

むかし肥前の諫早（いさはや）の稲妻大蔵という相撲取りは、母が八天岳の山の神に禱って生れた子でありました。天狗様（てんぐさま）の申し子であったので、如何（いか）なる敵に会うても勝たぬということはなく、とうとう日本一の大力士となりました。ところが或年の晴れの勝負の前に、相手になる力士が色々と頼みますので、あまり気の毒だと思って、つい憐（あわれ）みの心を起し、たった一度だけ勝ちを譲ってやりました。そうしたら忽ち天狗が稲妻の身を離れて、それからは急に弱い力士になってしまったという話であります。（肥前北高来郡）

藤抜き喜内

昔加賀の大杉谷の瀬領という村には、喜内という力の強い人があったそうです。その評判が遠い国々まで響いたので、ある勇士がわざわざ力競べに来ました。その時喜内はちょうど路傍の田圃（たんぼ）に出て田植えごしらえをしていましたが、その武士が立ち寄って、喜内の家は何処（どこ）だと尋ねました。早くも力くらべに来たものと知って、喜内は片手に唐鋤（からすき）の横木を持って、

そのさきに馬のくっついた儘、それを引き上げてあれあの屋敷ですと、馬と唐鋤とで指して教えたそうです。武士はその大力に仰天して、さてはお前が喜内であろうと言いますと、いいや私は喜内の家の下男ですと答えました。下男でさえもこの通り、馬の附いた唐鋤で路を教えた。ましてやその主人はどのくらい強いかわからぬと言って、もう力を競べる勇気もなくなって、すたこらと遁げて帰ったという話であります。（加賀能美郡）

阿波の大力熊野の大力

むかしむかし阿波国に有名な一人の相撲取りがありました。紀州の熊野に獺田川というえらい大力がいると聞いて、それを負かして日本一になろうと思って、海を渡り山阪を越えて、遙々と力競べに、熊野の田川越えの獺田川の家まで尋ねて来ました。家には年を取った母親が、ただ一人で留守居をしております。倅は今薪を採りに山へ行きました。やがて帰って来ましょうから先ずおあたりなさいと言って、五尺もある火鉢を片手に持って、上り端へ出しました。阿波の力士はそっとその火鉢を動かして見ますと、中々両手でも挙りそうにありません。母親でさえこの通り、息はどうであろうと驚いている所へ、なんだかその辺が俄に暗くなって、急に空が曇ったかと思うと、それは熊野の大力が山ほどの柴の荷を背負って、山

から戻って来たのでありました。これではとても叶うまいと思いましたが、折角遠くから名乗って来たものだから、ただ帰ってしまうことは出来ません。それで二人は江川の柳潟の浜へ出て、力競べの相撲を取りました。阿波の大力が先ず布の犢鼻褌をしめると、熊野の大力は太い竿竹をひしいで、それをまわしに締めこみました。そうして直ぐさま阿波の大力を摑んで、頭よりも高く差し上げて、天か地かと問いました。仕方がないので地と答えますと、はや自分は砂浜の砂の中に、深く埋まっていたということであります。獺田川のいるうちは、とても日本一を阿波の方へ取ることは出来ぬとあきらめて、さっとその夜のうちに帰ってしまったといいますが、今ではそんな大力の子孫は熊野にはいないそうです。そうしておそだ川という力士の名前も、どうやら少しばかりおかしいようであります。（紀伊西牟婁郡）

仁王とが王

むかしむかし日本の仁王様の所へ、唐からが王様が力競べに遣って来たそうです。その時団子をこしらえて御馳走にしようと言って、仁王様の家内が鉄の棒をちぎって団子を作り、豆の粉をかけてお茶菓子に出しました。そうしてが王様を試して見ようとしたのですが、が王は我慢をして、これは結構だと言って食べてしまいました。これならば兄弟分になって、

観音様の門番をしてもいいと言って、二人がそれから門番になりました。それだから今でも一方の仁王様は鉄の棒を持って立っています。一方に大きな口をあけて、その棒を食べようとしているのが、唐のが王様だということであります。

旦九郎と田九郎

昔々、旦九郎と田九郎の二人の兄弟がありました。兄の旦九郎は金持ちで智慧(ちえ)が足らず、弟の田九郎は悪がしこい癖にいつも貧乏でありました。或日弟の田九郎の家では、茶釜の湯を沸かして余りに煮えくりかえるので、暫(しばら)く板の間におろして置きますと、そこへちょうど兄の旦九郎が遊びに来ました。おやこの釜は珍らしい釜だな。火もない板の上でぐらぐらと湯がわいていると兄が言いました。それは私が今度手に入れた火なし釜という宝物ですと田九郎は答えます。それならば十両で私に譲ってくれと言って、大急ぎで旦九郎はそれを持って帰って行きます。そうしてよく洗って水を入れて、板の間に置きましたけれども、いつ迄(まで)経ってもお湯はわきません。旦九郎は怒って田九郎の所へ談判に行きました。そうすると田九郎はそんな筈はない。が、もしや兄さんは茶釜を洗いはしませんか。なに、洗いましたか。洗ってしまってはだめだ。洗いさえしなければお湯が沸いたのに、惜しいことをしたと申し

ました。

その次には又田九郎は、小判を二枚、馬屋の中へほうり込んで置きました。それを又兄の旦九郎が来て見付けて、おやこの馬は小判をひっていると言いました。それは私の秘蔵の金ひり馬という馬です。それならばおれに金五十枚で、是非売ってくれと、代金を払ってさっさと牽(ひ)いて行きました。そうして立派な厩(うまや)を新しく建てて、外へ行かぬように繋(つな)いで置きました。併(しか)しいくら待っていても、小判などは落としません。又だましたかと大そう腹を立てて、早速弟のところへ掛け合いに行きますと、兄さんの家ではもしや厩を建て直して、板の上であの馬を飼ってはいませんか。ああそうですか、それは残念なことをした。あの金ひり馬は板張りの厩に繋いで置くと、忽ちただの馬になってしまう馬ですと、田九郎は答えたそうであります。

分別八十八(やそはち)

むかしむかし奥州のある村に、八十八という名前の男が六人住んでいました。綽名(あだな)がなくては誰が誰だかよく分りません。そこで一人は気が荒いから外道(げどう)八十八、一人は博奕(ばくち)が好きで博奕八十八、一人は田を作っているから百姓八十八、一人は米の商いをする故に米屋八十

八、又一人は盗みをするので、盗人八十八、今一人の八十八は智慧があるところから、人が分別八十八という名を付けて間違わぬようにしていました。

ところが或日外道八十八は、博奕八十八と喧嘩をして、うんと打ったら博奕八十八が死んでしまいました。殺す気はなかったのでびっくりして、困って分別八十八の所へ相談に来ました。それではその死骸を百姓八十八の田の水口に持って行って、そっと田の畔にしゃがませて置いて見よと教えてくれました。

その晩百姓八十八は田の水を見廻りに出て見ると、自分の田の水口に誰だか知らぬがしゃがんでいます。憎いやつだ、又水を盗みに来たなと言って後から棒で一つ打つところりと倒れ、それをよくみると博奕八十八でありました。飛んだことをした、どうすればよかろうかと、これも外道八十八と同じように分別八十八の家へお土産を持って相談に来ました。それではその死体を空俵につめて、米屋八十八の倉の前の、米俵の一ばん上に置いて来て見よと教えてくれました。

そうするとその次の晩に、盗人八十八は米屋八十八の倉の前から、米かと思ってその俵を盗んで来ました。家に戻って俵を開けて見ると、それは博奕八十八の屍骸であったので、肝を潰してしまいました。どうしたらよかろうかと思案に暮れて、やっぱり分別八十八の所へお礼を持って智慧を借りに来ました。

そんなら今夜遅くなってから博奕八十八の家の表戸を叩いて、今戻ったぞと言って見よ。きっと女房が怒っているから、やかましいことを言って戸を開けぬに相違ない。そうしたら死んだ博奕八十八を、門口の井戸の中へ投げ込んで来るがよいと教えてやりました。それで盗人八十八は教えて貰った通りに、夜更けに博奕の家の戸をことことと叩いて、嬶よ今帰って来た。開けてくれと作り声で言いました。そうすると家の中では、果して嬶が大声を出して、今帰ったもないもんだ。お前見たいな人は死んだ方がいいとわめきました。その時に屍骸を井戸の中へ、どぶんとほうり込んでさっさと帰りますと、後で女房はその音に大騒ぎをして、村中の人を頼んで博奕八十八を引き揚げてもらって、それを見ておいおいと泣いたそうです。

分別八十八だけは皆からお礼を貰って、一人でうまい事をしました。(陸中上閉伊郡)

二反の白

昔五月のお節句の前に、五月人形を箱から出して来て、嫁と姑とが口争いをしました。この人形は田原藤太だ、いいや八幡太郎だと言い張って、どちらも負けておりません。それなら明日は和尚さんの所へ行って、どちらが本当かきめて貰おうと言って、その晩のうちに、

姑はそっと白木綿を一反持ってお寺に行き、どうか私を勝たせて下さいと和尚に頼みました。それが帰って行くと又暫くして、今度は嫁の方もまた白木綿を持って、同じ事を頼みに来ました。それで翌日二人が揃って来て、どちらが間違っているか、和尚さんならば分りましょうと言いますと、和尚は笑いながら、これは俵藤太でも八幡太郎でもない。こちらでも一反の白、あちらでも一反の白、即ち仁田の四郎ただとりという人形だよと答えました。

無言くらべ

昔々ある所に、餅の好きな夫婦がありました。餅を搗いて散々に食べて、後にもう少しばかり残った。これは今晩黙り競べをして、勝った方が食うことにしようと約束しました。ところがその晩にあいにく泥棒が入って、そこら中を探してあるきました。夫婦は二人ともちゃんとそれを知っていましたが、物を言うと負けになって、餅を食われてしまうから我慢をしていました。そうすると泥棒はいい気になって、方々探し散らしておしまいに戸棚を開け、餅の木鉢を持ち出そうとしました。それを見ていると女房はもう堪らなくなって、あれ盗人が餅を持って行くと、大きな声でわめきました。今まで辛抱していた亭主はやっと口を開いて、餅はもうおれの物だと、どなったそうであります。なんと、皆さん、泥棒がそれを承知したでしょうか、どうでしょうか。

古屋の漏り

むかし雨の降る晩に、爺と婆とが睡ることが出来ないで、二人で話をしていました。虎狼よりも怖いのは古屋の漏りだと言っておりました。それを表を通っていた虎狼という獣が立ち聞きして、それではこの世の中には、おれよりもまだ恐ろしいもりというのがあると見える。これは油断がならぬと思っていると、ちょうどこの家に入ろうとした馬盗人が、馬かと思って虎狼の背なかに乗りました。これはたまらぬ古屋のもりにつかまえられたと、虎狼は一散に飛んで走りましたので、馬盗人はふるい落されて、路傍の空井戸の中に堕ちました。そこへ猿が遣って来て何しているかと尋ねますと、今この穴の中に古屋のもりという化け物が隠れたと、虎狼が答えました。そんな化け物はないだろう。おれが検査してやろうと言って、出過ぎ者の猿は、尻尾を空井戸の中へさし込んで探りました。穴の底の馬盗人がそれをしっかりと摑みました。猿もびっくりして強く尻尾を引こうとすると、根元からぷつりと切れてしまいました。猿の尻尾の短くなったのは、又この時からだという説もあります。

（肥後阿蘇郡）

清蔵の兎

むかしむかし清蔵は友だちと共に、山へ遊びに行きましたところが、草の中に兎が一匹ぐっすりと昼寝をしていました。ああこんな所に兎が死んでいると、連れの者の一人が言いますと、清蔵は早速鼻をつまんで、道理で先程からえらく臭いと思っていたと言いました。そのうちに兎が人の声に目を覚まして、驚いて走って行ったので、なんだ昼寝をしていたのかと、その友だちがびっくりしますと、又清蔵が口を出して、だからおれもなんだか耳が動くようだと思っていたのだと言いました。それからこの方いい加減なことを言う人を、清蔵さんの兎のようだと、たとえ言にいうようになりました。こういうおかしい人の昔話は、まだ色々の事が沢山にありますが、今度はその中の三つ四つしか、お話をすることが出来ません。

鳩の立ち聴き

昔ある山家の村で、爺が川の向の山畠に働いていました。川の此方の爺が声をかけて、おい今日は何を蒔くかと聞きますと、返事はせずに小手招きをしました。川を渡ってその傍ま

で行って、どうしたかというと、その耳に口を寄せて、おれは大豆を蒔いている。豆をまくのがどういうわけで内証事だ。それでも鳩に聴かれると大変だから。（上野吾妻郡）

杖つき虫

むかし座頭が一人、琵琶を背なかに負うて、ある山家の村を通っていますと、川の向うの畠の爺が、川のこちらの爺へ声をかけました。やいやい、あれを見ろ、大きな杖つき虫が出たわ。六年前にもあの虫の出た年は小豆がよく取れた。今年も小豆が豊作であろうといいました。

首筋に蒲団

むかし貧乏で藁を被って寝ていました人が、恥かしいから藁の中に寝ていると言うな。人の前では蒲団と言えと、常から子供を教えて置きました。そうすると或時お客に行った席で、ととよ、ととの首筋に蒲団の葉がくっついているよと、その子供が言ったそうです。

知ったかぶり

昔よそに行って始めて饂飩を御馳走になった人が、給仕の子供になんという名前だとそっと尋ねました。子供は自分の名を訊かれたのかと思って、弥二郎ですと答えました。それを覚えていて今度は村の人たちと、町へ出て来た時に、干し饂飩の掛けてあるのを見ました。そうすると早速つれの者に向って、あれあれ生弥二郎があんなに乾してある。あれをゆで弥二郎にして皆に食わせて見たいなと、言ったそうであります。

やせ我慢

昔々ある威張った武士が、田舎の農家に来て泊りました。今晩はひどく寒い。莚でも掛けて寝て下さいというと、身共はたびたび軍に出て、いつも野宿に物を掛けて寝たことなどはない。無用なことだと言ってごろ寝をしました。そうすると夜中に寒くなって来て困りました。それで家の者を起して、おいおい亭主、この家の鼠には足が洗わせてあるか。いやそんなことはいたしませぬ。そうか、それでは踏まれると着物がよごれる、莚を出してくれ、掛

けて防ごうと言ったそうであります。

慾ふか

昔々ある所に、慾の深い婆があって、なんでもかでも人の物を見ると、若しいらないなら私に下さいと謂って貰って行きました。ある時その近所の家で猫が鼠を捕って、尻尾だけ食い残してあるのを、棄てようとしていた人たちが、如何にあの婆さんでも、これだけは下さいと言うまいと言って笑っておりますと、噂をすれば影という諺の通り、ちょうどその年寄りが遊びに来ました。そうしてその鼠の尾を見て、もし御不用なら私に下さいと言いました。それには誰も彼も驚いてしまいまして、一体あなたはこれを何にするのかと問いますと、はい持って行って錐の鞘にいたしますと答えたそうであります。

物おしみ

昔々、二人の物惜しみが隣りどうしに住んでおりました。或時一方の主人は隣りへ使いを遣って、釘を打ちとうございます。どうか御無心ながら少しの間、鉄槌をお貸し下さいと言

わせました。此方の主人はその使いの者に、さてその釘は木の釘か鉄の釘か。はい鉄の釘を打ちますと答えると首を傾げて、まことにお安い御用ですが、折り悪く鉄槌は外へ貸して今手元にありませんと言って、使いの者を返しました。その返事を聴いて借り主はあきれかえり、なんと世の中には吝い人もあるものだ。木の釘か鉄の釘かと尋ねて、鉄の釘ときくとうそをついて断った。鉄槌が痛むかと思って、作りごとをするのはけしからぬ。それではもういたし方がない。家の鉄槌を出して使おうと言ったそうであります。

盗み心

昔々ある男が、雪の降った日に人の家へ遊びに行きました。あまり外が明るかったので、俄に家の中に入ったら、真暗で夜のようでありました。ああ暗い暗いと言って上って行くと、上り端で何か冷たい物を踏みました。手に取って見れば小さな鉈です。前からこんな鉈が一つ欲しいと、思っていたところなので、悪い考えを起して誰にも見えまいと思って、その鉈をそっと懐へ入れました。ところが少しすると、家の中はさほど暗くもなく、家の人たちがこの様子を、皆でよく見ていたことがわかりました。これは困ったことをしてしまった。どうすればよいかともじもじして、いつ迄も話をしていますと、折りよく又一人、外から遊び

に来た者があって、入って来るや否や、ああ暗い暗いとどなりました。それを聞くと鉈を盗んだ男、それには好いまじないがあるから教えて遣ろう。これくらいの小さな鉈をちょっと懐に入れておると直ぐに明るくなる。私も今試して見たが、確かにその通りであったと言って、その鉈を今来た男に渡しましたそうです。

聟の世間話

むかし聟どのが始めて舅の家へ行く時に、何か前から面白そうな世間話の用意をして置いて、好い時刻に出すのがよい。ただ黙って食ってばかりいると笑われると、友だちに教えてもらいました。それでその日は一通りの挨拶がすみ、いよいよお膳が出て酒盛りも始まった頃に、聟は箸を膝の上に立てて、こういう世間話をしたそうであります。なんと舅殿、お前様は一かかえほどある鴫を御覧になったことがありますか。いやそんな物はついぞ見たことがない。そうでございますか、私もまだ見たことがござりませぬ。それでおしまい。

下の国の屋根

大うそつきの話にも、色々と珍らしいのがあります。昔ある村で井戸を掘ったら、いくら掘っても掘っても水が出て来ません。それでももっと掘れと毎日々々掘り下げて行くと、おしまいに黒く燻った藁が出て来ました。それを取り除けて尚掘ろうとすると、下から大きな声でどなり付けられました。上の国のやつ等は何をするか。それはおれの家の屋根の藁だ。それを剝いで行ってどうするかと、非常に怒られたという話。

博奕の天登り

むかしむかし、博奕に散々負けて帰って来た悪者が、一人で大木の下で賽を転がして、勝った負けたと面白そうに遊んでいますと、天狗が見ていて大そうその賽を欲しがりますから、それを天狗の羽団扇と交換して遣りました。この団扇で鼻を煽ぐと、少しあおげば少しばかり、強くあおげばうんと鼻が伸びます。団扇を裏がえしにして煽げば又段々に低くなります。それを持って長者の家の門の脇に立っていると、長者の一人娘が神参りに出ようとします。

その鼻を目がけてうんと煽ぐと、鼻が七尺にもなって外へ行くことも出来ず、広い座敷に鼻を横たえて毎日泣いていました。若しこの鼻を元の通りにしてくれることの出来る人は、長者の聟に取ろうという高札を立てると、団扇を懐に入れてこの男が聟に来ました。そうして少しずつ娘の鼻を低くして遣ったので、家の者が皆喜びました。それで得意になって寝ころんで涼んでいますと、男はうっかり睡ってしまって、自分の鼻を夢中であおいでいるうちに、鼻が段々高くなって、天に届いているのも知らずにいました。天の上の天の川では、その頃ちょうど川普請がありまして、橋杭が一本足りなくて探している所で、それへ下から不意に棒が突き出したので、これ幸いと縄を持ってくくって、さきの方を少し捻じ曲げました。痛いので気がついた長者の聟は、慌てて羽団扇を裏がえしにして、せっせとあおいで見てももう間に合いません。鼻が縮んで戻って来る代りに、体の方が橋杭に引き寄せられて、天に登ってしまいました。それで今でも天の川の底には、博奕うちが一人行っている筈ですが、普通の望遠鏡ではそれは見えないそうです。

空の旅

むかしむかし何事にも運のよい男が、への字の形に曲った鉄砲で雁を打つと、一発の弾が

順々に通り抜けて、何千羽と並んでいた雁が皆落ちて来ました。それを残らず帯の間に挟んで、路をあるいているとその雁が生き返りました。そうして高い空をどこ迄も飛んで、大和の或寺の五重の塔の上に、この男を残して行ってしまいました。さあどうかして降りて来ようと思って、上から大きな声で助けを求めると、寺や村から多くの人が出て、寺で一番大きな風呂敷を、四隅を持って塔の脇にひろげました。そうしてその風呂敷の上に綿を山ほど載せて、この上へ静かに飛んで降りよと言いました。一、二、三で飛んで降りた拍子に、風呂敷が袋になって四隅を持った坊さんたちが、寄り合って鉢合せをして眼から火が出ました。その火が綿に付いて風呂敷も五重の塔も、雁に担がれて飛んで来た男も焼けました。そうしてこの昔話だけがいつ迄も残っているという話であります。

昭和三十五年版の序

久しく国内の若い人たちに愛読せられ、今でもまだちっとも人気の衰えていない「日本の昔話」を、今度のように大規模に改定するということは、実は容易の事業ではなかったのだが、それを承知してもなお実現させたいと、私が念じていたのも永いことであった。年をとってからの世情の激変、これに対処しようと試みたさまざまの苦悶の中から、今に今にと心にはかかりつつも、ついこの問題だけはそっとして置く場合が多かったのである。その上になお一つ、今までの同志の中にも、特にこの方向に心を傾けていた者が少なく、または自由にその進路を改める者もあって、新たにこの方面の労作を共にしようという人は得にくかった。だから結局は多くの先進者と共に、ただこの素志の存在と、もしも幸いにそれが実現したならば、これこれの功績を挙げたろうに、という類の予測をもって終ったかもしれない。ところが「日本の昔話」に取って、幸運なことには、丸山・石原の二人の女性が、自分たちも時代の災厄をしたたかに体験しつつも、終始一貫して心をこの問題に傾けられた。しかも老翁の心弱さ、ある時はもう絶望して、昔話の整頓まではとても力が及ばない。これは女性

にでもまかせて置くがよいのだと、憎らしいことをいって見たり、しかも稀々にはまた思い返して、今の状態でもし自然の変動にまかせて置くと、せっかく永い年代にかけて、世界の全面に拡張し、しかも経路なり変遷なりが跡づけられる文字以前からの「かたりごと」が、粉々になって散乱してしまうのになア、などと愚痴をこぼして萎れている日もある。この笑ってもよい両面の立場を、女性だけに多分によく理解して、今度は勇気を出してこの難事業を引受けてくれることになったものであろう。今度の改訂版は勿論終局ではない。できるものならばもっと同志を育てて、日本を一つの研究中心にする所まで進ませてみたい。

小さな本に大きな序文は滑稽だが、ついでに読んでもらいたい人が多くいるから、もう少し書いて置きたい。「日本の昔話」が始めて世に出たのはざっと三十年の昔であって、私の学問もそれからやや進んだし、一方にはまた昔話の採集量も大分増加し、もとは本島の北端だけといってもよかったのが、このごろは県市郡のほぼ半分、南は奄美諸島から琉球先島までも伸びている。もちろんその中には詳しいもの略なもの、元の話に忠実な記述、多少は忘れたのや補ったものもまじっているが、もうこれだけあれば大体にある土地だけにあって他では一つも採集せられておらぬものなどは無い。稀にもしあれば珍しい残留で、特に注意をしていると、遠く離れた土地から思いがけず類型を見付けられる楽しみもあり、またにせもの、こしらえものとの見分けは格別むつかしくない。

昔話のハナシという日本語は、たしかにいつからという証明はないが、少なくとも中古以前の文献には見えず、東北方面では今でもカタルをもってこれを表出しているようで、たぶんは今昔などの例の如く、日常の談話もモノガタリであったのが、それを物々しい語りに限るようになって、次第にハナシという語の用途を必要にしたのであろう。無端事だからハナシだという解などは、ちっとも信用するに足らぬが、今でも中部以西では、まだ動詞としては使わぬのが普通になっている。考えてみると他の一方の昔話とても、必ずこれを用いたのには意味があったろう。南島の古い神歌にも、しばしば「むかしからけさしから」という対句があって、現在でないことのみは明らかで、時は少しも確立していない。のちわれわれの現在というものからは遠くまたは近く、時の繋がりは説くことのできぬ場合で、それを計量のできない過去に置こうとしたのが、恐らくは最初からの用法であった。今の世の文芸の習慣とはちがうか知らぬが、求めて捕われない境涯に身を置いて、夢見ようとしたものと私は見ている。それで西洋の幾つもの国で、民話または民間説話と訳してもよい名を使い出しても、おつきあいにその迹を追う気にはならない。いわゆる昔話を数多く聴いて覚えて、孫子や若い者に一度はして聴かせようと思っている老人には通じようがない。ミンワとは何ですかと問うような人たちが、実は日本のもとの形のものを知り、またうそをつかないでそのまま次の代に伝えようとしている。ミンヨウ（民謡）の方だって同じだといわれそうだが、こ

れは文学と同じに真似の上手な若い人が早く覚え、すぐ取次いだり改造するからそうは困らない。われわれの大事な昔話は、もう覚えている人が少なく、この戦乱の間にぐっと減ってしまった。そんなにまで骨を折って、辛うじて村々の隅に残ったものを、無くしてしまわずともよいじゃないか。

今ごろそのようなことをいってももう遅いと、あきらめきっている人はすでに多かろうが、これでもわれわれは少しは働いているのである。ただこの一巻の「日本の昔話」だけが、三十年前のまだ採集の進まなかった時代にこしらえたままであるために、少しく不本意な点が認められるのである。いよいよ種切れになった区域、たとえば小さな島々で若い人たちは急いで外に出で、帰って来たころには話ずきの年寄も世を去って、誰に尋ねようもないところとか、工場や町中の忙しい人ばかり住む区域で、言葉が入交り人の気持がわかりにくく、またそんな世話まではする者が無いという場合は多かろうが、言われて膝を打つまでの人はともかく、にこりとするぐらいの理解者は相応にあると思う。私の思い出の一つは昭和十一年の秋、昔話の採集手帖というものを千部以上こしらえて、これをなるべく分散した地域の小学校に配布してみた。世上によく知られた昔話百種のあらすじを印刷して、その各〻の後に若干の白紙を添えて記入に供え、巻頭にはできるだけ簡明に採集者の参考になることを書いた。その手帖による採集の結果を見せて下さるなら、返却する時にまた一部進上します、と

いう意味の手紙を添えた。それに対しては一冊も「はいできました」といっては来なかったが、礼状や受取は多く届き、またその前後よくこれを見た人の消息を受取った。栃木県などはいろいろゆかしい昔話のある地方だが、むしろ完成を期してか、またはただ多忙でか、手帖を返してくれた人はなかった。今ではもう名も覚えぬが、ある山村の校長さんは、家に帰ってから母や妻子と共に炉端でこの手帖を読んで聴かせたことを告げて来た。一時は炉端がしんとして、女たちは大息をついた。そんな話まで聴こうとする人が東京にもあるのかといいましたと書いてよこした。私は当時その手紙を若い人たちに見せて、少し間を置いて行ってみるようにすすめたが、多分はそれっきりになったものと思う。今から考えるとこれもせっかちな方法であった。たとえ全部でなくともせめて三分の一くらいは書かないと、へいできましたと返して来るわけがない。これはあまりにも事務的な、アメリカ人みたいな計画だったと思う。

それは当り前だよ、そんな計画なんかに乗って来る者が、今時あるものかと批評した人もあったが、今日とはその「今時」が少しちがっていたようである。この手帖よりは数年前、「旅と伝説」というよく売れた雑誌に、二回にわたって昔話の特集号を出してもらって、全国の読者からその土地の昔話を募集して見た。その応募者には若干の知人もまじっていて、とにかく一冊の大部分を占めるほどの寄稿が得られ、まだたくさんの不適当なものを残した。

昭和六年の第四巻の四号には、「昔話採集の栞」という文を添えて、それが本になって今残っているが、この時はこれという意外な経験もなく、むしろ新たなる地方学者の熱意を高め得たと思う。それから三年目の昭和九年十二月号の方には、応募者に新人の顔ぶれもあった代りに、ちっとも採集でない新作品で、しかも共産主義の教育を念じた民話もまじっていた。かねて風説としては聴いていたが、あるいはその方式には系統があって、こちらにも早すでに入って来たのかと、測らずも大切な経験を得たことであった。文芸にこの程度の活用があっても、それは各人の自由であろうが、われわれの目的はどこまでも史学の探究であるから、昔話を知りたいという者に、虚偽の事柄を教えようとするのは、よくないことだと警戒することにした。そうしてごく近ごろになるまで、こういう文学作品ともいえぬような、目的ある作り話を提供する者が、民話の名をもって流布する場合があったらしいのである。主義や政策を別として、これを民話と呼ぶことは文字の用法にも反する。こういう侵害を警戒するためだけにも、自分らだけは民話という名を避けようとしている。日本の村人たちには、そういう紛らわしい言葉は用いさせたくない理由である。

話が思いの外長たらしくなったが最後にもう二つ、報告して置かねばならぬ事実がある。その一つは私の計画していた「昔話研究」という小さな雑誌、これは昭和十年の五月から丸一年は、「旅と伝説」が引受けて出してくれたが、それから後の一年あまりは、継承した某

書院が新店で力が弱く、その雑誌も第二年度までで終ってしまった。私たちの事業は心軽く思い立って、やがてはまた頓挫し、これぞという成果も収め得なかったに反して、一方の「旅と伝説」などは、業主の萩原正徳君が純情に国を懐い故郷の奄美の島々を愛し続けた故に、内外に多くの友人を得て、昭和三年の初頭から同十八年の終り近くまで、休まずに雑誌を出しつづけて、幾つとなき未知の領域を開拓して来た。学士院の中村清二先生を始めとし、思いがけない学者方がごく自由な心持をもって、自分の旅や感想を書いていられる。私の如きもちっとは押売の嫌いはあるけれども、余裕があれば進んで彼の雑誌のために書き、それが次々とたまって、何冊かの本の分量になっている。それよりも奄美諸島、更に沖縄出身の学徒までが、機会あるごとに故郷の島を談じ、その中には喜界島の岩倉市郎君の如き、優れたる学徒が世に現われ、もはや新たには作れないいろいろの記録を世に留める因縁を結んでいる。私の昔話研究などは中途半端であるが、なんでもかんでも南北をあわせ考え、これから生れ出る空想を楽しむ癖があるのも、ありようは多くは「旅と伝説」に暗示を受けて、次々と南島の民間伝承、特に島々の昔話を捜しまわったお陰であった。実は私がこの序文の中で説こうと思っていた灰坊太郎の話においても、私が最初特に印象を受けたのは沖永良部島の例であった。これは継子の娘が竈の前にばかり置かれたからシンドレラと呼ばれたのと、日を同じくして語るべき昔話であった。日本の若い人たちはシンドレラの美しさを説こうと

するが、これがわが国の米ぶくろ粟ぶくろと同じ話だということはまだ知らず、われわれの珍重するミス・コックスの大冊は知っている人でも、支那では西暦八世紀に世に出た「酉陽雑俎」の中に、すでに同じ話が載せられていることを、まだ心づかぬ人ばかりが多いかと思う。われわれのこれから明らかにして行きたいことは、単にこういう昔話の一致ということだけではない。それよりもまず目の前のことを問題として、どうして遠い異国の端々に同じような話がちがう言葉をもって語り伝えられているかを考えなければならぬ。外国人に相談しただけでは、いつか宣教師が来たときに教えて行ったのだろうということになるかもしれない。やっぱり辛抱して近隣の老人の話を聴いて見ることを私は勧めるのだが、話がこうくどくては、この老人はまず落第であろうか。

昭和三十五年四月

解説

小澤俊夫

柳田国男は昭和五年三月、アルス社から、日本児童文庫11『日本昔話集(上)』を刊行した。それがのちに『日本の昔話』と改題され、春陽堂少年少女文庫のなかに入れられ、さらに昭和十六年九月、三国書房から出版された。第二次大戦後、昭和三十五年の五月、その改訂版が角川文庫として刊行された。

本書は改訂前の『日本の昔話』である。そこで改訂前の版と改訂版とのちがいが当然問題になるので、前者を五年版、後者を三十五年版と称することにして、すこし解説を加えたい。

三十五年版は、柳田の序で述べられているように、丸山久子、石原綏代が、柳田の意を受け、五年版以降の全国における昔話記録作業の成果をふまえて、日本の昔話を整理するためにおこなったものである。

三十五年版の「あとがき」で、丸山と石原は、改訂の目的をつぎのように述べている。

「当時はまだ昔話の収集が進んでいなかったので、先生は一冊の本にまとめるだけの数をそ

ろえるのに苦心され、したがってその中には正確には昔話ということのできないものも幾つか含まれておりました。今度版を改めて出版することになったおもな目的は、そういう不適当な話を除いて、そのかわりにその後新しく採集された材料の中から選んだ昔話を補うことでありました」

　そしてそこに収められた昔話の性格については、こう述べている。

「ここにのせた話が必ずしも昔話としていちばんすぐれた内容や形をもっているというわけではなく、また、必ずしも日本の昔話を最もよく代表するものを集めたというわけでもありません。もちろんなるべくすなおな、整った形で語られているものをできるだけ広い地域から選ぶことに心がけました」

　こうしてできあがった三十五年版『日本の昔話』は、柳田がその概念の確立に努めた「昔話」にふさわしい、整った形をもった昔話集である。それは、口伝え文芸としての日本の昔話を概観するに適した集成であり、それなりの価値をもつことを認めるに、わたしもやぶさかではない。それはひとことでいえば、三十年代以降、数多く出版されるようになった、口伝え昔話集の原型をなす。また別のいい方をすれば、それは、現在数多く出版されている昔話集と同一線上にある。

　ところで、丸山・石原が三十五年版の「あとがき」で、「まだ昔話の収集が進んでいなかった」ために、「正確には昔話ということのできないものも幾つか含まれて」いたと書いた、その五年版とはいかなるものだったのか。それが本書である。

　わたしはこの五年版を読むと、まことに新鮮なおもしろさを感ずる。そのおもしろさとは、大ざっぱにいえば、三十五年版からみて三十年前、現代からみて五十余年前の日本の昔話集であるということである。現在の整った昔話を収めた多くの昔話集になれた目には、古めかしくもみえようが、同時に新鮮なおもしろさをたたえている。

　そのことをすこし具体的に述べてみたい。

　その一。日本の昔話は、柳田国男・関敬吾の『昔話採集手帖』（一九三六〈昭和一一〉年）での話型認定の試み以来、柳田の『日本昔話名彙』（一九四七〈昭和二二〉年）を経て、関の『日本昔話集成』（一九五〇〈昭和二五〉年～一九五八〈昭和三三〉年）にいたる過程で、話型がほぼ確定されてきた。ある話型を他の話と区別し、その内容を、サブタイプなどを含めて特定することができるようになってきた。そのことは研究の進歩ということができる。ところが五年版では、まだそのように話型としてはっきりした姿をとっていない話がみうけられる。例えば、「猿聟入り」「炭焼小五郎」「山姥の宝蓑」「矢村の弥助」「狐女房」「大歳の焚き火」「狐の恩返し」「仁王とが王」「旦九郎と田九郎」「古屋の漏り」などである。

　これらの話は、現在認定されている話型の内容からみると導入部がものたりなかったり、

重要なモティーフが欠けていたり、他の話のモティーフを含んでいたりするので、現在の話型の概念からすると、整っていないことになる。しかし、現在の選び抜かれた昔話集では味わえない、民衆の土くささのようなものを感じさせてくれる。選ばれて活字になった昔話のような、整ったものばかりが、民衆のあいだで語られていたわけではない。そのことを五年版はよく示している。整った昔話ばかり読むことの多い読者には、かえって思いがけない新鮮さが感じられることだろう。

その二。現在全国各地の調査者、研究者によって刊行される昔話集は、整った形の昔話を選りすぐってある。そして伝説は伝説集として一括され、世間話は昔話集あるいは伝説集の片隅につめこまれ、体験的な話は無視される。ひとことでいえば昔話偏重の風潮が強い。

それに対して五年版は、昔話のなかに伝説を数多くまじえ、実話的なもの（「泥鼈の親方」「やろか水」「御辛労の池」「比治山の狐」「湊の杙」「長崎の魚石」「死後の占い」「乞食の金」「拾い過ぎ」「大い子の握り飯」「藤抜き喜内」など）さえ収めている。農村に話を聞きにいくと、昔話ばかり聞かせてもらうわけではない。農村での口伝えの世界には、あらゆる種類の話がふくまれているのである。三十五年版の「あとがき」では、「一冊の本にまとめるだけの数をそろえるのに苦心され」たので、「正確には昔話ということのできないもの」も含まれていると書かれているが、かえってそれによって、日本の農民のあいだでの口伝えの世界に近いものが提示されているということができる。昔話、伝説、世間話といった用語は、元来研究者の方で分類するために使っていることばであって、農民のあいだでは、おしなべて口伝え、いい伝え、むかし、であったことを思えば、五年版のような混在はむしろ自然なのである。それゆえに、この本は今読んでもおもしろく感じられるのである。

日本の口承文芸研究には、昔話偏重の傾向があることはすでに述べた。ヨーロッパ、例えばドイツでは、口承文芸研究には、口承文芸という概念をひろくとって、ひと口話、なぞ、ことわざ、思い出話伝説など、あらゆるジャンルの研究がおこなわれている。

ここで昔話と伝説とのちがいにふれておこう。昔話は洋の東西を問わず、「昔むかし、あるところにお爺さんとお婆さんがありました」という意味のことばで始まるのをみてもわかるとおり、時代、場所、人物が不特定である。これに対して伝説は、「安政三年、大口村の守屋善兵衛が」というように、時代、場所、人物を特定している。

話の内容の信憑性についていえば、昔話はそもそもおとぎばなしであるから、人に信じられようとは思っていない。一方、伝説は信じられることを欲している。

そして昔話は一定の様式をもって語られるのに対して、伝説にとっては、事実の伝達だけが重要であって、それを表明する一定の様式はもたない。

この区別は、ヨーロッパではグリム兄弟以来、日本では柳田以来いわれている古典的区別

である。もちろん個々の話についてみれば、伝説か昔話か、にわかに断じえないことはつねにおきるが、そのこと自体、農村で伝えられているとき、それほど明確なジャンルの区別がなかったことを暗示している。

昔話には高度な文芸性があり、その背景に神話的世界をもつものもあるなど、口承文芸のなかで昔話が高度な芸術分野であることは十分認めるが、ひるがえって、農民の口伝えによる文芸の世界ということに重点をおくならば、昔話以外のものにも目を向けなければならないことは、あきらかである。

農村で口伝えの話を聞かせてもらうとき、あるひとつのできごと、例えば狐に化かされたことを、ある人は自分の体験として話してくれる。別な人はそれと同じできごとを自分の祖父が体験し、自分に話してくれたという。また第三の人は、隣村のおじが体験し（あるいは他人から聞き）、自分に話してくれたという。このように、同じできごとが体験実話として（第一の人）話されたり、伝聞実話として（第二と第三の人）話されたりする。第二の人のばあいは垂直方向の伝聞であり、第三の人のばあいは水平方向の伝聞である。垂直方向の伝聞のばあい、祖父が自分の父の体験を聞いたなどとなると、現在までの時間的距離は長くなり、その間に伝説化する可能性は十分にある。同様に、水平方向の伝聞のばあい、隣村のおじが、そのまた隣村の人から聞いたとなると、距離が（従って時間も）長くなり、ここでも

また伝説化の可能性がある。

このように体験実話―伝聞実話―伝説（あるいは―世間話）という関係は、切れ目なく連続していると考えられる。そして、このような全体が、農村での口伝えの世界を成しているのである。

五年版は、一地域での口伝え全体を示しているわけではないが、各地からのいろいろな話を収めることによって、それに近い形を示しているといえる。

さて、日本の昔話のかなりのものが、外国の話と共通性があるということは、ふしぎであるが事実として認めないわけにいかない。古い昔には、現代で想像するよりもっと多く、外国との深い交流があったと考えられるのだが、昔話の類似については個々の話型について、綿密な研究が必要である。五年版では、上述の如く昔話がすくないので、外国との共通の話も多くはない。

欧米の昔話研究者たちのあいだで共通のカタログとして使用されているアールネ＝トムソン共著『昔話の型』（The Types of the Folktale）（略号AT）に登録されているものと照合して、本書のなかで多少とも共通性のある話はつぎのとおりである。

「猿の尾はなぜ短い」AT2「尻尾（しっぽ）の釣り」、「海月（くらげ）骨無し」参照AT91「心臓を家においてきた猿」、「夢を買うた三弥大尽」と「蛸島（たこじま）の虻（あぶ）」参照AT1645A「宝の夢が買われる」、「米囊粟（こめぶくろあわ）

嚢」参照AT403「黒い嫁と白い嫁」、「瘤二つ」参照AT503「こびとの贈り物」、「海の水はなぜ鹹い」参照AT565「魔法の臼」、「旦九郎と田九郎」参照AT1539「かしこさと軽はずみに信じること」、「分別八十八」参照AT1537「死体が五回殺される」、「古屋の漏り」AT177「どろぼうと虎」。

柳田は一九三六（昭和一一）年の『昔話採集手帖』をはじめとして、昔話を「採集する」という表現を使っている。この五年版への序文は子ども向きであるためそのことばはないが、三十五年版には頻出している。それ以来、日本の大方の研究者、調査者のあいだでもこのいい方が疑問をもたれずに使われている。

石や植物のばあいはいざ知らず、村のお年寄りが心のなかにしまっていた話を「採集する」ということは、妥当な表現と思えない。ましてや口承文芸の研究は、名もない民衆の伝承を、真に日本の文化の一分野として尊重するという思想のうえに立っているのである。人生の先達である村のお年寄りに相対して話を聞かせてもらっているとき、わたしには、これが「採集」作業だとはとうてい思えない。本書が昭和五年初版時の装いをもってふたたび世に出るにあたり、世の人の関心が日本の昔話に向けられることを喜びつつ、時代もかわってきているのだから、心のなかにしまってあるものを「採集する」という発想はやめにしよう、と提案したい。

（昭和五十八年五月）

本書の底本には筑摩書房版『定本柳田国男全集』第二十六巻（昭和四十五年七月刊）を用い、丸山久子氏の校訂を得た。

文字づかいについて

新潮文庫の文字表記については、なるべく原文を尊重するという見地に立ち、次のように方針を定めた。

一、口語文の作品は、旧仮名づかいで書かれているものは現代仮名づかいに改める。

二、文語文の作品は旧仮名づかいのままとする。

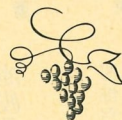
三、一般には常用漢字表以外の漢字も音訓も使用する。

四、難読と思われる漢字には振仮名をつける。

五、送り仮名はなるべく原文を重んじて、みだりに送らない。

六、極端な宛て字と思われるもの及び代名詞、副詞、接続詞等のうち、仮名にしても原文を損うおそれが少ないと思われるものを仮名に改める。

日本(にほん)の昔話(むかしばなし)

新潮文庫　草47＝3

昭和五十八年　六　月十五日　印　刷
昭和五十八年　六　月二十五日　発　行

著者　柳(やなぎ)田(た)国(くに)男(お)

発行者　佐藤亮一

発行所　株式会社　新潮社

郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話　業務部(〇三)二六六—五一一一
　　　編集部(〇三)二六六—五四四〇
振替東京四—八〇八番

定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・錦明印刷株式会社　製本・錦明印刷株式会社

ISBN4-10-104703-0　C0139